著♥山田隆司
監修♥（株）サンリオ
イラスト♥宮川知子

おねがい♪マイメロディ
短編（たんぺん）これくしょん

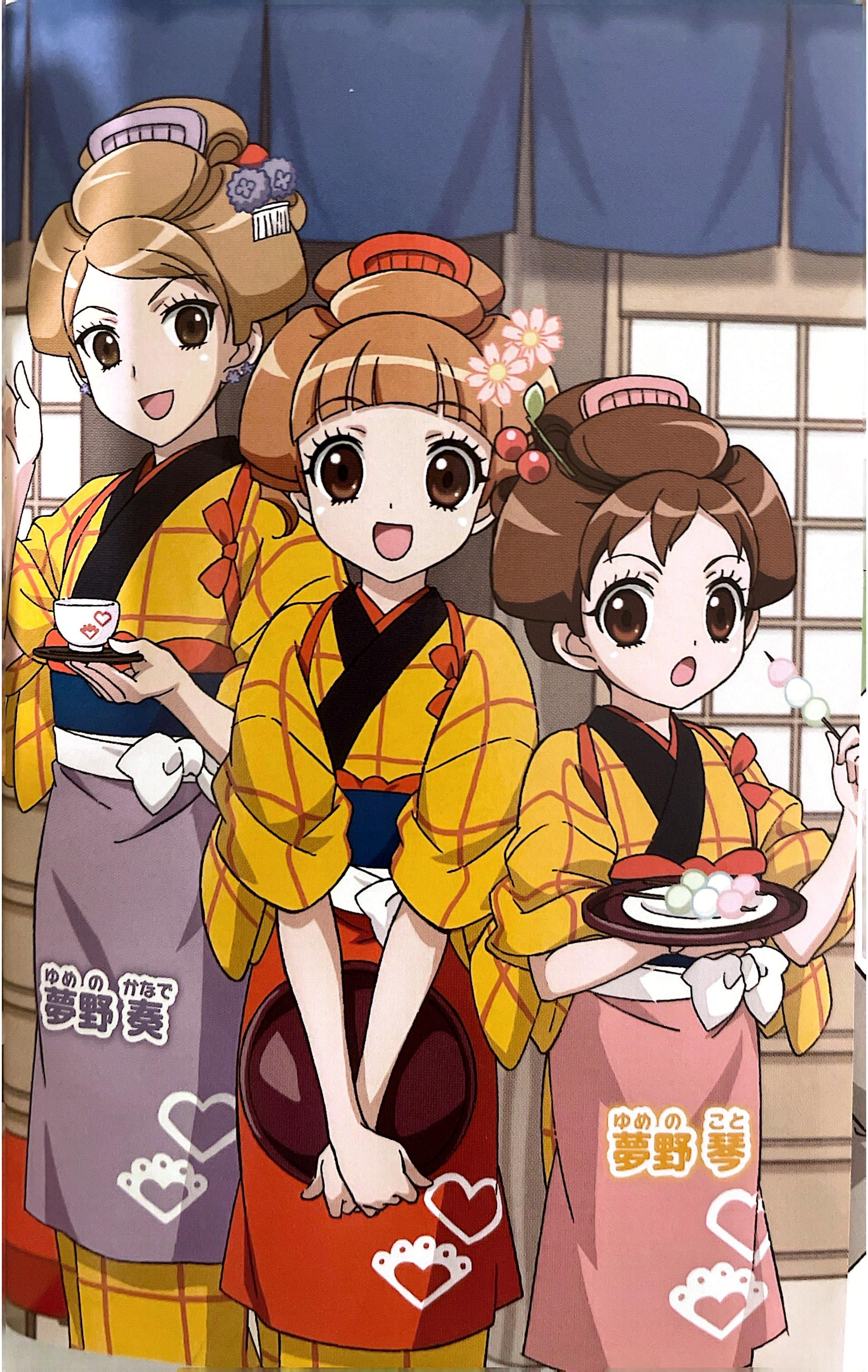


原案♥おねがいマイメロディ製作委員会

スマッシュ文庫


おうひさま
王妃様
おうさま
王様
こぐれ かける
小暮 駆
マイメロディ
ゆめの うた
夢野 歌


セバスチャン
ひいらぎじゅん
柊潤
セバスタン
バク
マイメロディママ
クロミ
ひいらぎけいいち
柊恵一



ゆめの かなで
夢野 奏
ゆめの こと
夢野 琴

おねがいマイメロディ

短編(たんぺん)これくしょん

おねがいマイメロディ　短編これくしょん

もくじ

第一話　普通のマイメロに戻れたらイイナ！



通称マイメロことマイメロディの住むマリーランドは平和な国だ。穏やかな気候に穏やかな住民たちの住む、夢のような世界、それがマリーランド。

とはいえ、ほんの少しはブラックなところもある。それは、例えばヤキソバの上の青ノリ、ショートケーキのイチゴ、牛丼の紅ショウガみたいなもので、なくても大きな問題はないが、ないとちょっとばかり寂しい。そんなアクセント程度のものだ。

クロミや仲間たちのヤンチャぶりや、マイメロママの毒舌や、王様のミーハーなところとか。どれも苦笑レベルで済んでしまう。

実際のマリーランドは人間の世界に影響されていて、これまでも存亡の危機は何度もあった。そのたびにマイメロや仲間たち、夢野歌やその姉妹と友人たちの活躍があって平和が保たれていることを忘れたわけではない。ただ、多くのマリーランドの住民はゆっくりと流れる時間の中、穏やかに過ごしている。

そんなマリーランドで起きた最大の事件、それがマイメロの死（実は仮死）と復活と、外惑星からやって来た巨悪を倒したことだった。動かなくなってしまったマイメロに住民たちは驚き哀しみ、復活に喜び、悪を倒して戻って来たことで沸き立った。一時期重罪人扱いされたクロミも、マイメロたちと一緒に戦ったことで復権し、無事にマリーランドに戻って来ることが出来た。

マリーランドに戻ったマイメロは、いつも通りの生活を送るはずだった。マイメロが家を出ると、最初は近所の人たちや友達が元気なマイメロを見て安心して声をかけてくれた。ご近所ヒーローみたいなものだ。しかし、今や、

「マイメロ、お外に出るのも大変だよ〜〜」

口コミと物珍しさからマイメロを見に来る人たちが増え、また戻ってはその話をする。そんな繰り返しで、一か月もたたないうちにマイメロの家は聖地か観光地かのようになった。

「パパにも理由は分からないが、そんなに長くは続かないよ、マイメロ」

「まるでアイドルみたいね、マイメロ。まあ、人のうわさも七十五日っていうじゃないの」

マイメロママのことわざはちょっと違うような気がするが、マイメロパパもマイメロママも最初はのんびりしたものだった。しかし、娯楽の少ないマリーランドには、滅多に起きないイベント。ましてやマイメロは国葬にもなったので、全国に顔と名前が知れ渡っていた。で、マイメロは思ってもいない事態に、

「なんでなんで〜〜？」

と慌てているわけだ。

マイメロママとパパの言う通り、しばらくすれば普通の生活に戻れるとばかり思っていたマイメロは、一向に収まらない人気ぶりに、さすがに参っていた。

一方クロミの方はというと、マイメロを殺した犯人扱いされていたお蔭で、マリーランドに戻って来てすぐは、なかなか誤解が解けずにふて腐れていた。

「ちぇっ、なんだいなんだい、マイメロのヤツばっかチヤホヤされてさ」

身近にいたバクやクロミーズ５の仲間たちは理解しているが、元々良いイメージを持たれていないクロミは、真実を話しても理解してもらえないと分かっていた。

「あたいだって、しっかり活躍したのにさ」

それで、グチも出ていたわけで、

「クロミ様、落ち着くゾナ。我々にヒーロー・ヒロインは似合わないゾナ」

バクがふて腐れるクロミを慰めると、

「ああーーん？」

クロミにすっごく恐い顔で睨まれ、バクはたじろぎながらも、

「で、でもクロミ様っ、最初の頃よりはイメージ良くなったゾナ。これも我々バク兄弟の布教活動のお蔭ゾナ」

後ろ指を指されるのは慣れっこだが、今回は完全に誤解なだけに気分が悪いクロミだった。だが、バクの言う通り最初の頃に比べてヒソヒソとうわさされることも少なくなった。まあ、元通りの状態に戻っただけなのだが。
「そーいや、最近は普通だな。で、何でお前たち兄弟のお蔭なんだ？」
クロミが首を傾げながら言うと、
「でしょでしょー、クロミ様」
得意満面でバクが取り出したのは、一冊の小さな本で、
「ここにバッチリ、クロミ様とクロメロディの活躍が描いてあるゾナ」
「貸してみろっ」
バクから取り上げ、クロミは本を開いた。子供用の絵本のようにカラフルで、マイメロとクロミ、クロメロディが敵をやっつけた様子がイラストコミックのように描かれている。
「なんか、ちょっと盛ってないか？　あたいらこんなだったたっけ？」
魔法少女みたいにキラキラしているイラストに、クロミは閉口して本を返し、
「これを住人たちに配ってたのか？」
バクはチッチッと指（？）を振り、
「これはお土産を買ってくれたお客さんに渡しているゾナ。おまけゾナ。このクオリティ

の高さとお得感が売れ行きに拍車をかけているゾナ」

マイメロ人気が盛り上がり、周囲の町や村から人々が集まって来るのを知ったバクが町の入り口に出店して土産品を売り出していたのだ。聞けば、イラストも文章もバクの弟たちが描いたものだという。当然、お土産のお菓子も弟たちの手作りだった。

「へええ、ずいぶん手際のいいことだな」

クロミがジロリとバクを見た。

「つっ、つまり…… 弟たちの意外な才能と、ネタは新鮮なうちが勝負という、バクの商才の結集ゾナ。お蔭でだんだん儲かってきたゾナ」

一瞬うろたえたが、すぐに得意そうにふんぞり返るバクをクロミが張り倒し、

「あたいのお蔭で儲けたんだろ。あたいの取り分はちゃんといただくからな！」

「ひどいゾナーー！」

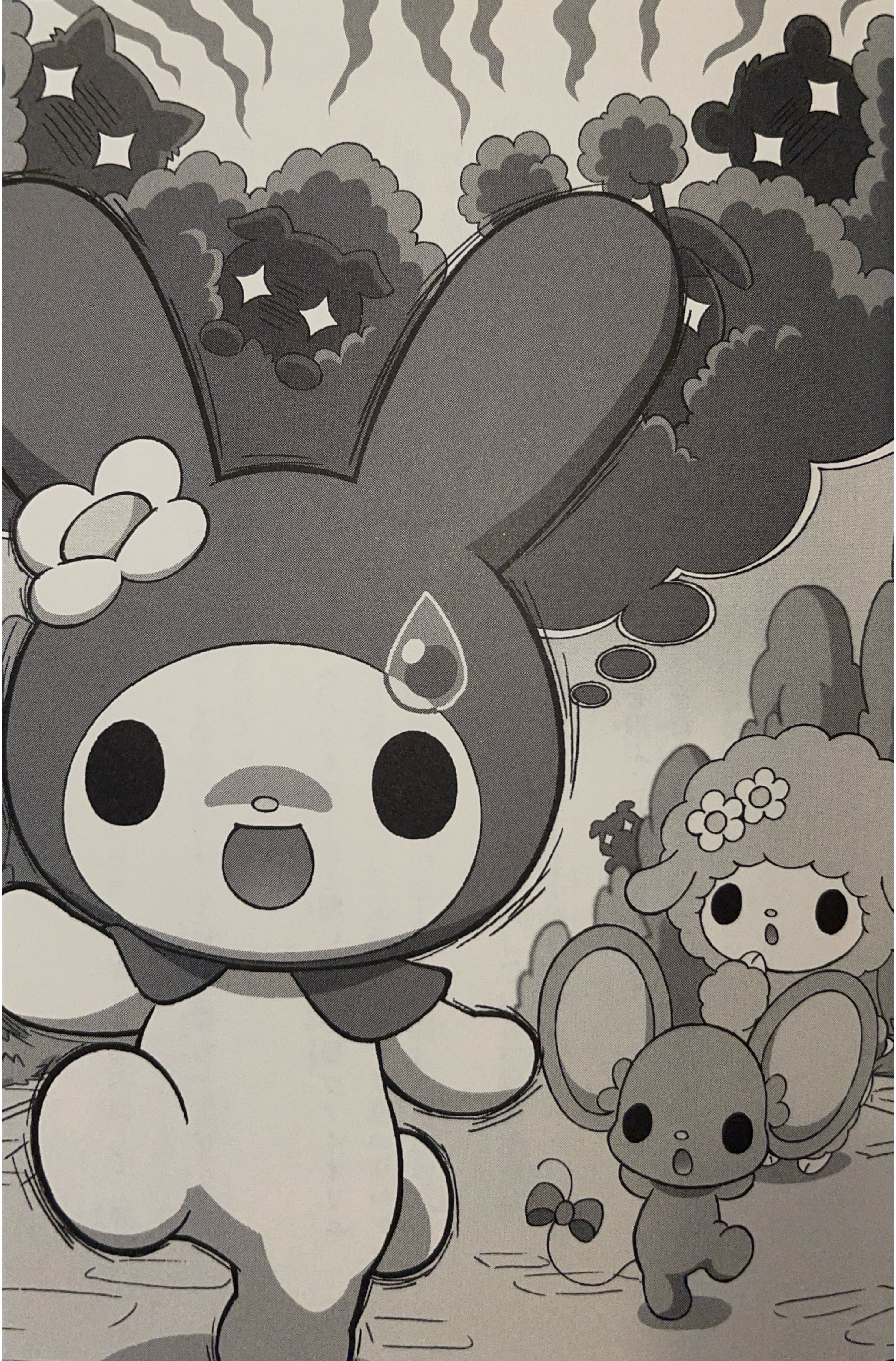
クロミではなくマイメロの人気なのだが、そんなことは口に出せるはずもなく、バクはうっかりしゃべってしまったことを後悔した。

バクの商才のお蔭か、マイメロの人気は一向に下がることがなく、逆にどんどんうわさが大きくなっていった。

「マイメロ、なんだか怖いよ〜〜」
観光客が家の周りにチラホラいるくらいならと、いつものように出かけようとすると、今度は遠巻きにチラ見されている。悪いことなど何一つしていないマイメロだが、見られているのは分かる。
「マイメロ、最近動きがカクカクしてるよ。大丈夫？」
「わっぱ、めー？」
仲良しのフラットくんやピアノちゃんが心配して声をかけても、
「そんな、こと、ないよ〜〜」
笑顔も凍りついたように固い。
「そういえば、クロミーズもあんまり三輪車で飛ばしてるところを見ないな」
今ではフラットくんとピアノちゃんたち、ごく親しい友達しかマイメロと一緒に遊ばないようになっていた。

クロミはマイメロほどではないが、あちこちで自分に向けられた視線を感じている。となると、さすがに今までのようにクロミーズ５のメンバーたちと暴走するわけにもいかず、もやもやした気持ちでいた。

「バク！」
クロミはイライラした顔で、どっさりと土産物を抱えたバクに詰め寄った。
「まだあたいたちで儲けるつもりかい？　もう、ストレスたまりまくりなんだよ！」
バクと弟たちがクロミの迫力に押され、じりじりと後退し、クロミはいつものように張り倒そうとハリセンを振り上げた。
「クロミ様、後ろ後ろ」
クロミが振り返ると、木陰からクロミとバクの様子をじっと見ている集団が、サッと身を隠した。わざわざ人気のない早朝に来たのにと、思わずたじろいだクロミの隙をついて、バクと弟たちは大荷物を抱えたまま逃げ出した。
「クッ、逃げ足の速いヤツだぜ……それにしても、あのマイメロさえも参らせるとは……このままだとあたいも……」
クロミはゾクっとなったが、木陰にいる人たちには作り笑顔をしながら家に戻り、バクの帰りを待った。
夕方遅くバクたちが帰って来るのを見ると、クロミは早速バクの家に行き、バクを家の裏に呼び出し詰め寄った。



「お前のお蔭でとんだ迷惑だよ。こうなったらお城からメロディ・キーを盗み出して、夢ケ丘に逃げるんだよ」

メロディ・キーとは、人間界のヴァイオリンの音色によって巨大な魔力を生むアイテムで、マリーランドのお城の宝物庫に保管されている。

「えぇえーーっ！　それはないゾナ～～」

確かにクロミには済まない気持ちがあったバクも夢ケ丘と聞いて、結局ヴァイオリニストの柊恵一に会いたいだけかい、と思ったが、

「まだまだ儲かるゾナ、いけるゾナーー！」

バクの方もたいがいではある。

「うるさいーーっ！」

暗闇の中、クロミは朝の分も加えて、思いっきりバクを張り倒した。

「さっそくお城に行くぞ、バク！」

バクは体は小さいが、人を乗せて自在に空を飛ぶことができるのだ。

のこのこと戻って来て、すごすごとクロミを背中に乗せたバクは、下僕体質が身に沁みついていた。

お城の上空に近づくと、バクが不思議そうに、

「おや、お城の庭が明るいゾナ」

「ホントか？」
　クロミがバクの背中から下を見ると、普段なら近衛兵もうたた寝している時間のはずなのに、いつになく厳重に警備をしている。何事か起こったに違いない。
「コッソリ中に入ってみようぜ」
「危ないゾナ」
「あたいが行くといったら行くんだよ！」
　あんまり何度も潜入しているので、警備の手薄な場所は熟知しているバクだった。警備が厳重なのはお城の一部だけで、クロミとバクが何度も侵入している秘密の部屋は、いつもの通りゆるい警備のままだった。
　まんまとメロディ・キーを盗み出すと、二人はお城の外の植え込みに隠して再びお城に侵入した。身をかがめ、物音を立てないように灯りのついた部屋に向かって進んでいった。
　そこは普段会議室として使っている部屋で、大きな楕円のテーブルがあり、王様、王妃のルミちゃん、マイメロとマイメロママとパパ、ドリアン大臣や元老院の面々も神妙な顔で座っていた。

（おい、もっと近くに行くぞ）

クロミが言い、灯りの届かない壁際に沿ってバクとともに身を屈めて進んだ。

（いったい何の相談ゾナ？）

（しっ、お前の声は大きいんだよ）

クロミはバクをこづいた。広い会議室だったが、あたりが静かな分、小声さえためらわれる。

どうやらマイメロが今の自分の状況を説明しているようだった。

「ドリアン大臣にも色々と調べてもらい、ようやく実態が分かりました。大変でしたね、マイメロ」

マイメロの話を聞いていた王妃のルミちゃんが、優しくマイメロに話しかけた。

「マイメロ、最初はアイドルになった気分だったの。でももうダメ〜〜」

「口コミというのは恐ろしいものです。私もここまでマイメロの人気が続くとは思いもよりませんでした。ですが、人気の一端にこれがあるのではと……」

ドリアン大臣は奥から荷物を持って来て、テーブルの上に並べた。テーブルのあちこちから手が伸び、ヒソヒソと話し始めた。

（おい、あれはお前たちの売ってるお土産物と本じゃねえか？）

クロミがバクに耳打ちすると、バクはガクガクと震え、

(間違いないゾナ……)
(夢ヶ丘に逃げた方がいいのはお前じゃないのか？)
ニヤリとしてクロミが言うと、バクは冷や汗をかきながらも、
(大丈夫ゾナ。それも計算のうちゾナ)
(何か勝算があるのかい？)
続きを聞き出そうとした時、ルミちゃんが立ち上がり、
「よくこんな短期間でこれほどのお土産物を作ったものですね。このおまけについている本も、良く出来ています。マイメロも見ましたか？」
と言うと、マイメロは絵本を手に取ってページをめくり、
「マイメロ、初めて見たよ。この絵本のマイメロもクロミちゃんも可愛いね～～」
(チョロすぎるだろ、マイメロ……)
すっかり読者になっていたマイメロにツッコミを入れたのは、クロミだけだった。
元老院のメンバーからは、「やり過ぎだ」「国の大事を金儲けにするとはけしからん」「これではマイメロも参ってしまうだろうなあ」などと、非難する声ばかりだ。
ところで、先ほどから一度も発言していない者が、実は二人いた。王様とマイメロママだった。他の者なら気にも留めないところだが、話し合いの進行は王妃のルミちゃんが、説明はマイメロパパとマイメロで、元々発言の多い二人がずっと沈黙しているのは不思議

なことだった。

　もちろん、ルミちゃんは気づいていて、

「王様、何か言うことはないのですか？」

　横にいる王様にドスの効いた声で問いかけると、

「いっ、いや、マイメロも大変なことだゾウ。でも、マリーランドは住人も少ないし、そろそろこの城下まで遠征して来る観光客もいなくなるだろうし、すぐに落ち着くゾウ。それにほら、よく出来ているゾウ。観光資源にも一役買っているんじゃないかな……」

　と、やたら雄弁だったが、実際のセリフは棒読みだった。

「落ち着いていないのは王様ではないですか？」

　ビシッと言われ、王様は身をちぢめた。

「マイメロママ、マイメロの保護者として何か言うことはありませんか？」

　ルミちゃんがマイメロママを見ると、やたらギクシャクしている。

「私もついマイメロのことを自慢してしまって、反省してますわ。お土産のお菓子も絵本もよく出来ていますが、さすがにそろそろ下火になるのではと……ほら、人のうわさも七十五日って……」

「この土産物はバク兄弟が作って売っているそうですね」

マイメロママの言葉を遮るように、ルミちゃんがギクシャクしている二人を見ながら言った。

「早速製造を中止させ、バク兄弟には罰を与えないといけませんね」

かつてレディースだったルミちゃんの、血も凍るような声だった。

王様はダラダラと冷や汗を流し始めたが、マイメロママは知らぬ顔を決め込んでいる。

ドリアン大臣や元老院のメンバーもルミちゃんの迫力に押されきっていた。と、そこへバクが乱入し、

「ひどいゾナーー！」

クロミの止めるのも聞かず、テーブルに詰め寄った。

「そうでなくても、マイメロママと王様には売り上げの一部をぶんどられているゾナ。クロミ様にもロイヤリティーを払う羽目になってるし、せめて在庫がなくなるまで売らないことには、バクたちの苦労が報われないゾナ！」

そうなのだ。ルミちゃんはバクとクロミが部屋に侵入していたのに気づいていて、王様とマイメロママにかまをかけたのだった。

「王様、説明してもらいましょうか？」

ルミちゃんに凄まれた王様は、

「黒野ささ美アナウンサーのグッズを買おうと思っただけだゾウ」

「あなた、大江戸アナのファンじゃなかったの？」
「大江戸アナは結婚が決まったらしいゾウ。出演している番組はわしの好みじゃないし、やっぱり独身の女子アナがいいんだゾウ」
身勝手というか正直というか。ルミちゃんは開いた口がふさがらない。
「やっぱりねえ、女子会に行くのにいつも同じ服とバッグじゃ、テンション下がるのよ。オシャレ心を忘れた主婦にはなりたくないものよ」
マイメロママの方はますます開き直った口調で、ドリアン大臣も元老院の面々も言葉を失っている。
「二人とも大いに反省しなさいっ！」
王妃のルミちゃんにきつく言われ、王様とマイメロママはようやく反省した。
お土産のアイディアはマイメロママから出された話で、商魂たくましいバクが試作品を作り、弟たちに絵本を描かせたのだった。スピード勝負の大量生産が叶うコネなど持っていないバクに協力したのが王様だ。
それで二人には売り上げから一割ずつを分配し、ようやく軌道に乗ったところでクロミにも搾取され、バク兄弟は人海戦術で売り上げたものの、実質的なバク兄弟の儲けは、やっと三割を超えたところだった。

ルミちゃんにお灸をすえられた王様とマイメロママは、バクから取り上げた売り上げの一部をバクに戻し、バク兄弟はお土産の販売をやめさせられた。

「城下の入り口におふれを出しておくゾウ」

王様はマイメロたちの住む城下の道筋におふれを出し、売れ残ったお土産はマイメロとクロミを訪ねてきた観光客に無料で配ることになった。バクの弟、バク二郎たちが王様からバイト料を貰ってその作業をすることで、バクたちもようやく納得した。

ルミちゃんのはからいで、マイメロとクロミは夢ヶ丘にしばらく避難することになった。

「うわ～～い。また歌ちゃんと一緒に暮らせるんだ～～♥」

マイメロは夢ヶ丘で歌たち一家と暮らすことが決まると、ストーカーめいた被害を受けていたこともコロっと忘れて喜んでいる。

「あたいもこんなに肩凝ったの初めてだよ。しばらく潤くんの家でのんびりしてくるよ」

クロミは、クロミーズ５のメンバーにざっと事の次第を話した。みんなも暴れまわることも出来ず、ストレス溜まりまくりのクロミを心配していたので、ホッとした顔を見せた。

「リーダーが留守してる間も、このシマはあたいらで守っておきますよ」

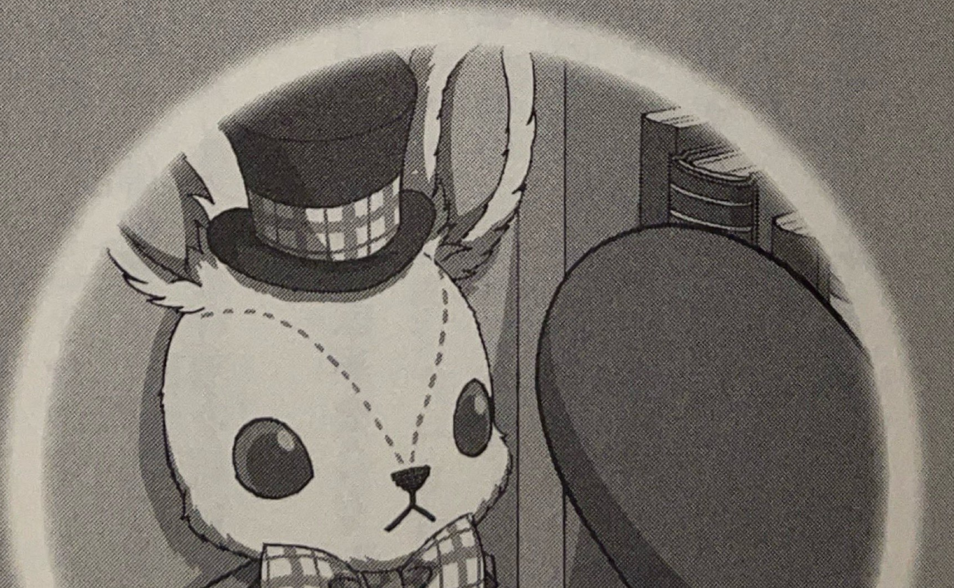
クロミーズ５のサブリーダー、ニャンミがポンと自分の胸を叩いた。

「頼んだぜ！」

クロミーズ５に別れを告げると、クロミはバクの背中に乗った。マイメロとは一足遅れで夢ケ丘に向かった。

これでマリーランドは間もなく、今まで通りに戻るだろう。逆に、マイメロとクロミが人間界に戻ったことで、夢ケ丘の街は再びにぎやかになりそうだ。

第二話　マイメロに彼氏ができたらイイナ！



　夢野家に大歓迎されたマイメロは、マリーランドでの辛い出来事もすっかり忘れ去り、毎日楽しく暮らしていた。事件があってもなくても、いつでもマイペースなマイメロのテンションは大きく変わるわけではなかったが、平和が一番なのは言うまでもない。
　柊家で居候をしているクロミはまたしてもメロディ・キーをお城から盗み出していたが、それも柊恵一の前にクルミ・ヌイの姿で登場し、今度こそラブラブになりたいという野望のためだけだと分かっているので、誰も問題視していなかった。
　今まで通り、歌と妹の琴は学校へ行き部活に励み、姉の奏は大学生活を送りながら読者モデルも続けていた。三姉妹の父親の雅彦は旅行ライターの仕事を続けていて、しばらくは自宅で原稿書きをする予定だ。
　マイメロは夢野家の居候として、のんびりとしたペースで家事をこなしている。
「みんな～、何見てるのかな～～？」
　夕ご飯が終わり、片づけを済ませると、奏、歌、琴の三姉妹はそそくさとリビングで雑誌を広げて何やら話し込み始めた。父親の雅彦はひたすらテレビを見ている。
　マイメロそっちのけというわけではないが、ここのところ夢野家は落ち着かない。ウキウキというかドキドキというか。そんな状態になっている。
「もー、お父さんったら。何度見ても変わらないわよ」
　テレビにくぎ付けになっている雅彦に、奏が苦笑混じりで言うと、

「いやいや、何度見てもいいものだよ。さすがお父さんの娘、大画面でも美人だ」
「ねえねえ、マイメロもまぜて〜〜」
トコトコとマイメロが雅彦の隣に来てテレビを見ると、画面には奏が映っている。
「あれあれ〜〜？　奏お姉ちゃんは芸能人になったの〜？」
奏がオシャレな雑貨屋さんに入り、可愛い小物を紹介したり、お店の人と話をしている画面がテレビに映っている。奏は違うというように手を振り、
「そうじゃないのよ、マイメロ。よくあるでしょ、テレビでオシャレなお店やスウィーツを紹介したりするコーナーが。今年から週に一度、担当になっただけよ。しかもこれって県内ローカル番組なのよ」
まだ放映されたのは三回目だという番組、正味五分足らずの映像を録画して、旅行から帰るなり、雅彦は毎日のように見ているのだった。奏としては芸能人やプロのファッションモデルを目指しているわけでもなく、撮影に慣れていないところや、NGが多かったこともあり、見たくない映像らしい。
「奏ねえったら、誰にもこの番組のことしゃべっちゃダメって言うんだよ」
「そうそう。ローカルっていっても、都内でも放送を見られるんだし、もっと自慢してもいいのにねー」
琴は不満そうな顔をしている。画面の奏はプロのヘアメイクがついているせいか、普段

より大人っぽい。せっかくの美人なのだから、もっとグイグイいってもいいくらいに、妹たちは思っているのだ。
「だって、春までの穴埋めみたいなコーナーだもの。実物見てガッカリされるのも嫌だし、今は読者モデルのお仕事とコラムと大学の課題で手いっぱいよ」
それに、と、奏は続けて、
「あんまり目立っちゃうと彼氏とデートも出来なくなっちゃうもの」
少し顔を赤らめた。歌、琴、雅彦は一様にガッカリした顔になった。そう、欠点のなさそうな奏だが、だめんず好きは相変わらずで、今も理系の彼氏と続いている。
「そんなことより、二人とも予定がなさそうだし、今週末に出かけましょうか」
奏が話題を雑誌に移すと、
「行く行くーーっ！」
歌と琴が声をそろえた。見ると雅彦は三姉妹の浮かれた様子に、複雑な顔をしている。
そう、バレンタインまであと一か月。冬場はカップルのイベントが多いもの。
一か月をもうすぐと思うか、まだまだと思うかは人それぞれだが、年頃の女の子、それも長女の奏はキレイ系、次女の歌はカワイイ系、三女の琴は元気系の美人三姉妹と近所でも評判の夢野姉妹なのだ。三人も家に女の子がそろえばテンションも上がる。雑誌を参考にして、チョコレートを買いに行く相談をしていたのだ。

「ラッピング用品もこの時期はたくさんあるはずよ。たくさん回るわよー」
「はーーい！」
奏の掛け声に、歌と琴は声をそろえた。デパートやスウィーツ専門店、雑貨店など、見るところは多い。バレンタインの趣向は最近多種多様化していて、男の人にはついて行けないかもしれない。
奏はもちろん理系の彼氏、歌は小暮駆にチョコレートを渡す予定なのだ。もちろん、材料を買って作る計画もあるし、最近流行の友チョコや、自分で食べるチョコも買うつもりで、何となくウキウキした様子の三姉妹だった。
「……まあ、いいことだよね。年頃の娘たちにチョコレートを渡す相手がいるのは……奏はもう大学生だし駆くんはいい子だし……でもまさか琴まで……」
雅彦が小声でブツブツ言っている。琴はテニス部の先輩たちと柊潤にチョコを渡したいと考えていた。当然潤へのチョコの方が雅彦へのものよりグレードは高いはずだ。
「まあまあ、パパさん。マイメロがチョコあげるから、ねっ」
マイメロに肩をポンポンと叩かれた。マイメロなりに慰めてくれているのは分かったが、ソコじゃないんだよと雅彦は思った。
「私たちだってお父さんにも、ちゃーんとチョコ買って来るからね」
歌が慌てて言うと、

「ありがとう、お母さんにも見せてあげないとな」

「そうだね、お母さんには手作りチョコの腕を上げたところを見せてあげなきゃね」

歌が言うと、奏と琴もうなずいた。雅彦は三姉妹とマイメロに、笑いかけた。

週末のデパートは催事場のバレンタインコーナーが始まったばかりで、どのフロアもバレンタインを意識したレイアウトになっていた。

「あー、迷っちゃうねー、マイメロはどれがいい？」

歌はイベント感たっぷりのデパートの催事場で迷いに迷っていた。カバンの中に入れているマイメロにコソっと尋ねるが、返事がない。

「……」

「あれ？　マイメロ、寝ちゃってるの？」

琴も歌の傍に寄って来て、マイメロを見るが、

「歌ねえ、マイメロの目はパッチリ開いているよ」

そう、マイメロの目は大きく見開いていて、口も丸く開いたままだ。

「きっと女の子がいっぱいだから、圧倒されているのよ」

すでに何個か包みを持っている奏がマイメロの頭をそっとなでると、

「奏ちゃん、琴ちゃん、そこに立ってたら王子様が見えないよ～～」

と、マイメロが情けない声を出したので、奏と琴はバッとマイメロの目を見つめ、百八十度振り返った。

「王子……様？」

琴がすぐに気づいて、歌と奏に指差して教えた。催事場の中心にプレゼントの箱をいくつも重ねたディスプレイがあり、その上にウサギの縫いぐるみが置いてあった。

歌はマイメロと視線の先の縫いぐるみを交互に見ながら、

「確かにオシャレだね。でも、これって……」

ウサギの縫いぐるみは薄い茶色の毛色で、黒のタキシードに蝶ネクタイ、ベストまで着ている。ヨーロッパの香りの漂うイメージで、明らかに日本の可愛らしいものとは違う。

「マイメロたちとは全然違うタイプのイケメンだわね。でも、残念ながらお相手がいるようだけど……」

奏がマイメロに話しかけるが、完全に無視。というより、誰の声も聞こえていないのだろう。

マイメロにはタキシードの縫いぐるみしか目に入っていないようだが、隣にはピンクのドレスを着た真っ白なウサギがカップル然と座っているのだ。老舗デパートのバレンタインコーナーのディスプレイに相応しく、ウサギの縫いぐるみもシックで大人っぽい。

「マイメロ、恋しちゃったみたい……」

小さく呟いたマイメロは頬をポッと赤らめ、うつむいた。

思いもよらぬマイメロの言動に、歌たちは呆然となっていたが、

「ねえ、お姉ちゃん。あの縫いぐるみ高いのかなあ」

歌が奏にコソッと尋ねると、奏はじーっと見つめ、

「日本製じゃなさそうだし……何万円もするものだと思うわ。それに、ここから見ると小さく見えるけど、実物はかなり大きいわよ」

「そう言われると、マイメロよりかなり大きいね」

歌がマイメロとウサギを交互に見ながら言った。琴は財布を開けてお金を数えていたが、

「えー、そんなに高いのー？　琴たちのお小遣いじゃとても買えないよ」

「ちょっと待ってて、歌、琴。お店の人に聞いてみるわね」

奏はスーツを着ているデパートの男性社員を見つけると、スッと近づいていった。縫いぐるみを指差し、笑顔を見せながらあれこれ尋ねている。しばらくして頭を下げて奏が戻って来ると、

「あの縫いぐるみはやっぱりイギリス製のもので、イベントが終わるまでは売る予定はないんですって」

「やっぱり」
歌とマイメロがうなだれていると、奏はポンと歌の肩を叩き、
「下のフロアの輸入雑貨のお店に、もう少し小さいサイズのものがあるそうよ。私たちみたいに問い合わせる人が何人かいたみたい。急ぎましょ」
奏がエスカレータの方に急ぎ足で向かい、歌と琴も慌ててついて行った。
三人が下のフロアの輸入雑貨店に到着すると、歌が駆け出した。
「あったよー、マイメロ」
棚の上には一組のウサギの縫いぐるみがあって、やはりペアになっていた。歌はスーツを着ている方のウサギの縫いぐるみを抱きかかえ、マイメロに見せた。それはマイメロよりもちょっと大きめで、スリムだった。
「ホント、上にあったものより小さいわね。ペアで買わなきゃいけないのかしら」
と、奏は背中についているタグを歌たちに見せて、
「別々に買えるみたいね。でも、一つでも結構なお値段よ」
「縫いぐるみってこんなに高いんだ」
同じくタグを覗き込んだ琴がビックリして声を上げた。

「普通の縫いぐるみと違って、着ている服も本物のミニチュア版みたいにしっかり作ってあるわ。ホラ、ボタンも蝶ネクタイも外せるようになっているし」
さすがに色んな雑貨店や新製品に詳しい奏だけあって、チェックは厳しい。
「マイメロ、この子が欲しいよ～～一目ぼれなんだもん」
必死な様子で訴えるマイメロに、
「マイメロはウサミミ仮面さんが好きなんじゃやなかったの？」
ウサミミ仮面とはマイメロの魔法によって召喚される正義の味方で、その正体はヴァイオリニストの柊恵一である。
マイメロのウサミミ仮面への執着ぶりを知っている歌が、念を押すように聞いた。
「ウサミミ先輩はマイメロが魔法で呼び出さなくちゃ会えないもん。いつもそばにいてくれる彼氏が欲しいんだもん～～」
必死な形相で頭巾から財布を出した。
「マイメロ、お小遣いぜーんぶ出すから、おねがい♥」
いつもの可愛らしい表情になり、マイメロは歌に財布を押し付けるように渡した。奏はそれを見て、ふうっとため息をつき、
「マイメロにはいつも家のこと、やってもらっているからね。お小遣いで足りない分は私が払うわ。待っててね」

「お姉ちゃん、私も出す！」
「奏ねえ、歌ねえ、私もお小遣い出すよ」
歌と琴も財布を出した。奏は二人に笑いかけた。
「大丈夫よ。ここは取りあえず私が払っておくわ。歌も琴もバレンタインのチョコ、全然買ってなかったでしょ。マイメロからは、後でちゃーんと貰っておくわよ」
「ありがとう、奏ちゃん、歌ちゃんと琴ちゃんも〜〜」
マイメロはニコニコ顔が止まらなくなっていた。
プレゼント用にラッピングしてもらった縫いぐるみは奏が持ち帰ることにして、歌と琴は再び催事場に戻り、チョコレートを選ぶことにした。マイメロは気になってしょうがないらしく、歌のバッグの中から、チラチラと奏の持つ紙袋を見ていた。
マイメロが縫いぐるみのウサギに一目ぼれをしたことは、その日のうちに潤の耳に入り、さらにクロミとバクにも伝わっていた。
「へえ、あいつ結構ホレっぽいんだな」
「この間までウサミミ先輩、ウサミミ先輩ってうるさかったゾナ」
潤のトレーニングに付き合いながら、クロミとバクが言うと、

「もうすぐ……バレンタインコンサートがあるから、恵一が帰って来るんだ。マイメロが来てるって言ったら……家に寄らずにホテルから直接会場に行くみたいなこと話してたけど、これで安心して……戻って……来れるよな」

腹筋をしながら、苦しそうな声で潤が答えた。

「柊しゃまが……？」

今度はクロミの瞳が♥型になり、

（縫いぐるみ、グッジョブじゃないの？）

柊恵一を巡るライバルがいなくなり、ご機嫌になるクロミだった。

「でも、縫いぐるみに話しかけても一方通行ゾナ」

今度はトレーニングをランニングマシンに移動した潤に付き合っているバクが言うと、

「それもそうだな。マスコットみたいに小さいもんじゃないし。マイメロのことだから、すぐに飽きるんじゃや……」

不安そうな顔になるクロミに、潤が苦笑しつつ、

「それがさ、王様と王妃様に魂を入れてもらうんだって、家に帰るとソッコーでマリーランドに向かったらしいぜ。あいつ行動力あるのな」

「マジかよ。でも、そんなアイテムあったかな？」

「いくら王様や元老院でもそんなお願い聞いていたらキリがないゾナ。無理ゾナ」

バクは否定したが、クロミは「ウーン」と首をひねり、
「でもさ、願い事をするには、絶好のタイミングじゃないか？」
バクはハッとなってクロミを見てうなずいた。ついこの間までストーカーまがいの被害に遭っていたマイメロを、王様や王妃のルミちゃんを始め、重臣たちも心配していたのだった。マリーランドでは起こったことのない種類の出来事だったからだ。

マリーランドに到着したマイメロは、自分の家よりも先に王様と王妃のルミちゃんに会いに行った。傷心のマイメロの気分転換になればと夢ヶ丘に送り出した王様とルミちゃんは、突然戻って来たマイメロに驚き、
「マイメロ、突然どうしたのです？　まさか、向こうで何か起こったんじゃや……」
「いや、夢ヶ丘付近には何も変化はなかったゾウ。事件といえば、ワシの好きな大江戸アナが結婚したことくらいだゾウ」
と、相変わらず人間界のテレビに夢中な王様を、ルミちゃんが睨んだ。
「ところで、その荷物はなんだゾウ？」
王様はマイメロの持っている大きな荷物が気になって尋ねると、マイメロは歌たちとデパートに行き、ウサギの縫いぐるみに一目ぼれしたことを話した。

「ふむ、この縫いぐるみに魂を入れろと言うのじゃな？」
マイメロは、ウサギの縫いぐるみを自分の前に差し出した。縫いぐるみはマイメロよりも大きいので、すっかり姿が隠れている。
「いくらマイメロの頼みでも、これは地球で売られているもの。たとえ一目ぼれしたからって、そんな簡単にやっていいことではありませんよ」
ルミちゃんは困った顔になっていた。
「この縫いぐるみには覚えがあるゾウ。確か大江戸アナの結婚式の時に、会場の入り口に飾ってあったゾウ……悲しいことを思い出したゾウ……」
王様の女子アナ好きに変わりはないようだ。
「だが、この縫いぐるみは女の子のウサギとペアだったゾウ」
「そうよ、マイメロ。これは職人さんの手で、とても丁寧に作られている品物のようね。もしもペアの女の子がいるなら、魂を入れたからといって、マイメロに心を動かされるとは限りませんよ」
「むしろ二人を引き離したマイメロが悪者扱いされそうだゾウ」
王様とルミちゃんが言い聞かせても、
「大丈夫。マイメロ、この子、大好きだもん。きっと気持ちは通じるはず。だって……」
マイメロは顔を真っ赤に染め、

「初恋なんだもん。王様とルミちゃんみたいにラブラブになりたいんだもん……歌ちゃんと駆くんみたいに、公園でデートしたり……遊園地に行ったり……あっ、それから美味しい物を食べにも行きたいなあ～～」

ラブラブになるとは限らないのに、マイメロの妄想は止まらない。見ている王様とルミちゃんは、どん引き状態になっていた。

「だから、ね、おねがい♥」

マイメロの本気のお願いに、王様とルミちゃんはつい、『きゅん♥』となってしまい、二人は渋々ながらも魂を入れることに承知した。

「分かりました。ですが、マイメロ。本物の魂が完成するには時間がかかります。まず仮の魂を入れますが、せいぜい一か月くらいしか持たないでしょう」

「ええ～～？　一か月でお別れなんてマイメロいや～～ん」

マイメロが駄々っ子のように首を振った。

「仮の魂が本物の魂になるまでには、時間がかかるんだゾウ」

すると、マイメロはこくんとうなずいた。

「分かりました。では、準備を進めることにします。ただし、一か月以内にこの縫いぐるみのウサギがマイメロのことを好きにならなかったら、元の縫いぐるみに戻ってしまいますからね」

「そうだゾウ。仮の魂を入れることだって、簡単にお願いしたからって出来ることじゃないゾウ。今回は特別だゾウ……そうじゃ、一か月後といえば」
王様はポンと手を打ち、ルミちゃんをチラチラッと見た。
「分かっていますよ……バレンタインの二月十四日までに縫いぐるみの気持ちがマイメロに傾かなかったら、魂は自然と消えてしまいますよ。そして、一か月で魂が消えてしまうことは、絶対に縫いぐるみに知られてはなりません」
王様の期待に満ちた目をやり過ごし、ルミちゃんはもう一度念を入れた。
「は～～い！　マイメロ、ぜったいラブラブになっちゃうよ～～」
ルミちゃんは満面の笑みを浮かべたマイメロから縫いぐるみを受け取り、王様に手渡した。
「では、私たちはその儀式を行います。明後日の朝までに縫いぐるみは夢野家に送り届けます。いいですか？」
「は～～い！　王様、王妃様よろしくおねがいしま～～す」
マイメロはもう一度いい返事をすると、自分の家には目もくれず夢野家に戻って行った。見送った王様とルミちゃんは顔を見合わせてため息をついた。
「ついこの間まで辛い目に遭っていて落ち込んでいたのが、嘘みたいだゾウ……」
「それがマイメロの良いところですけれど……」

二人は再び深くため息をつくと、お城の奥に進んでいった。

夢ヶ丘に戻ったマイメロは、歌たちに事情を説明した。

「へえ、縫いぐるみに魂を入れるなんて……ホントにそんなことが出来るんだ。良かったね～、マイメロ。今夜ウサギくんが来るんだね。楽しみだね～～」

歌と琴は単純に喜んでいたが、奏と父親の雅彦に笑顔はなかった。

「どうしたの、奏ねえ、お父さん？」

琴が尋ねると、

「マイメロ、私はあのウサギを知っているけれど、男女別々に買えるものだなんて知らなかったよ」

「私も調べてみたのよ。あの縫いぐるみは大量生産じゃないの。イギリスの職人さんたちが手作りしたもので、一つ一つ心を込めて作ってあるものなのよ。人気はあるけれど生産が追い付かないらしいわ……それに、やっぱりペアで持っている人が多いのよ」

雅彦と奏は浮かれているマイメロと歌たちを心配して、色々調べていた。

「じゃあ、ウサギさんがマイメロを好きになるかどうかは分からないってこと？」

琴が不安そうな顔になった。

「そういう時こそマイメロの腕の見せ所じゃない？　ねっ、マイメロ」
歌が不安を打ち消すようにマイメロに言うと、マイメロも、
「うんっ♥　マイメロがんばる〜〜」
笑顔でこたえた。
「そうね。取り越し苦労かもしれないわね。私たちも応援しましょ」
どこまでもポジティブなマイメロに、奏も笑顔が戻った。
「じゃ、みんなでマイメロの応援がんばろー！」
歌のかけ声に、家族全員でマイメロのフォローと応援をすることにして、ウサギが現れるのを待った。

朝、マイメロと歌は小さな物音で目が覚めた。耳を澄ますと、
「君たち、ここはどこなんだい？」
歌の机の上から声がした。
「僕はどうやらはぐれてしまったようだ……ジェニファーはいったいどこに行ってしまったんだい？」
「⁉」

歌がガバッと布団をはねのけると、机の上にあの縫いぐるみがちょこんと座っていた。歌が起きたことに気づくと、
「やあ、やっと目を覚ましてくれたんだね。レディの部屋にいるのは失礼だろうと思うのだが、ドアの開け方が分からないんだ」
歌はパジャマと髪をササッと整えた。縫いぐるみがしゃべっているのは想定内だったが、
（何でこんなにいい声なの？　声だけ聞いていると柊先輩みたいでカッコいい……）
まじまじと縫いぐるみを見ると、着ていることもあり、微妙に困った表情をしていて、そんな姿までスタイリッシュだ。タキシードを着ているこ確かに日本のウサギの縫いぐるみと違ってシュッとした感じがする。イカした声も、このスタイルならアリだと歌は思った。
「マイメロ、縫いぐるみくんがしゃべってるよ」
ドキドキしながらマイメロを起こすと、
「ふにゃあ～～。あー、ウサギくんだぁ～～」
マイメロもササッと身支度を整え、
「わたし、マイメロだよ～～。ウサギくんに一目ぼれしちゃったんだ～～。仲良くしようねー！」
と、直球である。

「ありがとう、小さなレディ。マイメロという名前なのかい？　僕はアーサー。ところでこれはどういうことなのかな？　君たちに僕のしゃべっていることが分かるのかい？　君もしゃべれるみたいだけど……」

名前からして、いかにも英国紳士といったアーサーは、マイメロの「一目ぼれ」という告白を軽くスルーした。実は静かにパニくっているのかもしれないが、ポーカーフェイスというか、縫いぐるみの顔なのでハッキリとは分からない。

マイメロはというと、アーサーのカッコよさといい声のせいか、目がハートになっていて、やはりパニくっているようだ。さかんに胸を押さえ、

「歌ちゃん、マイメロ胸がいたい～。ウサミミ仮面さんに会った時みたい～～」

明らかにLOVEの兆候である。歌もマイメロの気持ちが分かり、絶対に何とかしてやらなきゃという気持ちになった。が、時計を見ると朝の七時を過ぎていた。

「あーーっ、今日は月曜日なんだったー！」

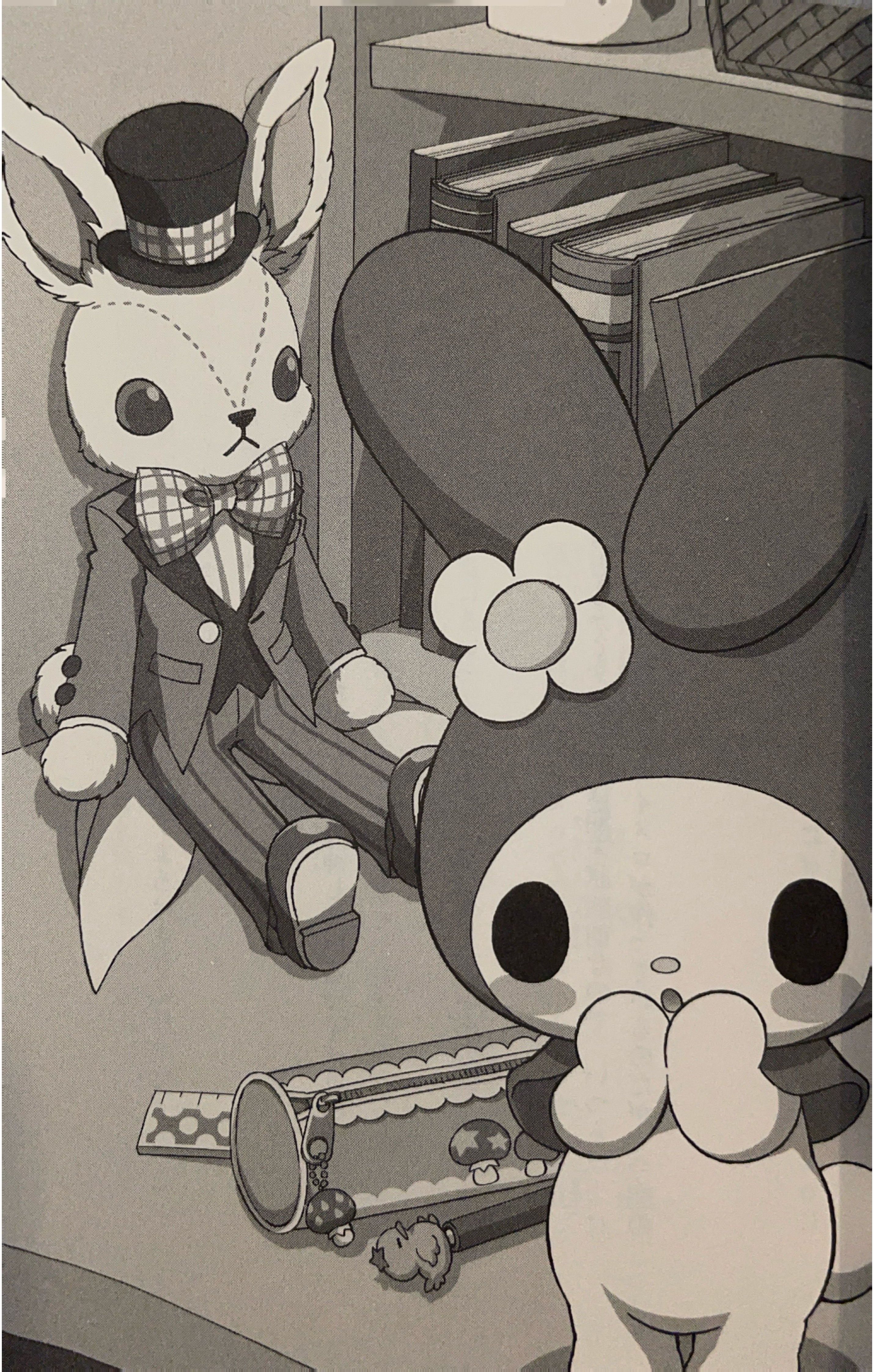
平常モードに戻ると、バタバタと洗面所に向かった。

「ずいぶん慌てているけれど、彼女はどうしたのかな？」

「……アーサーさん」

マイメロがベッドから降りてアーサーのいる机に向かって話しかけると、

「アーサーでいいよ。君のこともマイメロと呼んでいいのかな？」



「♥♥♥」

アーサーに正面から見つめられて、マイメロは思わずよろけそうになった。アーサーがさっと机から降りてマイメロを支えると、

「きゅうぅん〜〜〜うたちゃ〜〜ん」

マイメロはアーサーの腕の中で、失神してしまったのだ。

洗面を終えて部屋に戻った歌が、幸せそうな顔のまま失神しているマイメロの様子を見て言う。

「こんなマイメロ見たことないよ」

思った以上にマイメロはアーサーにまいってしまったようだ。

月曜日の朝は、試験明けの奏はともかく、歌と琴は期末試験前なので、いつも以上にバタバタ着替えや身支度をしている。朝食は奏とマイメロが作っているのだが、今朝のマイメロはやたらふにゃふにゃしている。

「アーサー？」

「なんですか、マイメロ？」

声を聞いただけで真っ赤になっている。歌たちはいつになくテンパっているマイメロに

苦笑するばかりだ。
「奏ねえ、アーサーの声ってすごくカッコいいね」
琴がコソッと耳打ちすると、奏も、
「そうね。英国紳士って感じね」
「あー、そうそう。そんなカンジー！」
歌や琴は純粋に同意したが、奏はよそよそしいものを感じていた。
「二人とも早くしないと遅刻よ。後片づけは私とマイメロでやっておくから、早く支度しなさいよ」
奏に促され、時計を見た歌と琴は、いきなりバタバタし始めた。歌も大慌てで髪をセットしてカバンを持って玄関に向かう途中、マイメロに、
「マイメロ、今日真菜と美紀を連れて来るね。二人ともアーサーに会えるのを、楽しみにしてるみたいだから」
「は〜〜い。歌ちゃん。お菓子作って待ってるよ〜〜」
マイメロが笑顔で手を振った。

その日、お弁当を一緒に食べながら、歌からマイメロとアーサーの話を聞いた真菜は、

「へえ、そりゃ面白そうなことになっとるやないの？　放課後が楽しみやわ」
　と、ノリノリだ。
「マイメロって案外惚れっぽいのね。だけど、アーサーにはガールフレンドがいるんでしょう？　大丈夫なのかしら？」
　美紀は心配そうな顔をしているが、
「そうなのよ。ジェニファーっていって、確かにお店には並んで置いてあったわ。二人の仲を引き裂くのは辛いけど、マイメロが一目ぼれした相手だし。アーサーだってマイメロの良さを分かれば好きになってくれるんじゃないかなあ」
　歌が言うと、二人は複雑な笑みを浮かべた。
「マイメロの良さって……なんやろ。うちらはよう分かってるけど」
「初対面の相手には伝わりにくいかもね」
「そうかな……？」
　日本では可愛いと言われること間違いなしのマイメロだが、欧米ではどうだろう。歌もアメリカのアニメを見ることがあるが、そのキャラクターは歌にとっては手放しで『可愛い』と呼べるものではない。
　だからアーサーがマイメロに興味を持ってくれるかどうか、不安な面はぬぐいきれない。その上で、やっぱりマイメロのフォローをしてあげたいと思う歌だった。

美紀は歌が今朝、急いでスマートフォンで撮ったというアーサーの写真を見て、

「明らかに人種が違うというか……でも、マイメロが一目ぼれしちゃう気持ちは分かるわ。うまくいくといいわね」

スマホを歌に返すと、

「色んな苦難を乗り越えて結ばれる愛……本当に恋人同士になったら素晴らしいわね。ぜひ、毎日様子を見に行きたいわ。たくさん詩が書けそうよ」

「ちょ、美紀。もうすぐ試験やで。うちは時々でええわ」

美紀の頭の中で、どんな展開が生まれているのかは分からないが、歌は真菜と美紀が応援してくれるのを嬉しく思った。ただ、駆にも写真とメールを送っているのに返事がないことを、ちょっぴり寂しく感じている。

「ただいまー、マイメロ～～！」

夕方、真菜と美紀とともに家に着いた歌は、マイメロの返事がないことに不審な表情を浮かべた。

「……おかえり～う～た～ちゃ～～ん」

「マイメロどうしたの？」

キッチンにいたマイメロは、今朝とはうって変わってやつれた様子だった。
「どないしたん？　マイメロ、具合悪いんとちゃう？」
「顔色悪いわよ。大丈夫？」
真菜と美紀もマイメロに駆け寄って来た。
「ううん〜〜だいじょぶだよ〜〜」
全然大丈夫そうに見えない。だが、額に手を当てると、熱があるわけでもなかった。
「やあ、おかえり、歌。真菜ちゃんと美紀ちゃんも。寒かっただろう？」
リビングのソファには父親の雅彦が座っていて、隣に座っているアーサーをチラッと見て、歌たちに顔を向けた。
「あー、この子がアーサー？」
美紀がカバンを床に置いて、アーサーのところに行った。
「へえ、イケメンやん？」
真菜も興味深そうに近づいていく。
「みんな〜〜、パウンドケーキ出来たよ〜〜。今紅茶いれるね〜〜」
歌たちの顔を見て、少し笑顔が戻ったマイメロが、リビングに向かって声をかけた。
「あっ、私も手伝うよ。真菜と美紀は座っててね」
歌もカバンをダイニングの椅子に置くと、マイメロのところに行った。マイメロが紅茶

の缶を出しているところだった。
「紅茶はダージリンをお願いします」
アーサーがキッチンにいるマイメロに声をかけた。
「は、はい〜〜」
「なんや、ええ声しとるな。アーサーさんは」
真菜が感心したように言うと、アーサーはキリッと真菜に向き、
「ありがとうございます、レディ。私のことはアーサーと呼んでください」
「ちょ、待ちいや。レディゆう柄じゃないわ」
真菜はいきなりのアーサーの『レディ』呼びに、ツッコミきれずに焦りながら、
「うち、真菜ゆうねん。よろしゅうな」
「私は美紀。私たちは歌の友達よ。よろしくね、アーサー」
挨拶した二人にアーサーは礼儀正しく頭を下げた。歌も二人もアーサーに対する好感度は上がっていたが、雅彦の表情は硬いままだ。
マイメロがダージリンの缶を探し、ポットにお茶の葉を入れると歌がお湯を注ぎ入れた。カップとソーサー、パウンドケーキが載せられたお皿がリビングのテーブルに置かれると、真菜と美紀が全員の前に並べた。
「どうぞ〜〜」

マイメロが紅茶をカップに注ぎ、ケーキ皿の隣に置いていく。アーサーは自分の前に置かれた小さなカップを持ち、鼻を近づけて、

「ふう。良い香りですね。紅茶の淹れ方は及第点でしょう」

満足そうな笑みを浮かべたアーサーに、マイメロは嬉しそうな顔をした。

「はい～～～」

真菜と美紀はアーサーを囲んで一緒にマイメロ手作りのパウンドケーキを食べ始めた。

アーサーは二人の質問に丁寧に答えている。

マイメロやクロミやバク、フラットくんやピアノちゃんと話すのには慣れている歌だったが、系統のまったく違う縫いぐるみがしゃべっていることに、なかなか馴染めない。声が大人びていて低いので、恵一と話しているような気がしてならなかった。

マイメロの動きがいつもよりもずっとギクシャクしているので、歌は不安にかられ父親の雅彦を見た。歌と目が合った雅彦は、ゆっくりと首を振った。きっと、後で話すという意味なのだろうと悟った歌は、雅彦にうなずいて返した。

奏と部活の終わった琴から立て続けに、『今から家に帰る』というメールが届いた。そのタイミングで時計を見た美紀が、

「え？　もうこんな時間。私たちも帰らなきゃね。また遊びに来るわね、アーサー」
「はい、お待ちしています」
「ほんまや。真っ暗になってもうた。マイメロ、ごちそうさん」
真菜と美紀は、アーサーと歌たちに挨拶をして家に帰って行った。二人ともアーサーには好印象を持ったまま帰って行ったが、二人がいつもよりも丁寧な言葉遣いになっていたのは、やはり歌と同じように感じていたのかもしれない。
「今夜は何を作るの、マイメロ」
二人を送った後、歌が尋ねるとマイメロはいつもの調子を取り戻したのか、
「アーサーもいることだし、シチューとサラダにするよ～～」
元気に答えたマイメロに、安心した歌は、
「じゃあ、私も着替えて後で手伝うよ」
制服を着替えに部屋に戻った歌がお風呂の掃除を始めると、雅彦がやってきて、
「歌、どうもあの二人は合わないような気がするよ」
背中を向けて掃除をしていた歌が振り返ると、雅彦は腕組みをして難しい顔になっていた。
「そうなの？　でも、今日会ったばかりだよ？」
「朝からダメ出しの連続で、マイメロはかなり落ち込んでいるみたいだよ」

聞けば、動作が遅いとか、話し方がのんびりしているとか、何度となく言われたらしい。

「まあ、確かにアーサーの言う通りだけど、そこがマイメロの良いところだしなあ」

直せることとならともかく、のんびりマイペースは、いうなればマイメロの個性であり、夢野一家だけじゃなく、周囲の人たちも困ってはいない。

「おまけに顔が丸いだとか、凹凸がないとか言い始めて」

「ちょっと、それはひどいんじゃない？」

歌が怒って雅彦に言うと、

「私もそう思ったから、そこはアーサーにちゃんと言ったさ。テレビやパソコンで日本の縫いぐるみを見せたり、アニメを見せたりしてね」

「それで？」

「女性の悪口を言うのは、英国紳士の風上にもおけないよって言ったら、だいぶ口調はおとなしくなったけどね」

雅彦は苦笑しながら風呂場から出て行った。全然予想がつかなかったわけではないが、マイメロにとっては厳しい現実のようだ。

歌がお風呂の掃除を終えてキッチンに戻ると、マイメロが涙を流していた。

「マイメロっ、どうしたの？」

慌てて駆け寄ると、マイメロは玉ねぎを切っていただけのようで、
「なに～～、歌ちゃん？」
と、笑顔を見せた。歌はマイメロをそっと抱きしめ、ダイニングの椅子に座らせると、
「続きは私がするよ。マイメロ、今日は一日、疲れたでしょう。アーサーに色々無理なことを言われて大変だったって、お父さんが言ってたよ」
歌がリビングに顔を向けると、アーサーはテレビを見ていて、こちらのことは眼中にないようだ。雅彦は自分の部屋に戻っているのか、姿が見えない。
（お父さんもずっとフォローしてて、疲れたのかな？）
アーサーもマイメロに負けず劣らずマイペースなようで、
「本当に大丈夫なの？　マイメロ」
歌が小声で聞くと、マイメロは首を傾げ、
「うーん。アーサーは照れやさんなのかなぁ。ちっとも笑ってくれないんだよ。でも、マイメロの紅茶は美味しいって言ってくれたよ」
紅茶に関しては、少なくとも歌が聞いたのは『及第点』というコメントで、歌はカチンときたのだが、そこはマイメロ。何というポジティブ脳。ある意味羨ましいと歌は思ったが、動作や外見など根本的なことが受け入れられないとなると、ずっと平行線なのではと不安に思った。

二月に入り、バレンタインが近づいてきた。三姉妹はそれぞれバレンタインに向けての準備を進めていたが、

「マイメロ……心が折れそう」

マイメロだけはグッタリしていた。

「奏ちゃんに言われた通りに、グイグイ押してみたけれど、全然効果ないの〜〜」

とうとう根を上げたマイメロは、歌に泣きついた。

二週間以上過ぎても何の進展もないマイメロとアーサーには、見ている歌たちもストレスが溜まって来た。だめんず好きな奏のアドバイスを受けて、可愛いアピールと得意な料理で攻めても効果はみられない。

近頃のアーサーはすっかり夢野家や日本の生活に慣れて、くつろいでいる。義理堅いのか、マイメロの手伝いはしているようだ。

「アーサーはね、時々遠くを見つめて寂しそうな顔をしてるんだよ〜〜。そこもカッコいいけどね〜〜」

基本的にアーサーは優しいのだろう。ガールフレンドのことをマイメロの前で話すことはないし、マイメロを嫌っているわけでもなさそうだ。だが、肝心の気持ちはマイメロの

ところにはないようだ。
興味本位でやって来た潤に連れられてきたクロミとバクも、マイメロが思った以上に健気に尽くしているのにビックリしていた。
「アーサーの気持ちは、今もガールフレンドのジェニファーにしか向いてないみたい……マイメロのことを責めたりはしていないけど……」
歌がアーサーとマイメロと見比べて、そっと潤たちに言うと、
「く～～、マイメロと自分を重ねてしまうゾナ」
いくらクロミを慕っても下僕扱いされてばかりのバクがため息混じりに言うと、
「彼氏と彼女というより、アーサーってマイメロの保護者か兄貴みたいじゃないか？」
うまくいっていないと聞いて、からかってやろうと考えていたクロミだったが、どうもそんな気持ちになれなかった。クロミもマイメロとアーサーが、自分と恵一に重なってみえるようだ。
「どうすんのさ。期限が近づいているんだろ？」
クロミがアーサーに聞こえないようにマイメロに言うと、
「う～～ん。レンアイって大変なんだねぇ」
困った顔をした。
「もうすぐバレンタインだろ？　マイメロの作るお菓子は美味しいし、アーサーもグッと

くるんじゃないか？」

潤が励ますが、

「イギリスでは女の子が男の子にチョコを渡す習慣はないんだって」

歌が残念そうに答えた。欧米のバレンタインは恋人同士がプレゼントを渡し合うか、男性から女性に花束などを贈るものらしい。

「そういや、ロンドンでは日本みたいに、女の子が盛り上がったりしてなかったなあ」

潤はロンドンに留学していたのだが、その間恋愛とは縁がなかったようだ。恵一も同じようなものだったが、

「兄貴はやたら高級な贈り物が多かったけどな……。顔か？　顔の差なのか？」

「潤くんもカッコいいよ～～。ウサミミ仮面さんは大人っぽいけどね～～」

「まさかのウサミミ仮面オチかよーーー！　せめて兄貴と比べてくれよーーー！」

潤の上下するテンションに、マイメロたちは思わず笑い転げた。歌は久しぶりにマイメロの笑顔を見たような気がした。

「ところでアーサーは何見てんだ？」

アーサーがずっとテレビを凝視しているのを疑問に思った潤が画面を見ると、サッカーの試合中継が流れていた。

「おっ、さすがイギリス生まれ。サッカー好きなんだな」

「おや……潤くんでしたっけ。貴方もロンドンに留学していたと言っていましたね。どこのファンなんですか？」
珍しく興味深そうにアーサーが聞き返してきた。
「いや、全然。ただ、冬場は週末はサッカー中継、平日はダイジェストってくらい、ロンドンのテレビはサッカーと……そうそう、ラグビーもやってたな。だんだん面白くなる時期なんだろう？」
潤がサッカーに詳しくなさそうなので、アーサーはあからさまにガッカリした顔になった。
「マイメロにも教えてみたのですが……あまり興味はなさそうですね。私のことが好きなら、せめてサッカーのルールくらいは覚えて欲しいものです」
と、素っ気ない口調だが、マイメロはめげなかった。
「アーサーはツンデレなの～～」
「マイメロ、あたいはどこまでいってもデレることはないとみたよ……いや、マジで」
クロミは呆れ顔でツッコミを入れた。
「でも、マイメロは好きなんだもん。アーサーだってマイメロのこと好きなのに。照れやさんなんだから～～」
「………」

いつものマイメロに戻っただけなのだが、歌たちは絶句した。
そんな具合に、マイメロの努力は報われず、どこまでもかみ合わない二人だった。ウサミミ仮面に悪態をつかれても、意に介さなかったマイメロだが、さすがに毎日のダメ出しに、時折疲れた顔を見せている。
「そうだ。来週兄貴が帰って来るぜ。クリスマスほどじゃないが、ちょっとしたパーティーもするから、みんなも遊びに来いよな。アーサーも連れて来ればいい」
潤の提案にマイメロはパッと笑顔になった。
「ほんと～～？　ウサミミ先輩に会えるんだ～～」
「そうそう、それを伝えに来たんだった。歌ちゃんたちは来れるよな。駆にも連絡しとくから、一緒に楽しもうぜ」
バレンタインの二日前と聞いて、歌も喜んで参加することにした。バレンタイン当日も駆に会う予定にはなっているが、
「オシャレして来いよ。駆も喜ぶぜ」
「ありがとう、潤くん」
歌は頬を赤らめた。マイメロを抱き上げ、
「マイメロもいい気分転換になるよ。一緒に楽しもう」
「は～～い、歌ちゃ～～ん！」

とびきりの笑顔でこたえた。

欧米の大学は秋に始まるので、恵一には奏のような春休みはなかった。バレンタインコンサートが期間限定でそれほど大がかりではないということもあり、夕方の早い時間から始まったパーティーも、柊家にとってはごく小規模なものだった。とはいえ、豪邸には五十人以上のゲストが招かれていて、お決まりの恵一のヴァイオリン演奏もあった。

中央のテーブルには数えきれないほどのチョコレートが積み重なっていた。コンサートで戻って来ると知った日本のファンの子や、招待客から恵一に宛てたものだった。あらかじめ予想のついていた奏の提案で、姉妹は自分たちのチョコは、コンサートが終わって、柊家に戻って来た時に恵一に渡すことにしていた。

「柊先輩は相変わらずカッコいいね」

駆と一緒に着席して恵一のヴァイオリンを聴いていた歌は、演奏が終わると同時に立ち上がって拍手した。隣の椅子にはマイメロとアーサーもいて、二人を挟んで奏と琴、真菜と美紀もいる。今回も大急ぎで奏がみんなの衣装を調達してきた。

「何だか大人っぽくなったな」

駆も眩しそうに恵一を見たが、本当は歌のことが気になってしょうがない。歌の気持

ちは駆にしかなく、精一杯オシャレをしてきたのだが、駆には褒めてもらえなくてガッカリしている。また、駆もみんなのいる前では何も言えず、タイミングをはかれないままパーティーが始まってしまい、焦っていた。

「歌……」

肩が触れ合うほど近くにいる歌に、駆がドキドキしながら話しかけた途端、

「やあ、歌ちゃん。バレンタインらしくスイートなドレス、すっごく似合ってるよ。みんなクリスマスパーティーは大人っぽくてキラキラしてたけど、今日のカジュアルな服も可愛くてサイコーだね！」

潤が割って入って来た。いつものパターンながら、こういうセリフがサラッと言えてしまう潤には、腹立たしいやら羨ましいやらの駆だった。

「……が一番可愛い……と思う……」

駆は思わず小声になってしまった。潤は真っ赤になった駆には気づかず、奏たちと談笑している。輪に入るタイミングも逃してしまった駆に、

「ありがとう……駆」

歌が駆に近づいて来て、耳元でそっと囁いた。声は歌に届いていたようだ。マイメロとアーサーはそんな二人を微笑ましく見ていた。そこへ恵一が近づいて来て、

「今日も来てくれたんだね、夢野くん。みんな楽しんでいるかい？」

「柊先輩。今日の演奏もとても良かったです」
恵一はマイメロの隣に座っているアーサーに気づき、
「おや、新顔がいるが」
新しい顔ぶれには経験上緊張しがちな恵一が、いぶかしげな顔で尋ねると、奏が簡単にいきさつを話し、やっと納得した顔になった。
「ウサミミ先輩〜〜」
マイメロが恵一に手を振るが、恵一はニコリともせず、完全無視だ。
「短い時間だが、みんな楽しんでいってくれ」
マイメロのところには近寄ろうともせず、誰かに呼ばれたのを幸いに、恵一はパーティーの輪の中に戻って行った。
「ふわあ〜〜ウサミミ先輩はやっぱりカッコいいわね〜〜。今日は着ぐるみ脱いでくれないのかな〜〜？」
マイメロは相変わらず恵一の別の姿、ウサミミ仮面が本来の姿だと勘違いしている。アーサーと大差ないほどそっけない態度を示されても、一向に気にならない様子だ。その場にいた全員が、アーサー以上に平行線な気がしたのだが、誰も何も言わなかった。ただ、アーサーだけは無表情で押し黙っていた。

翌日はバレンタインデーの前日で、歌たち姉妹は早めに夕食を済ませてから、チョコレートを作るという毎年恒例の作業があり、歌も学校が終わると真っ直ぐに帰って来た。マイメロは夕食の準備をいつもよりも早く始めていた。
「あれ、マイメロ。今日は早いねー」
歌がキッチンにいるマイメロに声をかけると、
「おかえりー、歌ちゃ〜ん。ご飯の支度は出来てるよ〜〜」
上機嫌のマイメロに、歌はビックリした顔で、
「マイメロ、ずいぶん元気だね」
「ウサミミ先輩に会えたから、元気でたの〜〜。バレンタインはウサミミ先輩に手作りチヨコ渡すんだ〜〜。それにね、今日はアーサーがすっごく手伝ってくれるんだよ〜〜」
「忙しそうにしていたから、手伝おうと思っただけですよ」
アーサーは照れ隠しのように早口で答えた。恵一の姿を見ただけなのに、マイメロはすっかりウサミミ仮面に気持ちが移ったようだ。今までチヤホヤされていただけに、アーサーが慌てたのかもしれないと、歌は考えた。
実はアーサーは昨日のパーティーで奏が恵一に説明していたのを聞いていたのだ。つまり、王様との約束の期限は今日までという話を。ウサギの聴覚を奏は侮っていた。

ガールフレンドのジェニファーと永遠に会えなくなるのは悲しいが、今の生活も気に入っているアーサーは、慌ててポイントを稼ごうとしているのだが、肝心のマイメロの方はすっかりウサミミ仮面を満喫していて、期限のことまで忘れてしまっていたのだった。

「そうなんだ……じゃ、洗濯ものを片づけたら手伝うね」

下準備があらかた終わると、後の作業は女の子が中心だ。リビングまでチョコレートやバニラの甘い香りが届いてくると、キッチンは姉妹とマイメロの楽しそうな声で満ちていた。

「娘の成長を喜んでいた時期もあったが、今は少し寂しい気持ちになるよ」

マイメロから手伝いを断られて所在無くソファに座っていたアーサーに、雅彦がポツリと言った。

「日本のバレンタインデーはいつもこんな感じなんでしょうね。テレビでも盛んに取り上げていました……最初は変な習慣だと思いましたが、日本人は男女ともにシャイだと聞きました。こういう機会があるのは、なかなかいいものですね」

珍しくアーサーが日本の習慣を肯定したので、雅彦は驚きながら、

「我が家の女性は日本女性の中では積極的な方に見えるが……まあ、何でも受け入れてアレンジしてしまうのが、日本人の面白いところだね」

「この街は格別そんな気がしますよ」

いきなりしゃべることの出来た自分に驚いたアーサーだったが、マイメロの存在と家族のように暮らしている夢野家や歌の友人たちにも驚いた。さらに、クロミやバクまでいるし、それを当然のように受け入れている夢ヶ丘という場所は、まさに夢の世界のように感じられたのだった。

「私たちは慣れてしまったけどね」

雅彦は立ち上がり、キッチンに向かいながら、

「コーヒーでも飲みながら話そうか。君は紅茶の方がいいと思うが、僕のコーヒーも美味しいよ」

キッチンはまだゴチャゴチャしたままだ。歌たちのチョコレートは概ね出来上がったようで、デコレーションをしたり、ラッピング用品を並べて楽しそうに話をしている。

「毎年腕を上げているね」

「お父さん。コーヒー淹れるの？　あっ、こっち見ちゃダメだよ～～」

歌がチョコを手で隠した。

「マイメロはね～～パパさんの分は出来たから、今はウサミミ先輩に作ってるんだ～～」

「へえ、アーサーの分は作らないのかい？」

ポットのお湯でドリップしながら雅彦が尋ねると、マイメロは慌てて手を振り、

「アーサーの分もちゃんとあるよ～～」

「お父さん、コーヒー出来たらリビングに戻ってよ～～」
琴にせかされて、雅彦は二つのカップを持ち、リビングに戻った。
「まったく今日ばかりは居心地が悪いね」
雅彦はアーサーに小さなカップを渡した。アーサーはカップを顔に近づけ、
「いい香りですね」
落ち着いた声で言った。雅彦はその横顔を見て、
（まさか、アーサーは全部知っているのか？）
と、不安に思い、確かめるようにアーサーを見たが、表情は変わらない。
「お父さんは旅行ライターをしているんでしたね。イギリスに行ったこともあるんですか？」
アーサーが尋ねて来た。
「もちろんあるさ。アーサーという名前はアーサー王からとったものだろう。今度、アーサー王伝説にまつわる場所を、君と一緒に訪ねてみたいね」
「それはいいですね。職人さんたちは、私の名に因んだアーサー王の話をしながら作ってくれました。もちろん、週明けはサッカーの話題ばかりでしたが。思いがけず日本に

来ることになってしまいましたが、いつかは生まれ故郷に帰りたいと思っています」
「それはいいね。向こうで色々話を聞かせてくれないか」
「……美味しいですね。コーヒー……」
アーサーはコーヒーのカップを置くと、押し黙った。
「それは良かった」
雅彦はアーサーの横顔を見つめ、しばらくしてハッとなって時計を見た。
「マイメロ、歌、もう十二時を回っているぞ！」
雅彦の大声にマイメロと歌がリビングにやって来た。
「あっ、ホントだ～～もうバレンタインデーだねえ、歌ちゃん」
「間に合って良かったね、マイメロ」
すでにキッチンの片づけはだいたい終わり、最初にラッピングまで終えた琴は、先に部屋に戻って寝ていた。
「あれ……アーサー？」
マイメロがアーサーに駆け寄ると、アーサーは何もしゃべらない。それどころか、マイメロに押されてコロンと倒れたままピクリとも動かない。
「マイメロ、今日が十四日ってことは、期限は十四日の零時までだったの？」
時計は十二時を十分ほど過ぎていた。

「今日中じゃなかったの、マイメロ？」
奏もキッチンから駆け付けてマイメロの肩を掴んだ。
「バレンタインの日までだって言ってたよね、マイメロ……もしかして」
歌たちもマイメロたちも、十四日の夜中の零時までだと思っていたのだ。
「うん。バレンタインの日までにって、王妃様が言ってたわ〜〜」
大きな勘違いだった。
マイメロは倒れたアーサーをソファの隅に座らせて、
「でも、アーサーの気持ちは、今日一日かけてもマイメロには向かなかったと思うの〜」
「それはそうかもしれないけど……」
歌は信じられない気持ちでアーサーを見つめた。
「アーサーはどうやら知っていたように私には思えたよ。珍しく故郷のイギリスの話までしていたしね」
「そうなの。何だか可哀そうなことをしてしまったわね」
奏はアーサーをなでながら言った。
「初恋は実らないって本当ね〜〜。やっぱりウサミミ先輩一筋にしなきゃね〜〜」
あっさりとした口調でマイメロは言うと、『初恋はウサミミ先輩の方じゃないの？』という歌の疑問をよそに、

「仕上げしなきゃ～～」

と、キッチンに戻って行った。

「………」

マイメロの後姿に何やらひんやりとしたものを感じて、全員が無言だった。

この話には後日談がある。およそ半年ほど後の話になるが。

マイメロと同じくらい毎日一緒に過ごしていた雅彦は、アーサーに対しても特別な思いがあったのだろう。アーサーと約束した通り、次の旅行先を編集部に掛け合いイギリスに決め、アーサーを連れて行ったのだ。

雅彦はイギリスに到着するとアーサー王にまつわる土地を訪ね、アーサーをその場に立たせて写真を撮ってツイッターにアップしたところ、旅行の途中から話題になって、あっという間に拡散したのだった。

更に、すぐに旅行記を書くようにと編集に言われ、写真付きで出版したところ、色んなところで取り上げられたのだ。中年のオヤジとウサギの縫いぐるみという取り合わせも話題になり、売れ行きも上々だった。

「イギリスのメーカーと職人さんに話をしたら、面白がってくれてね。ガールフレンド

のジェニファーを新しく作ってもらえることになったよ」

嬉しそうな顔で歌たちに報告した。奏がバレンタインの日にジェニファーをデパートで探したのだが、とっくに買われていて、当然のことながら売られた相手は分からなかった。

「良かったね、お父さん。ね、マイメロ」

「うん。やっぱりアーサーの隣はジェニファーだね〜〜」

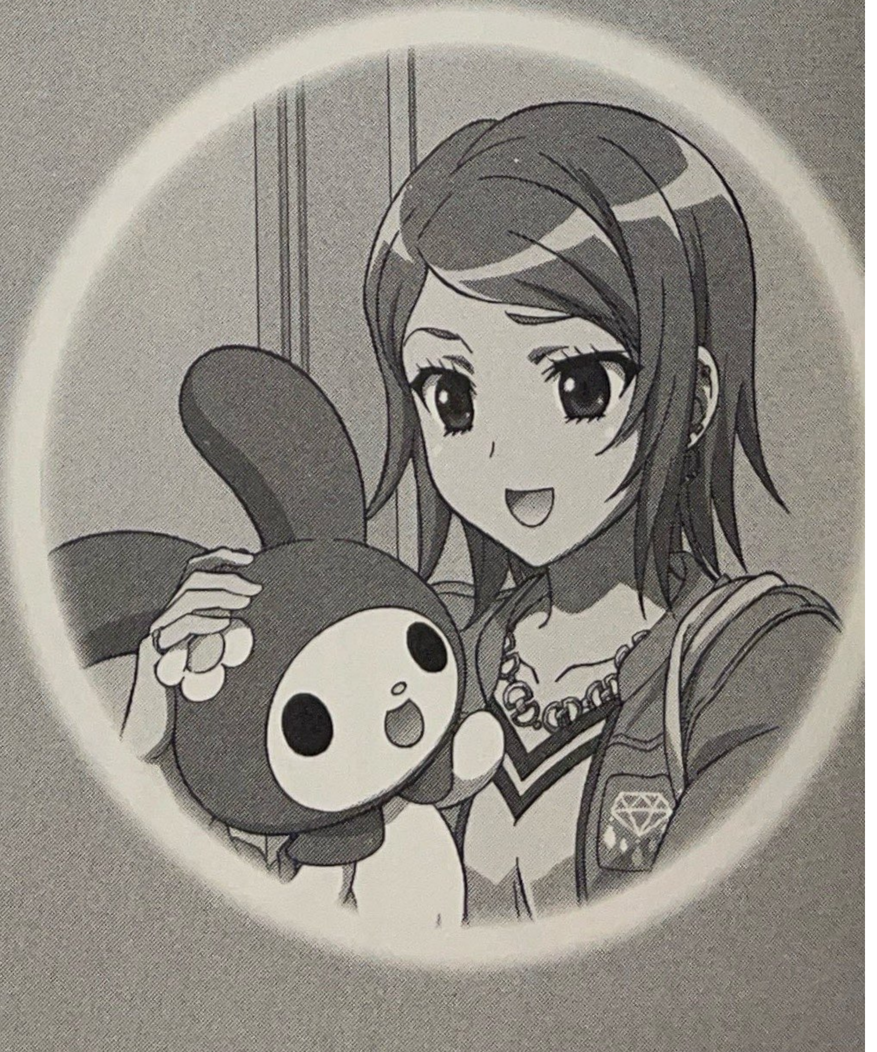
少なからず心を痛めていた歌たちも、雅彦の報告に素直に喜んだ。

「特別に急いで作って貰うから、ちょっと高くなるけれど、アーサーのお蔭で印税も入ってくるからお礼をしなきゃな」

雅彦は、旅の仲間になったアーサーをそっとなでながら言った。その話を歌から聞いた真菜や美紀、潤やクロミとバクもホッと胸をなで下ろした。王様と王妃のルミちゃんも、マリーランドからハラハラしながら様子をうかがっていたのだが、やっと安心出来たのだった。

その更に半年後、アーサーとジェニファーは仲良く並んで夢野家の飾り棚に座っていた。とても、幸せそうに。

第三話（だいさんわ）　ラッキーガールってイイナ！



大学の講義が終わり、読者モデルの仕事もなかった奏は、真っ直ぐ家に帰ることにした。

「えー、買い物に付き合ってよ」

「合コンに奏を誘ってくれって頼まれてるんだけどなー」

同じ学部の友達に誘われたが、

「たまには早く帰って家事をしないとね。普段は妹たちに任せきりだから、ゴメンね」

奏はちょこんと頭を下げた。付き合いが悪い方ではないが、奏に母親がいないことを友人たちは知っていたので、それ以上引き留められることはなかった。

「じゃ、また明日」

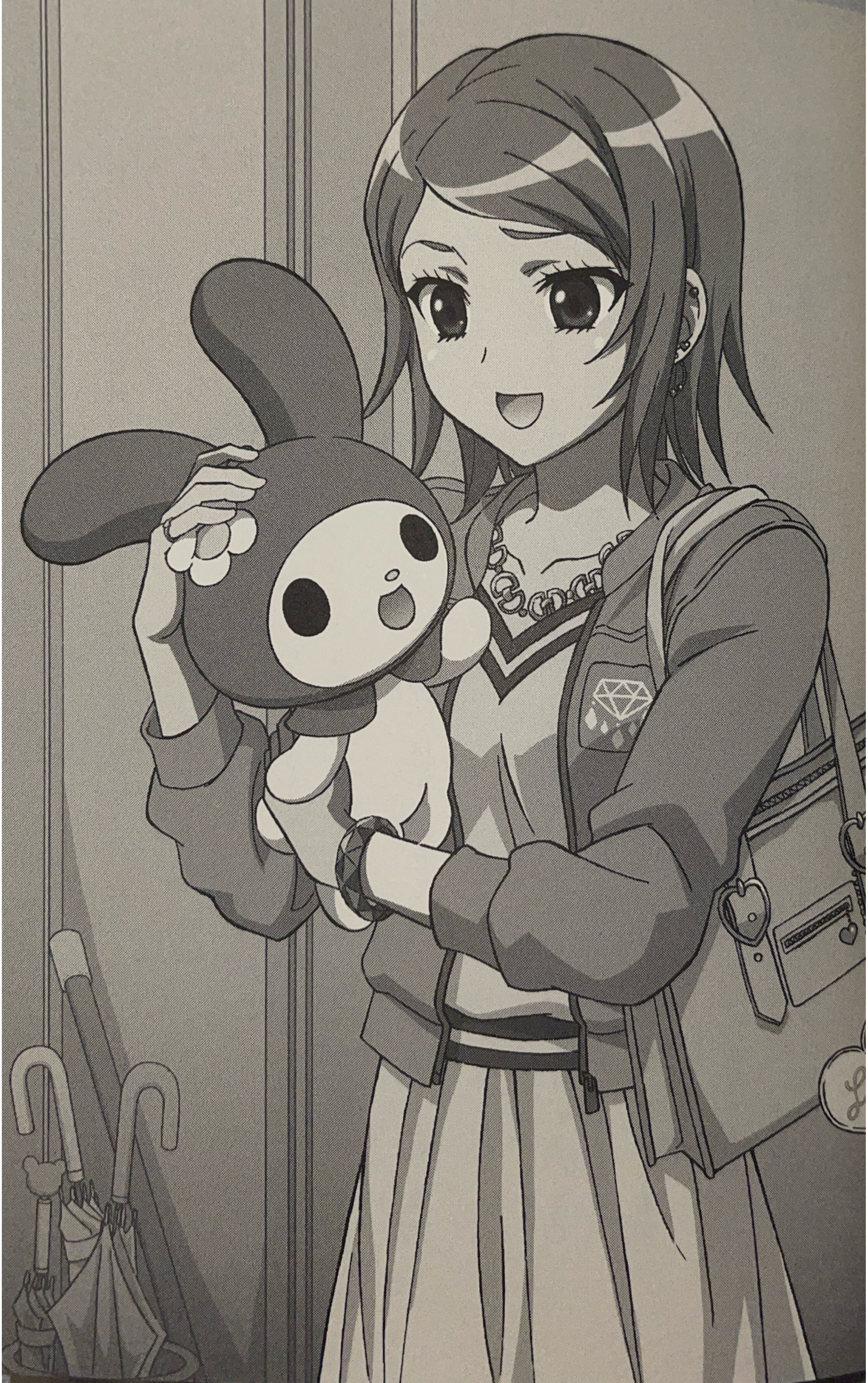
奏は別の学部棟に向かい、現在の彼氏に挨拶してから駅に向かった。

「奏ちゃ～～ん、お帰り～～」

マイメロの元気な声がした。そう、マイメロも夢野家にいるのだった。

「早かったね～～。歌ちゃんも琴ちゃんも今日は部活だって～～」

奏はマイメロの頭をそっとなでた。奏にとってのマイメロは癒しの存在だ。自然と笑顔になる。



「お父さんも今週は帰って来ないし、予定のない平日くらいは早く帰らないとね」
ニッコリ微笑んだ。
「ありがとう、奏ちゃん♥」
奏たち姉妹の父親は旅行ライターをしていて、観光シーズン以外はたいてい国内外を問わず出かけている。帰って来ると家で原稿を執筆したり、家事をしたりする。マイメロがいなかった時は父親と三姉妹が協力して家事をしていたが、マイメロが来てからは特に料理を任せきりになりがちだった。
「着替えてから来るわね。洗濯物の片づけと掃除は私に任せて、マイメロは夕ご飯に専念してね」
「は〜〜い」
マイメロは人間よりも小さいこともあるが、家事のスピードはのんびりしている。その分早めに取りかかるのだが、得意な料理以外は体が小さいことは結構なハンデでもある。
歌は軽音楽部でベースを担当しているが、部活は毎週一、二回くらいで、琴よりも早く帰ることが多い。だが今は学園祭が近づいているため忙しい。
YeahTubeという動画サイトに曲をアップした潤も、今やちょっとした有名人なので、軽音部と同様、学園祭のステージに立つことになっている。しかし、集中力が極端にない潤がライブで演奏出来るのはせいぜい二曲だった。何とか言い訳を作って拒

否したが、周りに持ち上げられて安請け合いしてしまった。
因みに長時間の演奏が出来ないのは、歌たちと友人の真菜と美紀くらいにしか知られていない。学校内ではカッコ悪いところを見られたくないので、ギターを持つこともない。なので、歌がキーボードを担当して、潤の家で一緒に練習をしている。
「鶴の恩返しみたいね。決してこの扉を開けないでくださいっていう」
と、美紀に笑われたのだが、当日のお楽しみということで乗り切った。
琴は中学に入ってテニス部に所属しているので、朝一番に出かけたり、帰りも遅くなったりだ。学園祭は中高一緒だが、体育系の部活の生徒はそれほど忙しくはないので、早く帰る時はマイメロに頼まれた買い物をするために、スーパーに寄ってから帰って来る。
奏は大学一年生で、毎日講義があるが、週に二日くらいは早めに帰ることが出来る。ただ、読者モデルの人気が高まって来て、毎月コラムを書いたり、ローカルのテレビのコーナーに出演したりと忙しい。現在の三姉妹の状況はこんな感じだ。
「そうだ。帰りにケーキ買って来たんだ。後でみんなで食べよう。話題のスウィーツだから、ちゃんと感想聞くからね」
奏が紙袋をマイメロに見せた。
「わ〜〜い」

マイメロは奏から受け取ったケーキの箱を冷蔵庫にしまった。新しいパティスリーを見つけると、取材と言いつつ奏はみんなの分のスウィーツを買って来る。歌たちはそれを楽しみにしているのだ。

奏も手伝って、すっかり夕食の準備が整った。歌と琴それぞれからメールが入り、間もなく二人とも家に到着するはずだ。

「ただいまーー！　お姉ちゃん帰ってるーー？」

先に帰ってきた歌が、バタバタとキッチンに入るなり、奏の姿を確認すると、

「お姉ちゃーーん！　ビッグニュース、ビッグニュースだよ！」

「？？？　何なの？」

かなり興奮した様子で迫ってきた歌に、何のことか分からず、奏は呆然とするばかりだ。

「いきなりビッグニュースって言われても……」

「歌ちゃん、落ち着いて。ねっ」

歌は傍にいたマイメロに気づき、

「あっ、マイメロー！　ただいまーー！」

マイメロをギュッと抱きしめるところはいつもの光景だが、すぐに降ろし、
「そうそう、そうだね……えっと」
と、話しかけたところに、琴が帰ってきた。
「ただいまー。マイメロー、奏ねえも今日は早いんだね。あー、お腹すいたー。いい匂い～～」
と、これまた平常運転だ。ビッグニュースと言いながら、歌は切迫した表情を浮かべていない。その感じから少なくとも緊急事態ではないと悟った奏は、
「歌、琴、まずは部屋で着替えていらっしゃい。すぐご飯にするから。歌、話はその時にゆっくり聞くわ。ね？」
「マイメロもお腹ペコペコだよ～～」
落ち着きを取り戻し、歌と琴に話しかけた。お腹もすいていた二人は、二階の自分の部屋に着替えに行った。
三姉妹とマイメロがテーブルにつき、食事が始まると、
「歌、ビッグニュースって何のこと？　私に関係してるみたいだけど」
「えー、なになに？　奏ねえに新しい彼氏が出来たとか？」
琴が二人の姉を見ながら聞いてきた。
「違うよ、琴……あ、でもちょっと近いかも」

箸を進めながら歌が話し始めた。
「来週、学園祭があるでしょ？　そのイベントの一つに、最近有名になったOBのトークショーがあるの。で、実行委員の友達が打ち合わせに行ったんだけど……」
「夢ヶ丘出身の有名人なら柊恵一でしょ。あ、弟の潤くんも最近有名人の仲間入りをしたかしら」
「潤先輩は学園祭で演奏もするんだよね。あたしもその時間は高等部に行くんだよ」
と、奏と琴が口を挟んだ。夢ヶ丘学園は中学校と高校はすぐ近くにあって、学園祭も同じ日に開催される。大学部もあるが、それは敷地が別になっていて、奏のように外部の大学を受験する生徒もいる。
「お姉ちゃんだって有名人だよ～～……じゃなくて、一人は俳優の小野寺修司さんで、もう一人はイラストレーターの清水ジンさん。ねっ、お姉ちゃんに関係あるでしょ？」
どや顔になった歌を、奏がポカンとした顔で見て、
「誰？　二人とも知らないんだけど」
途端に歌はガックリとした顔になった。
「歌ねえ、本当に有名人なの？　あたしも知らないよ」
琴にも追い打ちをかけられ、歌は更にガッカリ顔になり、
「ちょっとー、友達は二人からお姉ちゃんの名前が出たって、興奮して私に報告してくれ

たんだよ。二人ともお姉ちゃんの元カレだったんでしょ？」

「えー、すごい。さすが奏ねえ」

それを聞いて琴も興奮した顔になった。しかし、当の本人は当惑気味で、さかんに記憶をたどっている。

「あれ〜〜？　でも奏ちゃんが付き合った彼氏って……」

言いかけてマイメロは黙った。そして、誰もが同じことを考えていたので、一瞬沈黙が生まれた。そう、奏が好きになった相手は、だめんずというか、万人向けじゃないというか。誰もが好きになりそうなイケメンやクラスの人気者や、恵一のように何かの才能に恵まれているような男性とは付き合ったことがない。

「……だよねえ。奏ねえの彼氏って、たいていイマイチ……うーん、あたしが思うにイマイチにも達していないっていうか」

「うん、歌ちゃん、別人じゃないの〜〜？　単なる勘違いとか」

琴がズバリと言い、マイメロが同意した。

「失礼ね、マイメロまで」

奏も彼氏を紹介した時の友人からの評価はちゃんと理解していた。

『私には素敵な男の子に見えるけど？』

それが奏の友人への返事で、友人たちはそろって『何で？』とか、『どこがいいの？』

とか、『奏にはもっと素敵な彼氏が似合うよ』と、言い続けていたのだが、長く友達を続けているうちに慣れてきたというか、諦めている。

もちろん子供の頃から美人だった奏はモテた。それはモテた。だから、誰もが認めるカッコいい男の子からのアプローチも盛んにあった。

友人たちが奏を合コンに誘うのは、絶対に好みのタイプが重ならないと分かっているからで、美人系なのに奏に女の子の友人が多いのは、さっぱりした性格と見かけよりも家庭的なことだけじゃないようだ。

「私の好みはともかく、歌が言った小野寺とか清水とかって人、そんなに有名なの？　二人とも本名なの？　私、名前も聞いたことないわ」

さらに素っ気なく奏が言った。

「マイメロも知らないよ〜〜」

もっと話が進むと考えていた歌は、

「ちょっとー、お姉ちゃん。最新流行に敏感だったんじゃないのー？　私、実行委員の友達に取材してきてねって頼まれてるのにー」

「実際覚えてないんだもの。せめてもっと情報をちょうだい」

「それもそうだね。歌ねえはよく知っている人なの？」

奏と琴に言われ、

「へへへ、私も実は友達に教えてもらうまで知らなかったんだよね」
と、ペロリと舌を出した。
夕食を片づけ、奏はデザートの支度をマイメロとともに始めた。デザートはリビングで寛ぎながら食べることにして、歌はパソコンをリビングに持ち込んだ。
奏としては、元カレうんぬんより、有名と言われた二人の存在を知らなかったことの方が重要だったのだ。
テーブルにデザートのケーキと紅茶を並べ、それぞれが座ると、歌はパソコンの画面を奏に見せた。
画面には俳優の小野寺修司の顔とプロフィールが現れた。顔はイケメンとまではいかないが、まあまあの感じ。身長は普通だが筋肉質だ。
「この人が俳優の小野寺修司さん。お姉ちゃんより二歳年上だね」
「そっか。同級生ばかり頭に思い浮かべていたから。うーん、そういえば何となく見覚えがあるような……小野先輩って私が言っていた先輩かしらね」
奏は自信なさそうに答えた。琴も画面を見て、
「本当だ。夢ケ丘中学高校出身って書いてある。この人も大学は違うみたいだね」

「ということは大学三年生か。今は休学しているって書いてあるけど、そんなに忙しい俳優さんなら、私にも分かりそうなものだけどな」

忙しい中、奏は話題になったドラマや歌手、アーティストなどは一応チェックしているし、年の近い三姉妹は好みはそれぞれ違うものの、テレビやファッション誌などは共有して見ている。三人とも友人は少なくないので、世間一般の流行はそれなりに知っているはずだった。

「えっと、小野寺さんは本名じゃないんだね。お姉ちゃんの言っていた小野先輩かも。ミュージカル俳優って書いてあるよ。舞台の稽古や地方公演があって、今年から大学は休学して俳優業に専念しているみたい」

代表作を見ると、人気コミックの舞台化のオーディションに合格して出演していた。

「あー、知ってる。原作を読んだことはないけれど、本屋に並んでいるわね。アニメにもなっていたんじゃなかったかしら？　見たことはないけど」

奏が作品名を見て言った。少年誌に掲載されている人気コミックがアニメ化と同時に舞台になったもので、出演者はどれも若手俳優ばかり。歌たちには馴染みのない名前が並んでいる。

「あー、これじゃ本人かどうか分からないねー」

その舞台のホームページを開くと、出演者はコミックのキャラクターに扮している。

「よほどファンじゃないと本人かどうかは分かりにくいわね」
「イケメン枠じゃないんだねえ～」
マイメロが他の俳優を見ながら言った。じっと見ていた奏が突然、
「あっ、思い出した。小野先輩は演劇部にいたのよ」
「え？　じゃあ、舞台俳優になっても不思議はないよね」
歌が言うと、
「演劇部の部員だったことは確かだけど、大道具とか裏方だったわ。大きなセットを一人で黙々と作っている姿がカッコ良かったの」
当時を思い出したのか、奏はうっとりとした表情になった。奏は演劇部には入っていなかったが、友人に頼まれてチョイ役で出演したことがあったらしい。
「奏ちゃんなら主役やってもいいのに～～」
奏はありがとうというように、そっとマイメロの頭をなでた。母親のいない夢野家で、当時の奏の役割は大きかったのだ。
「じゃあ、次は清水ジンさんだよ」
小野寺修司先輩の情報が思ったより少なかったが、気を取り直して、歌はインターネ

ットで『清水ジン』を検索した。すると、ハリネズミのキャラクターがたくさん現れた。

「あっ、この絵知ってる知ってるーーっ！　ほら、これ」

琴がスマホの画面を開くと、友人からのラインにハリネズミのキャラクターと『ガンバレ』のコメントがついた絵が現れた。

「ああ、このイラスト私も見たことあるわ。そうか、漫画家志望だった清水迅先輩ね。学生の頃よりもオシャレになったみたい。先輩も二歳年上で、付き合っていたってほどじゃなかったわよ。そうね、すっごく地味で無口だったわ」

「見るからに無口な感じだね。イラストレーターなら無口でも構わないけど。でも、大丈夫なの、歌ねえ。学園祭でトークショーするんでしょ。会話が弾むのかなあ？」

「うーん。それで私に話を振ってきたのかなあ？」

琴と歌が奏をじっと見た。

歌の友達が言うには、最初に打ち合わせをした小野寺修司は舞台俳優という仕事柄、高校生の前で話すことは問題なさそうだが、今日打ち合わせをした清水ジンは、質問にボソボソ答えるだけのようだった。

「二人からOKの返事は貰ったものの、清水先輩があまりにも無口なんで、共通の話題はないかと探ってみたんだって。それで同級生との高校生活の思い出を聞き出したところ、お姉ちゃんの名前を二人とも言ったからビックリしてたよ」

「別々に打ち合わせしてて良かったねえ～、奏ちゃん」
マイメロがクスッと笑って言った。その意味を奏が悟り、
「ちょっと、マイメロ。二股とかしてないからね、私。清水先輩は春先にモデルを兼ねてちょっと会ってただけだし、小野先輩とは秋の学園祭の直前だけだもの。ホントよ」
奏が惚れっぽいことを家族は重々承知しているし、その相手がパッとしない男性ばかりというのも分かっている。そして、自分から振るのと相手から距離を置かれるのは、ほぼ半々ということも。
「トークショーで私のことを話すわけじゃないわよね」
奏が歌に念を押すと、
「少しは出るかもしれないけど、いいじゃない、お姉ちゃんも今は名前を知られるようになったし。それに二人ともお姉ちゃんのこと良く言っていたみたいだよ」
「司会をする人に、私のことが万が一出ても、サラッと流すように言っておいてね。絶対によ」
更に念を押された。
「ダイジョブだよ～奏ちゃん。きっと二人とも奏ちゃんとお付き合いしてから、カッコ良くなったんだよ～～」
マイメロが奏の肩をポンポン叩いた。妙にウキウキしているように見えるのが、奏は気

になったが、
「歌たちの学園祭、せっかくだから見に行こうと思ったけど、何だか行くの嫌になっちゃったな」
普通の感覚なら、話題の人と会えるのは楽しみだと思うのだが。ましてや二人とも短い間とはいえ元カレだし。将来有望と知れば、ヨリを戻したくなってもおかしくはない。そういう感覚が全然ないところが、歌には理解不能だ。
歌が憧れていた柊恵一は、ヴァイオリンの世界では名前が知られている。現在の彼氏は小暮駆。歌の同級生で、中学生当時から陸上の選手だったし、今も短距離の学生新記録の保持者だ。そして、恵一はいわゆる美形顔で、駆はカワイイ系の男の子だ。もし、二人とも地味でパッとしない男の子だったら、歌は好きになっていただろうかと思った。
琴も同じように、今は歌の同級生の柊潤に憧れている。恵一の弟だが、恵一とはタイプが違ってロック好きの高校生だ。明るくてちょっと軽くてカッコいい。
なんだかんだ言っても、自分たちは面食いだったのかなと考えるのと同時に、歌は不思議なものを見るような目で奏を見つめていた。
「ああーーっ！」
突然奏が声を上げ、歌はハッとなって顔を上げた。
「あー、全部食べちゃった。今話題のパティスリーの人気のタルトだったのに。歌、琴、

食べてみてどうだった？　美味しかった？」
奏はパソコンの画面と、自分の記憶の糸を手繰っているうちに、話題のお店のスウィーツを食べ終えてしまったのだ。歌と琴も同様で、誰の皿にも残っていなかった。
「ごめん、お姉ちゃん。美味しかったけど、どんな味だったか全然覚えてない」
「奏ねえ。あたしも、気が付いたら食べ終わってたよ」
いつもは色々言いながら味わって食べるのに、今日は奏と同じように食べ終えていた。
「あのね～～、タルトの生地がサクサクしてて美味しかったよ～～。あとね、カスタードクリームがサッパリしてて、フルーツの酸味とよく合ってたよ～。さすがタルトの専門店のおススメだねぇ」
空のお皿を集めながらマイメロが感想を言った。
「ありがとう～～。マイメロ～～」
奏がマイメロをギュッと抱きしめた。
結局奏は読者モデルの撮影日が急に変更され、二日間ある学園祭にバッチリ被ってしまい、行けなくなった。なので、歌たちの演奏もトークショーも録画を頼み、ガマンすることにしたのだが、

「奏ちゃん、何だかあなたのことが一部で話題になってるよ」
撮影の合間に編集部の担当女性が、ニッコリと奏に話しかけてきた。
「えっ、なになに？」
奏が尋ねるよりも先に、一緒に撮影をしていたモデルが編集者のところに駆け付けた。女性はツイッターの画面を見せ、
「ほら、これ」
奏とモデルの子がタブレットの画面を見ると、学園祭のトークショーの話題がどんどんと上がって来ていた。
「ほら、小野寺くんって今若い女の子に人気じゃない。トークショーがあると知って、夢ケ丘高校の学園祭に駆け付けた人も多かったみたいよ」
「トークショーは初日の昨日だったはずですけど……」
困惑気味の奏が画面を見ていくと、ツイートはどんどんアップされていて、『奏ちゃん、マジ天使』とか、『幸運の女神さま？』とか、『奏ちゃんの雑誌、今月号買うわ』などの文字が並んでいる。
「ちょっと、奏ったらすごいじゃない？　ていうか、その人とは今付き合ってないの？　もったいないなあ。そしたら私にも紹介してよ」
モデルの女の子が興奮して言うが、

「だから、二人ともほとんど記憶にないって」
と、かなり冷めた目線だ。
「でも、見ると悪いことは何も書いてないし。雑誌の宣伝にも一役買ってるみたいだし、スキャンダルなら困るけど、こういう話題なら全然オッケーよ。今度対談とか企画してみようかしら」
「困ります。だって、二人に失礼だし……」
編集者も乗り気の様子で、奏一人が置いてきぼりの雰囲気になってしまった。
「あれ、奏、この人ってヴァイオリニストの柊さんよね。それに、前にYeahTubeで話題になってたジュンくんは、柊さんの弟さんだったのね。奏ってすごい人と付き合ってたんだね」
いつの間にかカメラマンやスタッフまで奏たちの周りに集まって来た。
「柊恵一は同級生だったけど、柊兄弟とは、私は付き合ったことありませんから」
むしろ妹たちが……と、言いかけて、歌たちにまで迷惑をかけるわけにはいかないと思い、奏は黙った。さすがに本人たちの口から、奏の悪口などは決して出なかったし、激しい誇張もない。良い思い出程度なものだったが、SNSの恐ろしさは奏もよく分かっている。内容がどんな風に変わっていくかと思うと、気が気ではない。
「奏ちゃん、小野寺くんと清水くんの他にも名乗りを上げた人が出て来たわよ」

編集者の声に、奏を始め全員が画面を再び見ると、奏の知っている名前が出て来た。
「この人知ってる。ドイツでプレーしてるサッカー選手だよ、奏」
と、モデル仲間が指を差し、
「おー、こっちは秋から始まったアニメの声優だよ。まだ新人だけど、いい役ついてるよ。奏ちゃん、彼とも付き合ってたの？　すごいじゃん」
と、スタッフから声をかけられ、奏は当惑してしまった。名前の出た誰もが、今は記憶の片隅にしかない存在だったからだ。
「で、なんで別れちゃったの？」
全員が興味津々の目で奏を見た。そう来るだろうと分かっていた奏は、深くため息をついた。

撮影の予定が変わっただけじゃなく、自分のことばかりが話題になり、更にそのせいで当初の予定より一時間以上も撮影が長引いたことで、奏の気分は最悪だった。
「奏ちゃーん、どうしたの～～？　眉間にシワが寄ってるよ～～美人が台無しだよ～」
出迎えてくれたマイメロに言われ、奏はサッと玄関の鏡を見た。
「マイメロ～～」

奏はすかさずマイメロに抱きついた。

「奏ちゃ〜〜ん。ダイジョブだよ〜、ホラ、笑顔笑顔」

落ち込んでいた自分にマイメロがすぐに気づいてくれたことが、奏にとって何よりも嬉しかったのだ。小さな手で、まるで姉や母親のように頭をなでられ、奏は自分の気持ちが落ち着いていくのが分かった。

撮影の現場では、盛り上がっているスタッフを当たり障りのない言葉でかわし、いつものように笑顔で後半の撮影を終えた。家事をしなきゃと言い訳して、すぐに現場から家に戻った奏だったが、いつものように真っ直ぐ顔を上げて歩くことが出来なかった。

「あのね〜、歌ちゃんと琴ちゃんは、学園祭の後片づけがあるから遅くなるって。パパさんも夜には帰るって来るって連絡があったよ。今日は二人でゆっくりご飯食べよ。ねっ」

「ふう〜、ありがと、マイメロ。着替えたらすぐに来るね」

マイメロも歌と一緒に学園祭に行って来て、奏の話題が思いがけず広がっているのを知っていたのだろう。奏はマイメロの気遣いに感謝すると同時に、いつもの自分に戻って行くのが分かった。マイメロを抱いてキッチンに入りマイメロを置くと、奏は自室に上がって行った。

「奏ちゃん、マイメロ、ケーキ焼いといたよ。後で一緒に食べよう」

キッチンに降りていくと、夕食の用意が進んでいた。マイメロの得意なパウンドケー

キを焼いたのだろうか。バニラの香りがキッチン中に漂っていた。
「マイメロのケーキはどこのお店のより美味しいものね。楽しみだわ」
奏は明るく言うと、テーブルに二人分の料理を並べた。

食事を終えて、リビングでケーキを食べ始めたところに、歌と琴が帰って来た。
「お姉ちゃん、大丈夫？　何か言われなかった？」
心配そうな顔をした歌がリビングに入って来た。
「あんなに話題になるなんて、思ってなかったよー。みんなに奏ねえのこと、羨ましいって言われたけど、あたしは逆に心配になっちゃって……」
さすがに子供の頃からネット社会に浸っていた歌と琴は、奏の話題が拡散して、危険な目に遭わないかを心配していた。こういう時、根も葉もないことをネットに上げる人が出て来ないとも限らないからだ。
「大丈夫よ。こういう話題はすぐに火がつくけど、消えるのも早いから」
奏は二人の妹にサッパリとした口調で答えた。
「もう〜、二人とも帰ってくるの早いよ〜〜。パウンドケーキの取り分が減っちゃう」
マイメロがキッチンに戻って、残ったケーキに包丁を入れていると、
「ただいまー。奏ー、大丈夫か？　何かひどいこと言われなかったか？」

父親の雅彦も帰って来るなり奏を見た。
「大丈夫よ、お父さん」
奏の穏やかな表情に安心した雅彦は、リビングのテーブルに目をやり、
「おっ、いい匂いだな。これはマイメロ特製のパウンドケーキ。いいタイミングで帰って来たな」
ニコニコしながら、マイメロに言うと、
「はいはい。パパさんの分もあるよ。みんな着替えてリビングに集合だよ～～」
マイメロが全員分のお皿を並べるのを見て、歌たちはカバンを持って、それぞれの部屋に入って行った。

三姉妹の父親の雅彦も、旅行記の編集者と話していた時に、歌たちの学園祭での奏の話題が広がっていたことを知り、打ち合わせもそこそこに帰って来たのだった。
実際のトークショーは一日目の午後にあり、特別に前もって宣伝などはしていなかったのにどこから情報を得たのか、若い女性がたくさん集まり、大盛況だった。
歌はその時録画した映像をパソコンで流しながら、
「ね、確かにお姉ちゃんの名前は出たけど、ちょっとだけでしょ？」

「そうだよね。それより、奏ねえのアドバイスのお陰で、自信を持つことが出来たって言ってるよ」

歌たちが言うように、二人の元カレは奏とは少しの期間しか付き合ってなくて、いい女性の友人という感じの内容だった。司会者も二人も奏が悪く思われないように、気遣っていたのだろうが、雅彦も安心したようだ。

「本当だね。それで幸運の女神とか言われたのか。今度から宝くじは奏に買って来てもらおうかな」

ホッとしたせいか、口が軽くなった雅彦に、

「小野先輩とは演劇部のみんなと一緒にカラオケに行ったことがあるの。そしたら、すごく歌が上手くて、私も部員たちもビックリしたわ」

夢ヶ丘学園高等部の演劇部は部員も多く、脚本や演出と違って大道具や小道具は裏方に徹しているところがあったと奏は言った。

当時から目立っていた奏は、チョイ役とはいえ、部員でもないのに舞台に出ることになり、居心地が悪かった。その時大道具の小野を見つけ、話しかけたことから何となく仲が良くなり、裏方の部員たちとも交流が出来て、カラオケに奏も誘われたのだ。

「その時、歌も上手いし体力もあって筋肉もしっかりついている小野先輩なら、ミュージカル俳優なんてカッコいいんじゃないかしらって言ったことがあるの。ほんの思いつき

だったわ。今まで忘れていたくらいだもの」
「へえ、それがオーディションに合格するまでになったんだね」
「すごいね、奏ねえの先見の明ってヤツ？」
歌と琴に尊敬の目を向けられて、
「違うって。私はホントに思いつきで言っただけ。ミュージカル俳優になれたのは、先輩の努力の成果よ。結局演劇部のコンクールが終わると受験勉強が本格的に始まって、私と小野先輩は何となく学校で会った時に、挨拶をする程度になっちゃったのよ」
と、言い訳した。
「じゃあ、もう一人の……清水くんって人とは、どういう付き合いだったんだ？」
今まで奏の付き合っていた男性の話を、あまり熱心に聞いたことのなかった雅彦も、かなり気になっていたらしく尋ねると、奏は軽く首を傾げ、
「漫画のキャラクターの女の子が上手く描けないから、モデルになってくれないかって、先輩に頼まれて、渋々引き受けたのよ。あ、頼んできたのは女の先輩よ。清水先輩の幼馴染みって言ってたわ」
「お姉ちゃんって、中学生の頃から目立ってたし、頼まれると嫌とは言えない性格だもんねえ。生まれついてのお姉ちゃん気質っていうか」
歌も人のことは言えないわよと言いたくなったが、奏は続けた。

「それがね、清水先輩はサッとデッサンすると、余った時間にちょこちょこイラストを描いていたのよ」
「モデルを口実に付き合おうって思ってたんじゃないの？」
歌がニヤニヤしながら聞いてきた。
「せっかく時間を作ってモデルをしてたのにって思って、先輩のクロッキー帳を見てみると、パラパラ漫画みたいに端っこにキャラクターが描いてあって、さすがにちょっと腹が立ったわよ」
「奏ねえに頼んでおいて、それはないよね。歌ねえと駆先輩だったら、大ゲンカになっちゃいそうだね」
琴がチラリと歌を見て言った。奏はため息をつき、
「清水先輩は無口過ぎて、ケンカにもならないわよ。物静かで地味なところが好きだったんだけど、熱心に投稿してたわけじゃないし、応援してもやる気が見えなくて……」
どうも、絵がちょっと描けて勉強が苦手だったので、現実逃避の手段として漫画家志望と言っていたのだと知り、奏はすっかり冷めてしまった。
「漫画家志望の人の描くデッサンじゃないことは見て分かったわ。パラパラ漫画のキャラの方がよっぽど可愛いし。いっそ、ギャグかキャラクターを描いてた方がいいんじゃないのって言ったことはあるわね」

「でも、今はその通りに有名になったじゃないか」
「それもたまたまよ。まだ若いからちょっと話題になっただけだと思うわ。だって、私たちもお父さんも知らない人だったでしょ？　私もそうだけど、重要なのはこれからよ」
またもや素っ気なく雅彦に返した。
同様に新人の声優も顔はイマイチで地味なタイプだったが、声がカッコいいことに気づいて好きになっただけだと言うし、ドイツのリーグにいるサッカー選手も、知り合った当時は県大会の予選ですぐに敗れた選手だった。
「大柄で顔も強面でゴツイ感じだったわ。守備の選手で話題にもならなかったけど、当時有名だったドイツ人のサッカー選手に似てるって思ったの。で、ドイツ人にそういうタイプの選手って多いんじゃないかって言ったことはあるけど……本当にドイツに行っちゃったんだ」
またまた関心もなさそうな言い方だった。
「そう思うと、お姉ちゃんが言ったことって、アドバイスというより、確かに思いつきって感じだね」
「でしょでしょ？　歌もそう思うでしょ？　悪く言われなかったのはありがたいけど、そんな風に言われると逆に困っちゃうわよ」
奏が短期間にせよ長期間にせよ、付き合った男性は多い。全員がケンカ別れというよ

りも、自然消滅や奏か相手が忙しくなって自然に別れたケースばかりで、特別に未練はなさそうに見えた。
「で、今の彼氏は何か言ってないのかい？　ヤキモチを焼くとか、不安になるとか」
雅彦がふと思い出して尋ねると、
「あっ、そうよね。大丈夫だと思うけど、連絡してみるわ」
と、奏は自分の部屋のある二階に上がって行った。
「奏ちゃんって、今の彼氏に夢中だねえ」
ケーキの皿を集めながらマイメロが言うと、
「今の奏ねえの彼氏は鈍そうだよね」
「うん。前の小説家志望の彼氏とは、しょっちゅうメールのやり取りをしていたよね。彼氏というより相談相手みたいな感じで。今の彼氏にはお姉ちゃんはお弁当やデザートを差し入れしてるけど、彼氏の分だけじゃなくて、同じ研究してるメンバーの分まで作ってるよ。母親みたいだね」
琴も歌も奏が報われないことが多いと感じていた。ただ、奏の有り余る母性と前向きでタフなところはすごいと思っていた。
「奏ちゃんって一人に決められないタイプなのかな？」
「それじゃ、奏が目移りの激しい子みたいじゃないか」

雅彦はマイメロに反論したが、歌はうなずいた。
「多少はそういうところがあるかもね。でも、どうしてお姉ちゃんはハイスペックな男の人に交際を申し込まれてもノーって言っちゃうのかなあ」
「歌ねえ、それは奏ねえがすぐ次の人に夢中になっちゃうから、隙間がないんだよ」
琴の言う通りかもしれない。
「絶妙なタイミングでハイスペックな男の人から申し込まれても、第一印象がダメならOKしないかもね」
二人の娘の意見に、雅彦はうなずきながらも複雑な思いだった。

翌朝、歌と琴が目を覚ますと、奏はお弁当をせっせと作っていた。
「また彼氏に持って行くの？」
ゆうに四、五人分はありそうなサンドイッチを見て、歌が尋ねると、
「今日も彼は研究室にこもっているんですって。みんなの分のサンドイッチを作って持って行くって言ったら、嬉しそうだったわ」
と、作業を続けている。かたわらでマイメロがスープを作っていた。
「みんなの朝ご飯もサンドイッチだけど、いいわよね」

もちろん誰にも問題などなく、歌たちもダイニングにお皿を並べた。目を覚ました雅彦も、コーヒーを淹れる準備を始めた。

「歌も琴も今日はお休みでしょう？　今お洗濯してるから、干しておいてね」

「お姉ちゃん、彼氏は昨日のこと知ってたの？」

歌が気になっていたことを聞くと、

「全然知らなかったのよ。ずっと大学にいたんだって。それに、朝見てみたら、もう私の話題はほとんど出てなかったの」

一番ファンの多い小野寺のツイッターは、新しい舞台の話題や昨日の夜に会った、出演者との話を載せていて、そちらが話題の中心になっていた。

「あまりお姉ちゃんの話題を引っ張ると迷惑がかかると思って、新しい話題をアップしてくれたのかなあ？」

「きっとそうだろうね。奏は多少は顔と名前が知られているけれど、まだ学生だし、どこかの事務所に所属しているわけでもないし。自分とは立場が違うからね」

歌と雅彦の言う通りだろうが、

「若い女の子に人気の俳優だからじゃないの？　みんな『彼女』がいるとかいたとか、知りたくないもんね」

琴の意見が一番正しいかもしれなかった。

「でもまあ、彼氏が関心なくて良かったな」
雅彦が言うと、
「うーん、ちょっとくらいヤキモチ焼いて欲しかったけれどね。ただ、彼が知らなくても、他の人から二人のことを聞かされるのは嫌だから、自分で今日話しておこうと思って」
奏はニッコリと微笑んだ。その後歌に向かって、
「歌みたいに、離れていてもずっと同じ人を好きでいるって、羨ましいし微笑ましいって思うのよ。私はどうしても無理なのよね。飽きっぽいのかしら……」
「そんなことないよ、お姉ちゃん。私だっていつも……」
ふっと寂しい顔になった奏に、歌が反論しようとすると、
「まっ、いいわ。私は私だものね」
と奏がウインクした。いつも通りの奏だった。
「しかし、今回の理屈で言うと、小説家志望だった前の彼氏も、今付き合ってる実験ばかり夢中になっている彼氏も、いずれは売れっ子小説家や大発見をするかもしれないな」
コーヒーを並べながら雅彦が言うと、
「えー、ないない」

奏はあっさりと言い放った。

「なんでだい？　今までの例を見ると、確率高いんじゃないのかい？」

更に聞くと、奏は心もち困ったような顔を浮かべ、

「昨日寝る前に今まで付き合ってた男の子のことを思い浮かべてみたのよ。こんな時代でしょ？　私も毎月雑誌に出てるわけだし、心配になるじゃない」

「そうだよね～～奏ちゃんがもっと有名になれば、名乗りを上げる人が出て来るかもしれないもんね～～」

マイメロが面白がって言うと、

「違うわよ。確率で言えば本当に大したことなかったの。みんな普通の大学生だったわ。だって、高校時代に付き合ってた男の子って、合計二十人はいるもの。男友達を含めたらもっと多いわね。だから、本当にたまたまよね」

言いつつ、奏は大量に作ったサンドイッチの半分を、お皿に載せテーブルに置いた。残りの半分をケースに詰めると、紙のバッグに入れて、

「じゃあ、私は大学に行ってくるわね。今日はそんなに遅くならないと思うわ」

と、コートを羽織ると元気に出かけて行った。

（奏……どうしてこうなった？）

（お姉ちゃん……ホントに私のことが羨ましいの？）

（奏ねえ……今回は報われるのかな？）
（奏ちゃん……どうしてがんばって長く付き合わないの？）
雅彦、歌、琴、マイメロは言葉もなく、椅子に座った。テーブルには彩りよく並べられたサンドイッチがある。きっと、相手の男性は栄養バランスや彩りなど気にせずに、実験だかデータ入力の合間に、じっくり見もせずに食べるのだろう。
テーブルに一緒に置かれたスープ、そして雅彦の淹れたコーヒーの湯気が、朝の陽ざしの中で静かに立ち上っていた。
「お姉ちゃん、女子力と美人の無駄遣いだよ……」
歌だけでなく、家族の誰もがそう考えたのだった。

第四話(だいよんわ)　髪(かみ)の毛(け)があるとイイナ！



『●……★ーー○×▼♯◎……▽▲……☆♭♪★◎ーーー！！』

ある日の早朝、柊家の一角から地を這うような声が聞こえた。言葉にならない、日本語なのかも分からない声だった。

「何事だ？」

帰国していた恵一の部屋まで聞こえてきた。恵一がベッドから降りたところに、サッと執事のセバスタンセバスチャンが現れ、

「セバスタンの声だと思われます。恵一様の安眠を妨げるとは……まことに申し訳ございません。弟に代わり謝ります」

世が世なら切腹でもしかねない悲痛な顔と怒りの表情に、

「い、いや。むしろ一大事なのではないか？　双子の兄のお前も気になるだろう。セバスチャン、すぐに様子を見て来てくれないか」

恵一は出来るだけ冷静な声で話しかけた。セバスタンが大声をあげることなど、滅多になかったからだ。

「分かりました、恵一様」

途端に冷静な顔に戻ったセバスチャンは、すぐに部屋を出て行った。叫び声は一度きりで、その後は静かなものだった。柊家のセキュリティは万全で、用心棒もしてくれる二匹のワニ、地獄のみっちゃんと横須賀のよっちゃんもいた。となると、別のことか。

恵一はすっかり目が覚めてしまい、洗面所に向かった。恵一の身近で今まで起きた色んな出来事を考えれば、原因がセバスタンだと分かっただけでも安心した。

「慣れた……？　いや、ばかな」

危機管理能力が大きく揺らいでいる自分に気づき、愕然とするのだった。

しばらくするとセバスチャンが戻って来て、

「恵一様、朝から騒がしくして申し訳ありません」

と、恵一に頭を下げる様子は神妙な面持ちではあったが、大事件ではなさそうだ。

「何が起こったか話してくれないか？」

恵一が尋ねると、セバスチャンは大きくため息をつき、説明を始めた。

「実は、ギリギリ一本だけ残っていた、セバスタンの頭のてっぺんの毛が無くなってしまったのです」

執事らしく、セバスチャンの表情はいつもと変わらない。神妙な感じにも見えるし、笑いをこらえているようにも見える。

「なんだ、そんなことか」

思いもかけぬ他愛もない出来事に、恵一は安心すると同時にドッと疲れが出た。異変が起きたことも考え、セバスチャンが部屋を出て行った後に洗面も着替えも済ませていたのだが、ソファに深々と腰を下ろし、セバスチャンを見て、

「すっかり目が覚めてしまったな。セバスチャン、コーヒーを持って来てくれないか?」
「かしこまりました」
セバスチャンは表情を変えずに、再び部屋を出て行った。
確か以前にもそんな騒動があったなと、恵一は思い出し、ブルッと震えた。頭の中にマイメロの顔が思い浮かんだからだ。
(また思い出したくないことを思い出してしまった……)
恵一にとっては、マイメロ絡みの事件のどれもこれもが、黒歴史そのものだった。鬱々とした顔になった恵一に、
「お待たせいたしました」
セバスチャンがドアをノックして入って来た。コーヒーをうやうやしくカップに注ぐと、テーブルの上に置いた。
「セバスタンはどうだ? まあ、どうせしばらくしたら生えてくるのだろう……いや、生えてこなくても別に問題はないだろう? 本人は少しは寂しいかもしれないが」
恵一はソーサーごと受け取り、カップを口に運んだ。
「私もそう思いますが、セバスタンはことのほかこの一本残っていた髪にこだわっている

ようで。しかも前と違って、自分でも知らないうちに無くなっていたようです」
前にセバスタンの毛が無くなった原因は事故のようなものだった。当然その時も大騒動になったわけだが。
しかし、と、恵一は腕組みをした。そもそも髪の毛というのは、一定の期間で生え変わったりするものじゃなかったか。
恵一の長い髪も毎日のブラッシングやシャンプーで抜けているが、全体の毛が無くなったことはないので、一定のサイクルで生え変わっているのだろうと思っているし、そもそも一本一本注意して見たことなどない。
「……そうか」
自然だろうが事故だろうが無くなったことに代わりはないのに、どう違うんだと恵一は思ったが、誰にでもこだわりはあるものだと、好意的に解釈することにした。
「涙を堪えて近辺を探し回ってました。弟の気持ちも分かりますが、業務に支障のないようにしますので、ご安心ください」
「ああ……大変だな。まあ、気が済むまで探してみればいい」
探してどうする気なのかとチラとは思ったが、他に答えようもなく、恵一はコーヒーをゆっくりと飲んだ。柊家には使用人が何人もいるし、恵一の用事はセバスチャンで事足りる。

セバスタンは恵一の弟の潤付きの執事だが、平日は学校に行っている高校生の潤には、特別な用事などないはずだった。

セバスタンは髪を探したり、頭のてっぺんを鏡で映して、産毛が生えていないか何度も確認したりで、丸一日が過ぎ去った。

「いやー、セバスタンの最後の一本の毛もよくがんばったよ。そろそろ諦めてもいいんじゃないかなあ」

翌朝、潤が慰めのつもりで明るく話しかけると、

「潤、彼はセバスタンじゃなくてセバスチャンだ」

朝食のテーブルの向かいに座っていた恵一が静かに言った。

「潤様……」

声に振り返った潤の真後ろに、心もち残念な表情を浮かべて立っているセバスタンがいた。

「いやー、つい間違えちゃったよ。そっくりだもんなあ、二人とも」

誰が見てもてっぺんの髪の毛以外はそっくりなセバスチャン兄弟ではあったが、当人たちは『似てない』と思っているのだ。もちろん、家族も二人がそっくりだと思った上

で、似ていないという二人の言い分も尊重している。二人の言い分を聞いていると長くなるし、聞いたところで二人の違いは、他人からはさっぱり分からないのだ。
「潤、毎日一緒にいるのに、髪の毛一本無くなっただけで間違えるとは主失格だな」
と、恵一に言われ、潤は慌てた。
「じゃあ、兄貴はどうなんだよ。ちゃんと分かるのか？」
「当然だ」
即座に恵一に言われた潤は、サッと立ち上がった。セバスタンとセバスチャンと一緒に部屋から出ると、ドアを閉め、セバスチャンとともに入って来た。
「兄貴、どっちか分かるか？」
「セバスチャンだろう」
素っ気なく言い当てた恵一に、セバスチャンは喜びを隠しきれない。
「じゃ、じゃあ……」
再び同じように部屋の外に出た。二人は無表情で従い、廊下で待機した。ドアを閉めて二人に振り返った潤は、片方を連れて入った。
（セバスタンを連れて来ると見せかけて、もう一度セバスチャンだ……兄貴も今度は絶対に騙されるぞ）

潤がニヤニヤしながら、
「兄貴、今度はどうだ？」
「セバスタン、髪の毛が無くなってもお前はお前だ。今まで通りがんばってくれ。ストレスは髪にも良くないというからな」
恵一に静かに言われ、セバスタンも喜びの表情になった。潤はセバスチャンを連れて来たつもりだっただけに、余計ビックリだ。
「なんで兄貴には分かるんだよ。髪の毛以外ソックリなのに！」
その場にいた恵一、セバスチャン兄弟、メイドたちも、
（あー、言っちゃったよ……）という表情に一瞬なったが、無表情を通した。実はベテランのメイドでさえ、区別がついていないのだ。
「さすがに遠くからでは、確かに僕も分からないが……近寄ればすぐに分かるだろう。セバスチャンじゃない方がセバスタンだ」
決定的なセリフだった。
悔しがる潤をしり目に恵一は静かに立ち上がった。
「……んだよ、その理屈！」
潤を無視して、直立不動のセバスタンに声をかけた。
「ごちそうさま。僕は部屋に戻るが、セバスチャンに後で部屋にコーヒーを持って来るよ

うに言ってくれないか？」
「かしこまりました、恵一様」
セバスタンがうやうやしく頭を下げた。その瞬間、この場にいた全員が潤をダメ主と確定したのだった。

更に翌日の土曜日、潤のところに歌、真菜、美紀がやって来た。真菜は時々潤のトレーニングに付き合いがてら、潤の家にある高性能なトレーニングマシンを使って汗を流している。スポーツ、とりわけ格闘技全般に強い真菜は、潤が集中力を持続するためのトレーニングをサボらないように、見張りも兼ねている。
セバスタンの髪の毛が無くなったことは潤から聞いていたが、
「うちらなら間違えるのもしゃーないと思うけど、潤くんはあかんとちゃう？」
「そうねえ。二人は外見だけじゃなくて、声もそっくりですもんね。でもやっぱり……」
朝食の時のいきさつを聞いた真菜と美紀が、潤にダメ出しをした。
「でも、柊先輩は本当はどうやって見分けているのかな？」
歌が尋ねると、
「そうね。柊先輩がいて良かったわね。聞いてみればいいじゃない？　私も知りたい

わ。どうやって見分けているのか」

美紀も興味津々で潤に尋ねた。

歌は軽音楽部でベースを弾いていて、美紀は潤の作った曲の作詞を担当していることもあって、三人はよく潤の家に遊びに来ている。

もちろん、三人が潤を訪ねた時、出迎えたのがセバスチャンなのかセバスタンなのかは分からない。ただ、潤の用事の時はセバスタンが相手をするし、恵一がフランスに留学している現在、セバスチャンとセバスタンが一緒にいる機会は少ない。

「それがさ……」

言い淀む潤に、三人が注目した。

「見分け方なんかないって、兄貴が言うんだよ」

「じゃあ、柊先輩もたまには間違えることもあるの？」

再び歌が聞くと、

「いや、それがいつも合ってるんだ……」

潤はガックリと肩を落とした。

聞けば使用人たちもセバスチャンとセバスタンの違いが分からず、間違えてばかりで大混乱をきたしていた。唯一見分けがつく恵一に確認してもらうこともしばしばで、潤は完全に恵一に呆れられた感がある。

恵一はコンサートの打ち合わせや練習のない時は、部屋で大学の課題をしているので、セバスチャンがピッタリと付き添う必要もない。
また柊家は大邸宅のため、出入りの業者や両親の仕事関係の電話などもある。使用人の数も多く、セバスタン一人で仕切るのは大変なので、セバスチャンがいる時は二人で仕事をこなしている。
二人が頭を突き合わせて打ち合わせをしている時は、用事のある方の名前を呼び、答えてくれた方が本人だと分かるが、バラバラで仕事をしている時などは、まったく判断がつかない。
「間違えたとしても二分の一の確率や。半分は当たるはずや」
「そうそう。時々間違えるくらいなら、問題ないもんね」
真菜と歌が励ますと、潤はガックリと肩を落とした。
「それが……外れる時の方が圧倒的に多いんだよ」
「くじ運もなさそうね」
美紀がズバリと言うと、潤は腹立ちまぎれに、
「もー、兄貴もとっととコンサートに行っちゃえばいいんだよ。そうすればセバスチャンもついて行くから、問題は解決するのにさー」
「それは問題を先送りしてるだけとちゃう？」

「そうよ。汚名返上のチャンスよ、潤くん」
真菜と美紀の励ましを受けて、潤もその気になったところに、
「お茶が入りました」
と、声がした。ワゴンを持って入って来たのは、ちょうど喉が渇いていたんだ
「やあ、ありがとう。セバスタン。セバスタン。
潤が気安く声をかけるが返事はない。
「……潤様、私はセバスチャンでございます」
残念そうに言うと、セバスチャンは銘々のティーカップに紅茶を注ぎ入れた。
「ごめんなさい。私もセバスタンだと思ってた。潤くんのところに来るのは、セバスタンだって思い込んでいたもの」
歌が申し訳なさそうな顔をすると、
「いいのですよ、歌様。セバスタンは今、庭師と打ち合わせをしておりますので、私が替わりにお茶を持って参りました」
と、テーブルにカップを置くと、部屋を出て行った。潤が窓の外を見ると、広大な庭の隅にセバスタンと職人が数人話し合っていた。
「くっそー、マジかよ。わざとじゃないのか？」
「もうすぐ柊先輩のコンサートが始まるし、二人の留守の間にセバスタンを観察すれば

いいじゃない？」

美紀が苦笑しながら言い、

「それに、コンサートが終われば、柊先輩はまたパリに戻るんだから、間違えっこないわよ」

「セバスタンの髪がない今がチャンスや。がんばりや」

歌と真菜に励まされ、ここ数日家の中で孤立感を味わっていた潤は、

「よっしゃ、やるぜー！　絶対当ててやるぜ！」

紅茶を飲み干すと、トレーニングを開始……するかと思ったら、カーテンの陰に隠れて庭にいるセバスタンの観察を始めた。

「当てる、当てないっていう問題じゃないよね」

歌が小声で言うと、美紀と真菜がうなずいた。ちょっと違うと三人は思ったが、潤のやる気が出たのでヨシとした。

月曜日に登校してきた潤を、歌たちが囲み、

「どうだった？　見分けつくようになった？」

「歌ったら、まだ一日半しかたってないじゃない。そんなに焦らせたら可哀そうよ」

「つうか、もうセバスタンの頭のてっぺんに毛が生えてきたりしてな」
潤を質問攻めにした。
「今日も分からなかったよ。あー、もー、マズイ、マズイよ。オレ、家での立場超マズイよー！」
潤は頭をかきむしった。もっとしょんぼりしていると思っていた歌たちは安心したものの、
「兄貴はコンサートが始まるから、明日の夕方には関西に行くんだけど、昨日は特訓とか言い始めてさ、二人をちょくちょく入れ替わらせて楽しんでるんだよ。もー、サイテーだよ。だいたい、髪の毛以外どこが違うんだよ！」
「まあまあ、潤くん、落ち着いて」
それはあんまりなんじゃと、三人は思ったが口に出す者はいなかった。美紀はポンポンと潤の肩を叩いた。
「柊先輩は楽しんでやってるんじゃないと思うけどな」
「うちもそう思うわ」
歌と真菜が言うと、美紀もうなずいた。潤も本当は親切でやっていると分かっていた。
ただ、恵一の表情筋があまり活発ではないので、優しさを感じられないのは確かだ。おまけにセバスチャンとセバスタンは、執事という仕事柄、表情は豊かではない。

「とにかく、今は誰でもいいから味方が欲しいんだよ。みんな、今日も夕方、うちに来てくれないかな」

人一倍テンションのアップダウンの激しい潤のことだ。家の者全員から評価を下げられて、寂しく感じているんだろうと、歌たちは承諾した。

「ちょっと面白くなってきたわね」

美紀はこっそりマイメロのママのようなセリフを言った。

授業が終わり、歌たちは潤と一緒に柊家に行った。

玄関で出迎えたのは、

「お帰りなさいませ。潤様、皆様」

「ただいま、セバスタン」

潤が答える。

「お邪魔します」

歌たちが頭を下げた。

「お茶の用意がございます。トレーニングルームにお持ちしてよろしいですか？」

セバスタンで間違いはなさそうだ。潤はホッとした顔になったが、すぐに戻して、

「頼むよ。兄貴は？」

「ただいま、恵一様と兄は明後日のコンサートの打ち合わせで出かけております」

セバスタンは潤の後ろにつき、歌たちのためにトレーニングルームのドアを開けた。

「良かったな。間違えないで」

セバスタンがドアの向こうに消えたのを確認して、真菜がそっと言った。

「でも、見分けがつかないことに代わりはないんでしょう？」

歌が言うと、

「ああ。でも、あと少しで兄貴とセバスチャンはいなくなるし。ゆっくり観察するよ」

「そうやな。双子ゆうても髪の毛以外に違うとこあるだろうし」

「そうね。今まで髪の毛でしか判断してなかったなんて、セバスタンにもセバスチャンにも悪いもの、ね」

真菜と美紀が励ましの言葉をかけた同じタイミングで、お茶の用意を持ってセバスタンが入って来た。

「潤様、今まで本当に髪の毛だけでしか区別してなかったのですか？」

珍しく涙目になっている。

「いや、そんなこと……あるかな」

そんな正直に言わなくてもと、歌たちは思ったが、

「……今まで薄々感じてはいましたが、長年苦楽を共にしてきた私と、恵一様付きの兄との区別がつかないなんて……あんまりです」

セバスタンは悲痛な声で言い、直接言われたことはなかったので、潤は少なからずショックを受けた。
「髪の毛を失った寂しさよりも、潤様に覚えてもらえていないことの方が……」
押し黙ったままの潤に、セバスタンはバツの悪そうな顔をした。言い過ぎたと思ったのだろう。
また、セバスタンも恵一やセバスチャンと一緒にいた頃と異なり、イギリス留学では毎日潤の世話をしたし、レコーディングの手伝いやトレーニングの設備を整えたりもしてきた。なので、ただ悲しかったのだろうと歌たちは思った。
使用人たちも恵一や潤、セバスチャンとセバスタンがいた頃は何となく見分けがついていたのだが、四人ともしばらくいなかったため、混乱していたのだ。セバスタンの一本の毛は唯一の手がかりだったわけで、今は全員が潤と同じく手さぐり状態だった。たかが髪の毛、されど髪の毛である。
で、潤の方はそのまま沈黙が続いたが、
「……んだよ！」
うつむいていた潤が顔を上げた。心配そうに見守っていた歌たちが安心したのもつかの

間、

「だいたいセバスタンは髪の毛一本を大事にし過ぎなんだよ！　年々ひどくなっていくよな、それ。イギリスでも手入れに夢中になっていたじゃないか。そんなに過保護にするから無くなっちゃったんだよ！」

と、何故か逆ギレし始めた。

「潤様……」

セバスタンがおろおろして潤に近づいた。

逆に歌たちは呆然としてしまった。仲裁しようとしたのではなく、

（過保護って……それをアンタが言うか！）

これは歌たち三人の心の声だった。

「二人とも俺たちに見分けて欲しかったら、服の色を変えるとか、髪型を変えるとかあるだろ！」

（それもちょっと本末転倒なのでは）

再び三人は心の中で返した。

「ちょっと、潤くん。それは八つ当たりってもんじゃや」

歌が咎める口調で言い、

「そうや。うちらが潤と知り合いになる前から、セバスチャンとセバスタンは同じスタイ

ルだったんとちゃうの？」
真菜も加勢した。
「でも、今はやっぱり混乱を避けるためにも、イメージを変えるべきだったかもね」
潤とセバスタンを見比べていた美紀は、冷静に提案した。セバスタンはハッとなって、
「そうでした。私どもも悪かったと思います。明日からはオールバックに……」
「できへんやろ、オールバックは」
しゃべり終わる前に、真菜の関西人ツッコミが入り、
「それもそうね」
三人が笑うと、潤とセバスタンも柔らかな表情になり、
「その、悪かったよ。すぐには無理だろうけど、がんばって見分けがつくようにするからさ」
「潤様……」
やっと和解となった。
「あ、すみません。紅茶がすっかり冷めてしまいましたね。今淹れ直してまいります」
気を取り直したセバスタンが、紅茶のポットをワゴンに戻そうとすると、
「せっかく淹れてくれたんだもん。冷めても平気よ、ね、潤くん」
歌が言うと潤も同意して、

「セバスタンに落ち度があったわけじゃないもんな。俺も悪かったよ」
「ケーキも美味しそうね」
美紀がセバスタンの前にカップを差し出した。
「かしこまりました」
テーブルに四つのケーキを置くと、セバスタンはカップに紅茶を注ぎ入れた。
「……ん？　あーーーーっ！！」
いきなり潤が大声を上げ、セバスタンは慌ててポットを引っ込めた。
「なんや潤くん、いきなり」
隣にいた真菜が驚いて潤の顔を見ると、潤はセバスタンの頭を指差している。
「は、生えてるよ。産毛が……」
「えっ、ホントに？」
中腰でカップに紅茶を注いでいたセバスタンが、今は立ち上がっているため、三人には見えない。
潤はセバスタンの頭を指差すと、
「あるよ。マジで」
「本当ですか？」
セバスタンは自分の頭を触るが、よく分からないようだ。

「あ、本当に生えているわよ。そうそう、これっ」
再び中腰になったセバスタンに、歌がカバンから鏡を出して手渡した。
「私も持ってるわ。これで見えると思うわよ」
美紀も鏡を出してセバスタンの頭の上にかざし、セバスタンは歌から鏡を受け取って、二枚の鏡で頭頂部を見ると、
「ああっ、これぞまさしく……」
感涙しそうな勢いである。
「潤くん、よく見えたわね」
「そりゃ、長年の勘だよ」
見れば、あるかないか分からないほどの産毛だった。潤は得意満面だ。
「良かったな。大切にしろよ」
と、さっきは過保護だとか言っていた人のセリフとは思えない。
「良かったわね、セバスタン」
「ありがとうございます」
セバスタンは歌たちに笑顔を見せると、ワゴンを押して部屋を出て行った。きっと、大きな鏡で確かめるに違いない。
潤は大きなため息とともに、ソファに腰かけると、

「あー、助かったー。これで二人の見分けがつくよ」
心底安心した顔になっている潤を、三人が見て、
「根本的に違うでしょ、潤くん」
「喉元過ぎれば……ってヤツかい？」
「それじゃ、先延ばしにしただけじゃないの？」
と、歌たちに詰め寄られた潤は、
「ま、そん時はそん時だよ」
いかにも潤らしく笑い飛ばすと、ケーキを食べ始めた。

第五話(だいごわ)　小江戸時代(こえどじだい)ってイイナ！



象川エレ康様が天下統一を成し遂げ、小江戸に幕府を開いて百年が過ぎた頃のお話でございます。

将軍職には八代目の象川エレ宗様が就いておられましたが、実際に幕府の政を指揮していたのは、エレ宗様の御正室ルミ姫様と、その腹心の友であり、大奥を一手に取り仕切っていたメロママの局様でございました。

何故お二人が政に関わったのか、諸説色々ございますが、将軍エレ宗様がちゃらんぽらんなご性格で、とても政を任せられる器ではないため、やむなくお二人が老中たちに指示を出していたというのが、どうやら真相のようでございます。

またエレ宗様は、相当な好き者でございまして、大奥のお女中たちの体を触り放題。時にはあんなことやこんなことまでもなさるヤンチャぶりで、ルミ姫様を大いに悩ませており、巷ではある意味『暴れ坊将軍』だとうわさになっておりました。

ところが、当のエレ宗様はそんなうわさには馬耳東風、いや象耳東風と申しますか、象の耳に念仏と申しますか、そのちゃらんぽらんな性格ゆえ、ルミ姫様やメロママの局様に叱責されると、こっそり城を抜け出しては小江戸の町に繰り出して、ほとぼりが冷めるまで遊び人のゾウさんと自ら名乗って、楽しく愉快に暮らしていらしたのでございます。

遊び人のゾウさんは将軍であることを隠し、町火消『めっ組』の組頭のマイメロの家に居候をしており、若頭のフラットや若い衆を伴って、町内にある茶店の『夢野屋』

に入り浸って、美人三姉妹の奏、お歌、お琴や、お歌の友達のお美紀、お真菜にちょっかいを出してはド突かれまくっていたのでございます。

ゾウさんがこんな放蕩三昧の暮らしが出来るのも、ひとえにルミ姫様、メロママの局様コンビの院政のお蔭でもございますが、小江戸庶民が平和に慣れきっていたからこそでございます。

院政の最大の功績は、東町奉行所の奉行に柊越前守恵一様を抜擢したことだと言われております。柊様は就任以来容赦ない裁きにより、多くの悪人たちを島流しにして、今では小江戸に悪人は一人もいないとまで言われております。

実際、小江戸ではスリや酔っ払いの喧嘩などの軽犯罪が、月に数件発生するくらいでございました。

そんな平和な小江戸で、幕府を巻き込む大事件が起こったのでございます。

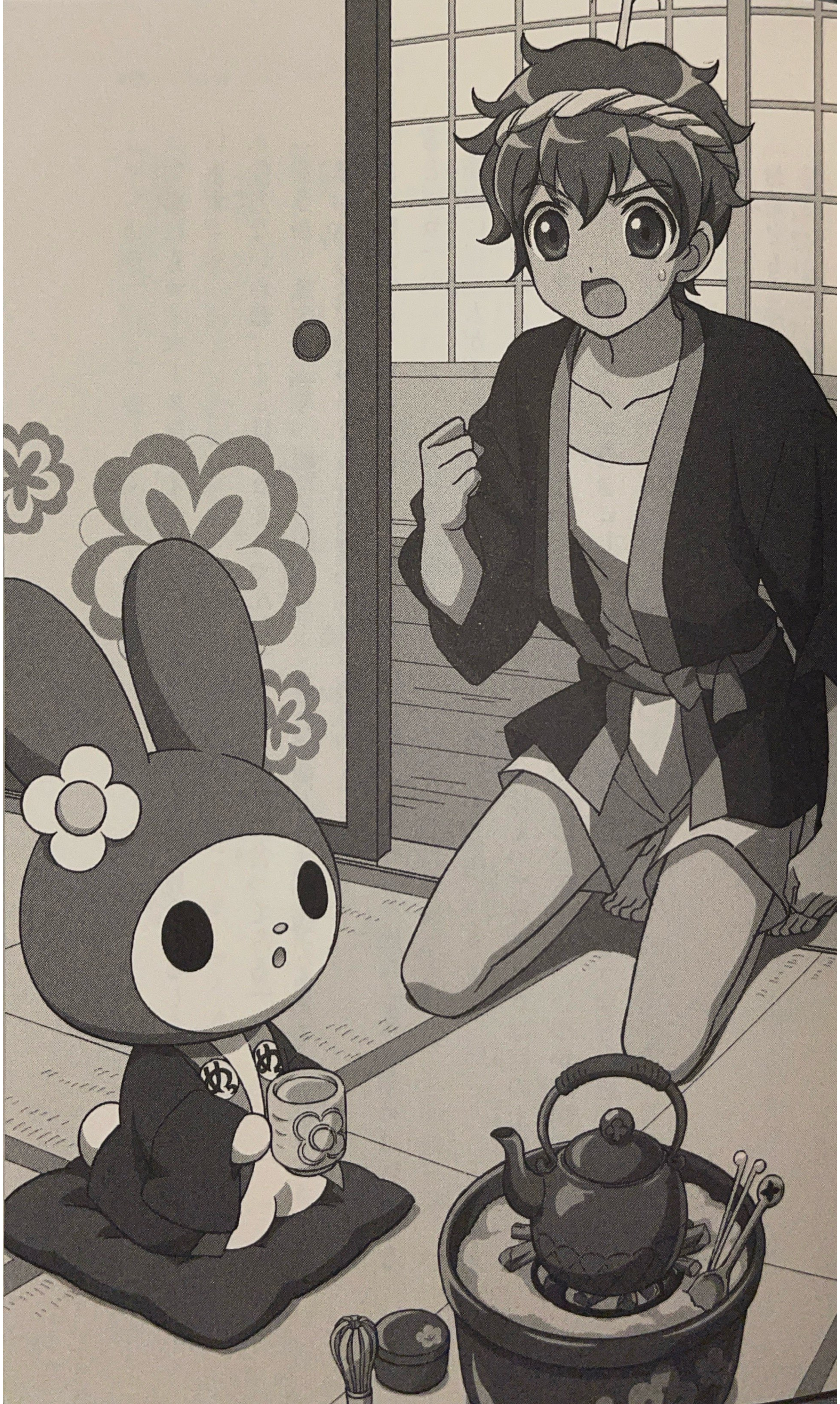
その日、町内で魚の行商をしております駆が、

「てーへんだ！　てーへんだ！」

と、大声を張り上げながら『めっ組』に飛び込んできたのでございます。

奥の座敷の火鉢の前で、組頭のマイメロがお茶を飲みながら、

「どうしたの？　駆さん」
と尋ねると、駆は呼吸を整え、
「組頭んところで居候をしてるゾウさんが、岡っ引きのクロミにふん捕まって、番所にしょっ引かれたんでえ！」
「へえ……」
マイメロが薄いリアクションで悠然とお茶をすすっておりますと、一緒にいた若頭のフラットがたまりかねて、
「駆、ゾウさんは何の罪でしょっ引かれたんでえ？」
「さすが、若頭！　そうでねえとな。実はねえ……」
駆が申すには、近頃町内を賑わわせていた連続痴漢事件の下手人としてゾウさんが、クロミ親分と手下のバクに捕まったということでございます。
「まあ、ゾウさんったら、めっだよね」
「ちょっ、ちょっと待てよ、組頭。確かにゾウさんは遊び人だけど、そんな大きな事件を起こすような奴じゃないよ」
フラットがマイメロを睨みつけると、
「や〜〜ん。フラットくん、怖〜い」
と口では言うものの、マイメロは何食わぬ顔でお茶を飲み干したのでございます。



「………」
何事にもマイペースなマイメロに、フラットと駆は顔を見合せるしかなかったのでございます。
「仕方ないわね。ここはクロミちゃんにマイメロが掛け合ってみる」
「そうか、さすが『めっ組』の組頭だ！　それで何かうまい策でもあるのかい？」
駆が尋ねると、マイメロはちょっと胸を張り、
「こう見えても、マイメロ、クロミちゃんとは幼馴染みで友達だもん。頼めば何とかなると思う」
途端に、二人がずっこけたのは言うまでもございません。
マイメロは友達と申しておりますが、クロミ親分にとってマイメロは目の上のタンコブと申しますか、いつもおいしいところを持って行かれているため、いつか箪笥の中に押し込んでロープでグルグル巻きにして、小江戸湾に投げ込んでやろうなどと思っていたのでございます。
「組頭、ともかく番所に様子を見に行きましょう」
フラットの言葉に、マイメロはうなずいたものの、
「お茶をもう一杯飲むから、待っててね」
と、急須に手を伸ばしたのでございますが、

「組頭っ！」

フラットと駆が同時に叫ぶと、マイメロの両腕を掴んで家を飛び出したのでございます。

「や〜〜〜ん」

ゆっくりが何よりのマイメロが、悲鳴と共に目を回したのは言うまでもございませんでした。

虹橋の橋詰にある番所に到着した三人が、入口の戸を勢いよく開け放ち入って行きますと、縄で縛られたゾウさんが正座をさせられて頭を垂れておりました。その前には、ハリセンを持ったクロミ親分と、十手に息を吹きかけて布で拭いている子分のバクがおりまして、三人を見るなりすごい剣幕で睨みつけたのでございます。

「何だい、お前たち！　番所に入ってくるんなら、一言声をかけるのが礼儀ってもんだろ！」

クロミ親分のドスの利いた声に、フラットと駆はおののき、マイメロの背後に回り込み、

「く、組頭、何とか言ってやって下さい」

と、マイメロの背中をツンツンと押したのでございます。
「任せなさい。クロミちゃん」
と、マイメロがクロミ親分を直視したのでございます。
「な、何だよ⁉」
クロミ親分が更に鋭い視線を向けますと、マイメロは微笑み、
「ごめんね。やり直すね」
「やり直すのかよ！」
ツッコミを入れるフラットと駆を無視して、マイメロは番所の外に出ますと、
「頼もう！　ガラガラ」
と、戸を開ける擬音を自ら言って、入り直したのでございます。
「クロミちゃん、これならいいわよね？」
「くう〜〜っ！　いちいち癪に障る事すんじゃないよっ！」
クロミ親分がハリセンを振り上げると、バクが慌てて羽交い絞めにして、
「クロミ親分、下手人以外をぶっ飛ばすのはご法度だと、お奉行様から言われているゾナ。ここは我慢ゾナ」
「わ、分かってるよ！　離せ！」
「はいゾナ」

と、バクがクロミ親分から手を離した途端でございます。
「下っ端があたいに意見すんじゃないよ！」
クロミ親分の強烈なハリセンの一撃を喰らったバクは、
「ゾナ～～ッ！」
と吹っ飛び、きつい拷問で気を失っていたゾウさんに激突したのでございました。
「ひ、ひどいゾナ～……」
バクが気絶したのとは反対に、ゾウさんは意識を取り戻して、マイメロ一行に気づくと、
「おおっ、マイメロではないか！　わしは無実じゃ。助けてくれ～」
と、拷問で出来たアザがあちこちにある顔を、マイメロに向けたのでございます。
「ありゃま、ひどいアザ」
マイメロたちはあまりの痛々しさに思わず顔を背けると、クロミ親分は不愉快そうな表情になり、
「素直に罪を認めないお前が悪いんだっつーの！」
と、ゾウさんを睨みつけたのでございます。
「クロミ……いや、クロミの親分さんよ、わしに対してこれ以上無礼な振る舞いを致すと、御上が黙っちゃいないと思うゾウ」

今は着流し姿で遊び人を演じておりますが、ゾウさんは八代将軍でございます。つい、お城にいる時のように上から目線で言ってしまったのでございます。
「何が御上だい！　ただの遊び人のくせに偉そうなこと言うんじゃないよ！」
クロミのハリセンが、ゾウさんの脳天に炸裂したのでございます。
「ぎゃひ〜〜〜ん！」
ゾウさんは大きなタンコブを作って、気絶しているバクの上に倒れ込んだのでありました。
「クロミちゃん、そんなことしたら、めっだよっ」
マイメロが文句を申しますと、
「何が『めっ』だよ！」
クロミ親分の言葉に、マイメロは唇を尖らせて、
「だって、マイメロは『めっ組』の組頭だもん」
と、拗ねたように申したのが、さらにクロミ親分を激怒させてしまったのでございます。
「それが言いたいためかよ！　この〜っ！」
クロミ親分がハリセンを大きく振りかぶったのを見たフラットと駆は、マイメロを抱きかかえて逃げ出したのでございました。

結局、詳しい事情は何も分からないまま、帰宅の途についたのでございました。
まったくもう……でございます。
それから三日後、東町奉行所のお白洲で、連続痴漢事件のお裁きが開かれたのでございます。
「柊越前守恵一様のおなーり」
お白洲に役人の声が響き、裃姿の柊様が登場されると、役人たちは勿論、痴漢行為を受けた被害者の若い娘たちやお裁きのために呼び出された参考人たちが一斉に頭を垂れました。参考人たちの中には、『めっ組』のマイメロ、フラット、『夢野屋』の三姉妹、魚売りの駆ら、ゾウさんの日常を知っている者たちの顔もございました。
そんな中で、加害者であるゾウさんだけは、縄に縛られて正座したまま、頭も垂れずに柊様を見ておりました。
そればかりか、柊様に向かってウインクをしたのでございます。
ゾウさんは柊様が東町奉行所の奉行に就任致しました時に、お城でお会いしておりましたので、自分のことを知っていると思ったのでございます。
ところが、柊様は『超』がいくつもつく自分勝手な人物でございまして、自分を奉

行に取り立ててくれたルミ姫様やメロママの局様の顔は覚えておいでしたが、ちゃらんぽらんな将軍の顔など端から覚えるつもりはなく、脳内削除しておられたのでございました。

左様なことでございますから、柊様はゾウさんを一瞥しただけで、

――私に色目を使いおって、無礼な奴め。

ぐらいにしか思わなかったのでございましょう。

「早速、審議に入る」

とおっしゃいまして、柊様はゾウさんをお縄にした経緯をクロミ親分から訊いたのでございます。

クロミ親分が申すには、手下のバクと地回りに出ている時、犯行現場近くで被害者の一人、小間物屋の娘お菊が血相を変えて駆け寄ってきて、たった今後ろから怪しい男に着物の上から胸を触られたと泣きながら訴えて来たとのことでした。

犯行が行われた時、犯人は『パオ～～ン』と一鳴きしてから、

『愛い娘じゃ、わしがモミモミしてやるゾウ』

と、偉そうに申したそうでございます。

「そこで、あたいはピーンと来ましたね！」

クロミ親分は胸を張ると、

「小江戸広しといえど、興奮すると『パオ〜〜ン』なんて鳴くのはゾウ族しかいないし、いつも偉そうにしていて、語尾になんとかだ『ゾウ』なんて言うのも、こいつしかいません！」

ゾウさんを指差したのでございます。

「わ、わしはやってないゾウ！　無実じゃ！　誤認逮捕だゾウ！」

と、ゾウさんが騒ぎ出したので、柊様は家来に命じて、その口を絆創膏で塞いでしまったのでございます。

ゾウさんは怒りを露わにして柊様を睨みつけたのでございますが、後の祭り。柊様は完全に無視されたのでございました。

「クロミ、それでお前はいつ、どこでそのゾウを見つけてお縄にしたのだ？」

柊様に問われ、クロミ親分は少し頬を赤らめたのでございます。クロミ親分が秘かに柊様を慕っているのは衆知の事実でございまして、常日頃からどんな事件でも下手人を自分が捕まえて、お白洲で柊様にお目にかかりたいと願っていたのでございます。

クロミ親分は顔の火照りを感じながらも柊様に向かって懸命に答えたのでございます。

「それが、被害者を家に送り届けに行く途中で、このエロゾウが美人で評判のお夏っていうかわら版売りの娘の後ろを歩いていたんです」

「ほお……それで？」
柊様は興味深く相槌を打ち、身を乗り出してクロミ親分に視線をお向けになります。
クロミ親分は自分の心臓の音が周りに聞こえるのではないかと、ドギマギしながら話を続けたのでございます。
「よ、涎を垂らし、今にも抱きつくんじゃないかと思ったんで、あたいはバクと二人でこいつをふん捕まえたんです」
「成程な……」
脇息に片肘を突いていらした柊様は、扇子で膝をポンと打つと、被害者の娘たちに犯行が行われた時の状況をお訊きになられたのでございます。
娘たちはクロミ親分とまったく同じ証言をしたので、その場にいた大半の者は、ゾウさんはクロだと思ったようでございます。
「では訊くが、娘たちの中で、実際に下手人の顔を見た者はおるのか？」
と、ズバッとお訊きになったところ、娘たちからは、
「日が暮れておりましたゆえ、顔までは……」
「逃げ足が速かったもので、後ろ姿しか……」
と、歯切れの悪い答えが返ってきたのでございます。
「顔を見ていないのでは、そのゾウを下手人とするのには無理があるな」

口を塞がれているゾウさんが大きくうなずきましたが、クロミ親分や被害者たちは納得しかねている様子でございました。
そこで、柊様はゾウさんと懇意にしている『めっ組』のマイメロたちや『夢野屋』のお歌たちから、ゾウさんの日頃の素行をお尋ねになったのでございます。
「そのゾウを庇い、嘘の証言を申すと、そなたたちも仲間と見做して、罰することがあるから、正直に話すのだ」
と、念を押すところも抜かりがございません。
「ゾウさんはよくうちの店に来ますけど、支払いもきっちりしておりますし、冗談を言っては私たちや他のお客さんを笑わせる、とても良いお客様です」
と、まずは『夢野屋』の長女奏が口火を切ると、それに続いて、二女のお歌が、
「たまに下ネタを言うこともありますが、後ろから胸をモミモミなんて破廉恥なことは一度もなかったわよね？」
と申すと、三女のお琴がうなずき、
「お、お店が忙しい時なんか……手伝ってくれたこともあったよね」
と、棒読みのセリフ回しで申し、奏とお歌が大きくうなずきますと、後ろに控えていたフラットと駆が、顔を見合わせて苦笑をしたのでございます。
実は、『夢野屋』の三姉妹は常連客で金払いの良いゾウさんが島流しにされては、お店

の売り上げに影響しますし、根本的には悪い人物ではありませんでしたから、昨日『めっ組』に集まって、マイメロたちとうまく口裏を合わせて何とかゾウさん助けてあげたいと、相談していたのでございました。
ゾウさんは三姉妹の証言を感激して聞いており、何度もうなずいておりました。
続いて証言したフラットや駆も、少しお尻が痒くなりそうなほどゾウさんのことをヨイショして、柊様の心証を良くしようと努めたのでございますが……。
「みんな、正直に話しなさいって、お奉行様に言われたのに、嘘はめっだよ」
と、昨日の密談のことなどすっかり忘れていたマイメロが、全てをぶち壊してしまったのでございます。
「く、組頭……！」
お歌たちが小声でマイメロを諫めようとしたのですが、手遅れでございました。
柊 様の目がギラリと輝きますと、
「マイメロ、夢野屋のお歌たちの証言は嘘だと申すのだな」
と、冷静沈着に問うたのでございます。
「うん。お歌ちゃんたちはしょっちゅうゾウさんにお尻を触られて、ぶっ飛ばしていたわ。奏ちゃんなんか、今度触ったら、代金に上乗せするって言ってたもん」
マイメロが正直に話すものですから、お歌たちはもはや正直に話すしかございません。

――あれほど、打ち合わせをしたのに！
――これほど、マイメロが忘れっぽいなんて！
――マイメロは連れて来なかった方が良かったかも……。
三姉妹は心の中でそう思いつつも、観念してフラット、駆と共に柊様に向かって深々と頭を下げたのでございます。
「申し訳ございません」
柊様は冷ややかな目でお歌たちを見ると、
「私は嘘をつくなと申したはずだ。それをお前たちは……」
「本当に申し訳ありません。確かに嘘をつきましたが、ゾウさんは悪い人ではないです。どうか、寛大なお裁きをお願いいたします」
お歌が涙を浮かべ訴えたのでございますが、柊様は一切無視して、被害者の心情を汲み、日頃の素行の悪さを加味して、ゾウさんを百叩きの刑に処したのでありました。
お白洲にどよめきが起きましたが、柊様が鋭い視線を送ると、再び水を打ったように静寂が訪れたのでございます。
ところが、それもつかの間、ようやく自分の鼻が長く自由に動かせることに気づいたゾウさんが、口の絆創膏を剥がして叫んだのでございました。
「越前守、大概にいたせ！　わしを誰だと心得る！　象川八代将軍、エレ宗であるゾ

ウ！」
と、自ら正体をバラしてしまったのでございます。
普通なら、ははあっと誰もがひれ伏すところでございますが、お白洲からは笑い声が漏れただけで、誰も信じる者はおりませんでした。
ただ、マイメロだけは、
「へえ、ゾウさんってそうだったんだ。マイメロ、びっくり」
と申したのでございます。
「ンなワケねえだろ！」
クロミ親分が睨みつけると、
「や〜〜〜ん」
マイメロはお歌に抱きついたのでございます。
柊様の眉がピクピク動いており、一瞬のうちにお白洲は凍りついたのでございます。
柊様はここで怒りを爆発させては、天下の名奉行の評判を落とすとお考えになったのか、すぐに冷静さを取り戻し、静かなお声でおっしゃったのでございます。
「将軍の名を騙るとは、愚かなゾウである。百叩きの刑を改め、二百叩きの刑に処す。これにて一件落着！」
「な、何じゃと!? こ、こら、越前守！　わしの顔を覚えてないと申すのかあ！」

ゾウさんの悲痛な叫びを無視して、柊様はお白洲を後にしたのでございます。

このお裁きの詳細については、すぐにかわら版の速報が発行され、小江戸の人々も知ることになったのでございます。

当然、お城のルミ姫様やメロママの局様の耳にも届いたのは言うまでございません。

「いくらちゃらんぽらんな上様とは言え、二百叩きの刑に処すとは……！　メロママの局、越前守を城に呼びつけなさい！」

取り寄せたかわら版の特報版を握り締めて、激しく動揺するルミ姫様を見ておられたメロママの局様はまったく表情も変えず、

「ルミ姫様、落ち着くのです。ここであなた様が騒ぎ立ててしまっては、天下の将軍が城を抜け出して、放蕩三昧をしていたことが、世に知られてしまいます」

ルミ姫様は、ご自分の浅はかさにお気づきになったのでございましょう。

「確かに……。そんなことになったら、将軍家の恥を世間に晒しかねませんね」

「さすがルミ姫様。ここは将軍にお灸をすえるとお考えになった方がよろしいかと」

「分かりました。でも、処刑の日は私も城を出ます」

「どういうことですか？」

「将軍の痛みを共に感じたいのです」

ルミ姫様のお優しい気持ちに心を打たれたのか、メロママの局様はうなずき、

「私もお供いたします」

「有難う、メロママの局。やはり持つべきものは腹心の友ですね」

ルミ姫様がメロママの局様の手を握った。

しかし、メロママの局様の本心は違っておりました。ルミ姫様のことだから、必ず処刑を止めると思って、自分がルミ姫様を止めようとお考えになっていたのでございます。

ゾウさんの公開処刑の当日、お店のおかみさんに変装したルミ姫様とメロママの局様は、処刑を見ようと集まった野次馬たちの間から、竹刀で背中を叩かれるゾウさんをご覧になっておられました。

ルミ姫様はゾウさんが叩かれるたびに、目を閉じたり顔を背けたりしておいでででございました。

そして、叩くのが百回を越えたあたりで、叩かれるたびに悲鳴を上げていたゾウさんが気を失い、前のめりに倒れた時でございました。

上半身裸のゾウさんの背中があちこちミミズ腫れになっており、血も滲んでいるのを

ご覧になったルミ姫様は、耐え切れなくなって野次馬を掻き分けて前に出ようとしたのでございます。

メロママの局様がその腕を素早く掴みまして、引き戻したのでございます。

「我慢でございます。これもエレ宗様のためでございます」

と、小声でルミ姫様を諭したのでございます。

ルミ姫様は無言でおうなずきになりましたが、その目から涙がツツーッと零れ落ちたのでございました。

これには、さすがのマイメロの局様も同情なさいまして、これ以上ルミ姫様をお辛い目に遭わせてはいけないと思ったのでございましょう。

「エレ宗様はしぶとい……いえ、我慢強いお方でございますから、必ず耐え抜いて城にお戻りになられます。その時に優しいお言葉をおかけになれば、エレ宗様も必ずや心をお入れ替えになりましょう」

マイメロの局様の言葉に、ルミ姫様は何度もうなずき、その場を離れたのでございました。

処刑が終わり、ようやく釈放されたゾウさんは、『めっ組』の家の前までフラフラしな

がらやってまいりました。途中で拾ったのでございましょう。棒を杖にして突きながら青息吐息の状態で、ゾウさんは戸を開けて入ってきたのですが、力尽きてその場に倒れてしまったのでございます。

「ゾウさん、しっかりしろ！」

待ち構えていたフラットと駆が駆け寄り、ゾウさんを助け起こしました。

「み、水を……」

すると、マイメロが台所の甕から柄杓で水を汲み、ゾウさんに与えたのでございます。

「有難うだゾウ……」

ゾウさんが喉を鳴らして少しずつ水を飲んでいると、マイメロがこう申したのでありま
す。

「ゾウさん、それを飲み終わったら、出て行ってね」

フラットと駆は驚いて、マイメロを見ました。

「組頭、それはあまりにも冷たすぎるぜ」

「そうですよ。いくらなんでも……」

「二人とも、マイメロの気持ちが分からないの。マイメロは心を鬼にして言ってるのよ。このままうちに居候させたら、ゾウさんは今までと同じ遊び人のゾウさんになってしまうわ。ここは、ゾウさんにまっとうなゾウになって貰うチャンスなの」

「マイメロ……」
フラットと駆はそれも一理あると思い、これ以上マイメロを追及することをやめたのでございます。
「組頭の気持ちはよく分かったゾウ……。一人になって考え直すゾウ。世話になったゾウ」
そう言いますと、ゾウさんは家を出ようとしたのでございます。
「ゾウさん、待って」
マイメロが懐に手を入れてながら、ゾウさんに近づいてきました。
ゾウさんはてっきり駕籠代か、昼飯の足しにお金をくれるのだと思い、感謝の目でマイメロを見つめました。
だが、マイメロが懐から出して、ゾウさんに握らせたのは飴玉だったのでございます。
「マ、マイメロ……⁉」
ゾウさんは飴玉を投げ返そうとしたのでございましたが、
「お礼なんかいらないわ。それを舐めてまっとうなゾウになってね。おねがい♥」
マイメロの可愛らしいお願いポーズを見てしまうと、
「有難うだゾウ」
と飴玉を口に放り込んで、家を出て行ったのでございます。

「ゾウさん、達者でな」
「心を入れ替えたら、また遊びに来いよ」
「バイバイ」
三人の声に軽く棒を挙げると、ゾウさんはトボトボと去って行ったのでございました。
結局、ゾウさんは行く所もお金もないため、エレ宗様にお戻りになってお城に帰ることにしたのでございます。
待ち構えていたルミ姫様はお城を留守にしていたことも、体の傷についても何もお訊きにならずに、エレ宗様にご馳走を食べさせたのでございます。
エレ宗様はルミ姫様の優しさをつくづくとお感じになったのか、自ら当分謹慎することを宣言なされたのでございます。
控えていたメロママの局様が何か言おうとするのを、ルミ姫様はお制止になって、
「上様のお言葉を信じようではありませんか」
——甘い！　甘すぎる！
と、メロママの局様は心の中で毒づきましたが、笑顔さえ浮かべてうなずいたのでございます。ですが、目だけは笑っておりませんでした。

エレ宗様は宣言通り謹慎しておりましたが、ルミ姫様と幕府の五人の老中たちがいつものように政について話し合っていた時のことでございます。
末席の老中、ドリアンがルミ姫様に尋ねたのでございます。
「最近、上様のお顔を拝見しておりませんが、お体が悪いのでございましょうか？」
ルミ姫様は内心ドキリとなさいましたが、すぐに微笑みながら、
「そのようなことはありませんよ。すこぶる元気です」
「そうでございましたか。それはようございました。しかし、将軍不在のまま幕府の政を進めるのはどうでございましょう」
「どういうことだ、ドリアン殿？」
ルミ姫様の顔色が変わったのを見た老中筆頭の水野ライオン丸様がお尋ねになったのでございます。
「恐れながら、この際でございますから、エレ宗様にはご隠居していただき、象州藩の当主で、エレ宗様の弟君であられるエレ春様を九代将軍の座に……」
その瞬間、ルミ姫様が烈火のごとくお怒りになり、
「ドリアン、上様に対して失礼千万！　ことによってはお主の首が飛びますよ！」

あまりの剣幕に、気の小さいドリアンは部屋の隅まで正座のまま後退りをして、深々と頭を下げました。

「も、申し訳ございません。ドリアン、出過ぎたことを申してしまいました。どうかお許しを」

ルミ姫様がまだ怒りが収まらないのを見て取った水野様は、

「ルミ姫様、ドリアン殿は私がきつく叱っておきますゆえ、今日のところはこの辺で」

ルミ姫様は少し冷静におなりになったのか、

「水野殿、後はお任せしましょう」

とおっしゃって退室されたのでございます。

ルミ姫様は大奥にお戻りになってからも怒りが収まらず、自室にメロママの局様をお呼びになって、ドリアンの暴言の一件を話されたのでございます。

「成程……ルミ姫様のお怒りは察しいたしますが、この件に関しましては私も少し調べてみたいと思います。お任せ下さいませ」

メロママの局様の提案に、ルミ姫様も理解を示されまして、

「分かりました。頼みましたよ」

メロママの局様は一礼しますと、すぐに自室に戻り、庭に向かって指笛をお吹きになりました。

　すると、庭側の障子の向こうで、
「わっぱめー」
　という声がすぐに聞こえて来たのでございます。
　メロママの局様が障子を開けると、桃色装束に桃色覆面の忍者が片膝を突いて頭を下げておりました。お庭番の服部ピアノでございます。
「ピアノちゃん、末席老中のドリアンに不穏の動きがあります。これよりドリアンの様子を見張るのです」
「わっぱめー」
　ピアノは一礼すると、スッと姿を消したのでございました。

　その日の夕刻、ドリアンはお城を出ると、自分の屋敷には戻らずに、駕籠を屋敷とは反対方向へ進めたのでございます。ピアノが誰にも気づかれぬように慎重に駕籠の後を尾行しているとも知らずに。
　ドリアンの駕籠は、象州藩の当主、象川エレ春様の上屋敷の門前で止まったのでございます。
　派手な金糸の頭巾を被ったドリアンは駕籠から降りると、周囲に誰もいないのを確認

して門を拳で叩きました。すぐに門が開き、ドリアンは屋敷内に入って行ったのでございます。

藩士の一人がドリアンを奥座敷に連れて行くと、エレ春様はすでに待っておられました、中に入るように促されました。

「よう来たのう、ドリアン。ご苦労であったゾウ。さあ、近う寄れ」

「恐れ入ります」

ドリアンはエレ春様の前に進み出て、正座をすると、深々と頭を下げました。

「エレ春様におかれましては……」

「挨拶は良い。兄上の様子はどうじゃ？　二百叩きの刑を甘んじて受けたそうだな？」

「はい。もう少し重い刑になると思ったのでございますが……」

「越前守もここのところ、大きな事件がないものだから、裁きにキレがなくなってしまったのだゾウ」

「まったく同感でございます。かくなる上は次の手を……」

言いかけた時、ドリアンが天井を睨んだのでございます。

怪訝に思ったエレ春様が何かおっしゃろうとするのを、ドリアンは制して、床の間に飾ってある槍を掴むと、忍び足で部屋の中央に移動して、いきなり天井を突いたのでございます。

「めー……」
という小さな声が聞こえてくると、槍の刃を伝わって血が伝ってきました。
「曲者か？」
エレ春様がお尋ねになりますと、ドリアンは狡猾な笑みを浮かべて、
「いやいや、ネズミでございましょう」
「しかし、チューではなくメーと鳴いたような……」
「近頃の小江戸のネズミはメーと鳴くのでございますよ。はっはっはっ」
と、ドリアンは高笑いをしたのでございます。
天井裏から気配が消えたことに満足したのか、ドリアンはエレ春様の耳元に何やら囁きました。
途端に、エレ春様にも狡猾な笑みが浮かびまして、
「これで、そちも筆頭の老中だな」
「上様も九代将軍でございますよ」
「ドリアン、そちも悪よのう」
「いえいえ、エレ春様には負けまする」
二人は定番のセリフを言い合うと、声を上げて笑ったのでございました。

城に戻ったピアノはメロママの局様に、腕の怪我の手当てをして貰っておりました。

「これで、傷は治るであろう」

「わっぱめー……」

ピアノは恐縮して、頭を下げたのですが、メロママの局様は優しくピアノの肩に手を置き、

「気にすることはない。ピアノちゃんのお蔭でドリアンの後ろで糸を引いている人物が分かっただけでも上出来だわ。ピアノちゃん、引き続き二人の動きを調べて頂戴」

ピアノは真剣な表情でうなずいたのでございました。

しかし、敵もさる者でございます。

お庭番が動き出したのを知ったドリアンは、翌日には次の手を打ってきたのでございます。

謹慎中のエレ宗様のお部屋を、ご機嫌伺いだといって訪ねてきたのでございます。

エレ宗様は、二百叩きの刑の傷もすでにお治りになっておられました。

「上様、近頃は老中の会議にもお越しいただけず、お体でもお悪いのかと心配しており

ましたが、元気なご様子でドリアン安心いたしました」

「そうか、それはすまんのう。わしはこの通り、ピンピンだゾウ」

「上様、それほどピンピンなら、たまには政の場にもお顔を出していただきたく存じますが」

「そっちの方はそちら老中に任せておる。ルミちゃんやメロママの局もおるしのう。それに今わしは謹慎の身じゃからのう」

「謹慎でございますか。そのような話は聞いておりませんが」

「少しばかりルミちゃんに迷惑をかけてしまってのう。自分から謹慎しておるのじゃ」

「成程。しかし、ピンピンであられるのに、謹慎はちと辛うございましょうに」

「そうなんじゃや。退屈で退屈でおかしくなりそうだゾウ」

ドリアンはニヤリとすると、持参した風呂敷包みをエレ宗様の前に置いたのでございます

「それなら、ちょうど良いものがございます」

風呂敷包みを解くと、インスタントカメラでございました。

「何じゃや、それは？」

「南蛮渡来のインスタントカメラと申すもので……」

ドリアンはカメラを取り、レンズをエレ宗様に向けますと、

「な、何をするつもりじゃ？」
「上様、心配ございません。まあ、見ていて下さいませ」
ドリアンがシャッターを押しますと、フラッシュがピカッと輝いたのでございます。
「わっ！」
あまりの眩しさに、エレ宗様は両手で顔をお覆いになりました。
「無礼ではないか！」
「カメラについておりますフラッシュというものが光っただけでございます」
その時、カメラから印画紙がジーッという音と共に出てまいります。ドリアンはそれを取ると、軽く振ったり、息を吹きかけたりしたのでございます。
ようやく視界が元にお戻りになったエレ宗様は、興味津々におなりになり、自らドリアンの横に移動なさると、印画紙を覗き込んだのでございます。
すると、印画紙にはフラッシュに驚くエレ宗様のお姿が現れたのでございます。
「おおっ！　わしではないか⁉」
「これは、カメラのレンズを向けたものを写し取る便利な道具でございます」
「すごいゾウ！　ドリアン、わしに譲ってくれないかのう？」
「譲るも何も、上様に差し上げたく持参したのでございます」
「おおっ、そうか！　ドリアン、そちは良い奴じゃのう。もし、筆頭老中の水野が引退

した暁には、そちを……」
と言いかけて、エレ宗様は暫しお考えになられたのでございます。
ドリアンは水野様の後釜として老中の筆頭の座に格上げしてくれるものと、心ときめかせて待っておりましたが、待ちきれず、
「引退した暁には……？」
と、次の言葉を催促したのでございます。
すると、エレ宗様は、
「そちを四番目の老中にしてやるゾウ」
「よ、四番目!?」
——それでは一つくり上がっただけではないか！　このアホ上様が！
と、ドリアンは心の中で激怒したのでございますが、グッと堪えて、
「有難き幸せ」
大人の対応をしたのでございます。
それから、ドリアンはエレ宗様に写真の撮り方をお教えし、印画紙を十枚ほど渡したのでございます。
「うっほほーい！　ルミちゃんを写してくるゾウ」
エレ宗様は大はしゃぎで部屋を飛び出して行ったのでございました。

それから、半刻が過ぎた頃、城内の自室に戻っておりましたドリアンのもとに、エレ宗様が自ら出向いてまいられました。
「ドリアン、見てくれ」
エレ宗様は自らお撮りになった写真をドリアンの前に並べたのでございます。ほとんどがルミ姫様の写真でございました。
「ほお！　どれも良く撮れておりますな。さすが、上様」
ドリアンのヨイショにエレ宗様は大いに満足なされました。
「むむ。これは誰でございますか？」
ドリアンはルミ姫様以外の一枚を手に取り、エレ宗様に尋ねたのでございます。
写真は両手で顔を覆い、顔を背けている女性でございました。
「メロママの局じゃ。魂を抜かれるなどと申してな。そんなことはないのにのう。ほっほっほっ」
エレ宗様がお笑いになりましたが、すぐにいつもの上から目線の表情に変わりまして、
「ドリアン、わし、もっと写真が撮りたいんじゃがのう。印画紙とやらをくれんかのう」
ドリアンはニヤリと笑うと、小箪笥の引き出しから印画紙の束を出してきて、エレ宗様

に差し上げたのでございます。
「ドリアン！　そちは本当に良い奴じゃのう。水野が引退した暁には……」
ドリアンはもう期待などしませんでした。
――どうせ三番目の老中がいいところだろう。
そう思った時、
「四番目の老中の座に就かせるゾウ！」
ドリアンが派手にずっこけたのは言うまでもございません。
――くぅ〜〜、同じかい！　絶対失脚させてやる！
ドリアンは心の中で苦々しく毒づいたのでございます。
「よーし、もっと写真を撮ってくるゾウ！」
エレ宗様が立ち上がろうとすると、気を取り直したドリアンが、
「上様、城の中で写真をお撮りになっても、さして面白い写真は撮れないのではございませんか。ここは、小江戸の町に繰り出して、若いピチピチの娘のあんな写真やこんな写真をお撮りなられては」
「何っ⁉　あんな写真やこんな写真じゃと！　パオーン！　それ、良いのう！」
エレ宗様は大いに興奮なされましたが、一体どんな写真をお撮りになりたいのでございましょう……ふう。

ところが、エレ宗様はすぐに大きなため息をおつきになられて、

「いや、わしは謹慎の身じゃ。城の外には出ないと決めたのじゃ。まあ、出たところで、一文無しではどうにも……」

と言い終わらぬうち、スッと目の前に、ズシリと重そうな財布が現れたのでございます。

「こ、これは⁉」

驚くエレ宗様の手を取り、ドリアンはその財布を握らせて、

「私のポケットマネーでございます。どうぞご自由にお使い下さいませ」

と申しますと、エレ宗様はドリアンを抱き締めて、

「そちは本当に良い奴じゃのう。水野が引退……」

「それはもう結構でございます」

「そ、そうか……。では、久しぶりに小江戸の町に繰り出してくるゾウ」

と部屋を出ようとすると、背後からドリアンの声がしてまいります。

「上様、ルミ姫様へのプレゼントにかんざしなどをお買いになられれば、万が一お城を抜け出したことがバレてもお咎めなしでございましょう」

「成程！」

エレ宗様は戻られてきて、ドリアンの耳元に囁いたのでございます。

「そちも悪よのう」
「いえいえ、上様ほどではございません」
そう言い合うと、お二人は笑ったのでございました。

城を抜け出したエレ宗様は、まず玩具屋に行きまして、ウサミミ頭巾のフィギュアをお買いになったのでございます。
ウサミミ頭巾というのは、小江戸にまだ悪人が蔓延している頃に、『めっ組』組頭のマイメロとのコンビで大活躍したヒーローでございました。
岡っ引きのクロミ親分がいつも二人に手柄を持っていかれ、マイメロ憎しが倍増したのもその頃でございました。
悪人が一掃されて、小江戸の町が平和になってからは、とんとウサミミ頭巾が現れることはありませんでしたが、庶民の間では未だに人気が衰えておりませんでした。
ウサミミ頭巾のフィギュアをお土産に、再び遊び人のゾウさんになったエレ宗様は『めっ組』の戸を叩いたのでございます。
首にインスタントカメラをぶらさげたゾウさんを見た途端、マイメロも、居合わせた若頭のフラットや魚売りの駆も迷惑そうな表情になりました。

ところが、ゾウさんがウサミミ頭巾のフィギュアをマイメロにプレゼントしますと、
「ゾウさん、ありがとう。マイメロ、嬉しい。さあさあ、上がって頂戴」
マイメロはお茶まで淹れて歓待したのでございます。
ゾウさんはマイメロから居候の許しも貰い、調子に乗ったのかインスタントカメラの自慢を始めたのでございます。
フラットと駆はすぐに食いついてきたのですが、マイメロは、
「『カメラで写真を撮られると、魂を抜き取られるわ』って、ママが言っていたわ」
と言ったのでございます。実は、メロママの局様はマイメロの母上であったのでございます。
「ええーーっ！」
マイメロの言葉に、カメラを構えるゾウさんの前でポーズを取っていたフラットと駆が青褪めて逃げ出したのでございます。
「そんなことはないんじゃがのう……」
ゾウさんはやむなく『めっ組』を出ますと、茶店『夢野屋』に行って、美人三姉妹の写真を撮ろうとしたのでございますが、
「とかなんとか言っちゃって、嫌らしい写真を撮ろうとしてるんでしょう！」
「ええーーっ、そうなの⁉」

「このエロゾウが！」
過剰反応したお歌たちに蹴り飛ばされたのでございました。
カメラ自慢を諦めたゾウさんが、ルミ姫様のためにかんざしを買い求めていた時のことでございます。
通りを大勢の人たちが騒ぎながら一方へ駆けていくのを目撃したのでございます。
ゾウさんはその一人を呼び止めて、
「何か事件でも起こったのかのう？」
と尋ねると、若い娘が頭巾の男に寺の社に連れ込まれて、嫌らしい写真を撮られたらしいということでございました。
「何〜〜っ⁉　なんと羨ま……いやいや、破廉恥な」
ゾウさんはみんなの後に続き、駆け出したのでございます。
ゾウさんが寺の境内に集まっている野次馬たちの後ろに来て、人垣を掻き分けて前に進みますと、お堂の前で髪が乱れ、肌襦袢姿の若い娘が、クロミ親分と子分のバクから事件のあらましを聞かれておりました。
「娘さん、一体どんな写真を撮られたゾナ？」

バクが尋ねますと、若い娘は恥ずかしそうに手に持っていた写真を差し出して、

「これでございます」

バクは写真を見た途端、

「ゾナ～～ッ！」

と叫ぶと、大量の鼻血を吹き出してのけ反りました。

「鼻血なんか出すんじゃないよ！　みっともない！」

クロミ親分にハリセンで頭を張り飛ばされたのでございますが、

「ゾナ……クロミ親分のお蔭で鼻血が止まったゾナ」

「くだらないこと言ってんじゃないよ。それより」

クロミ親分は若い娘を見て、

「どうやってこの写真を取り戻したんだい？」

と尋ねたのでございます。

「頭巾を被った男が印画紙とかいうものをカメラにセットしたので、思い切り股間を蹴り上げて、男が痛がっている隙に、写真を奪って逃げ出したのでございます」

若い娘が答えると、バクは自分が股間を蹴られたかのように顔を歪めたのでございます。

「で、あたいたちが寺のお堂を調べた時は、すでに犯人は逃げた後だったたってわけだ

ね？」
「はい」
「あたいはカメラのこと詳しくないいんだけど、そのインなんとかカメラってどんなカメラなんだい？」
「う〜〜ん、どう説明していいか……」
若い娘がふと野次馬たちの前にいるゾウさんを見た時のことでございます。
「ああっ、あのカメラです！」
ゾウさんが首からぶら下げているインスタントカメラを指差したものですから、野次馬たちはざわつき、ゾウさんを残してサッと左右に散ったのでございます。
「ゾナ！　またあいつゾナ！」
「あのエロゾウが！　バク、捕まえるよ！」
「はいゾナ！」
クロミ親分が背中に跨ると、バクは猛スピードで飛び立ち、唖然として立ち尽くしているゾウさんに体当たりしたのでございます。
「ぎゃひ〜〜ん！」
哀れゾウさんは目を回し倒れたところを、クロミ親分とバクにお縄にされたのでございます。

クロミ親分は、証拠品のインスタントカメラを丁寧に手拭いに包みバクに渡すと、若い娘を呼び、ゾウさんの顔を見せて尋ねました。

「犯人はこのエロゾウだね？」

「頭巾をしていて目元しか見えませんでしたが、確かに頭巾からこの男のような長い鼻が出ていました！」

若い娘の言葉に、

「よっしゃあああ！　犯人はこのクロミが捕まえたよ！」

クロミ親分は高らかに宣言したのでございます。

野次馬たちから拍手と歓声が上がる中、編み笠を被った侍がその場を離れたのですが、気づく者は誰もおりませんでした。

侍が編み笠を少し上げますと、ほくそ笑むドリアンでございました。

ドリアンは編み笠を元に戻すと、歩みも軽やかに去って行ったのでございました。

遊び人のゾウさん逮捕の報は、かわら版の速報によって大奥のルミ姫様の元にも届けられたのでございます。

ルミ姫様は、まさかまたエレ宗様が捕まったのではないかと思ったのでございますが、

「いえいえ、上様は謹慎しておられるので別のゾウの仕業でしょう」と、ご自分に言い聞かせて、エレ宗様の部屋を訪ねたのですが、もぬけの空で愕然とおなりになった時でございました。
メロママの局様が部屋に駆け込んできたのでございます。
「ルミ姫様、これを」
メロママの局様は矢と文を持っておりまして、文の方をルミ姫様にお渡しになりました。
「たった今、老中のドリアンの様子を探っていたピアノちゃんが、矢文で知らせてきたものです」
文を読み終えたルミ姫様の肩が、小刻みに震えております。
「上様をまたお縄にさせたのは、上様を失脚させようとする一味の仕業に間違いございません」
「分かりました。メロママの局、とにかく上様に会って詳しい話を聞きましょう」
「畏まりました」
二人はすぐに先日二百叩きの刑を見に行った時の姿に変装して、城を抜け出したのでございました。

二人は番所へ行き、クロミ親分にゾウさんと面会させてくれるように頼んだのでございますが、

「それは出来ないね。とっとと帰りな」

クロミ親分は聞く耳を持ちませんでした。だが、メロママの局様が素早く小判を渡しますと、クロミ親分はコロッと態度を変えまして、

「悪いね。ちょっとの間なら話してもいいよ」

と、許可したのでございます。どの時代でも『袖の下』は通用するようでございます。

「バク、二人を牢屋まで案内してやりな。それが終わったら、この金でたこ焼きを買って来い！」

「はいゾナ！」

こうして、バクに案内されて牢屋の前まで行くことに成功した二人は、ゾウさん、いやエレ宗様から事件の全容を聞き出したのでございます。

「神様や仏様に誓って、わしはエロい写真なんか断じて撮ってないゾウ。事件があった時、わしはルミちゃんにプレゼントしようとかんざしを選んでおったんじゃ。それがこのかんざしだゾウ」

エレ宗様は懐から高級そうな珊瑚のかんざしを出して、ルミ姫様に牢屋の格子の間か

ら渡したのでございます。
「まあ、私のために！」
お二人は格子越しに手を伸ばしてひしと抱き合うと、唇を重ねようとしたのでございますが、なかなかうまく出来ませんでした。
「ちょっとお二人ともいちゃついている場合ではございません。上様が無実だという確固たる証拠を見つけ出さなければなりませんから」
「そ、そうでしたね。上様、必ず牢屋からお出ししますから、待っていて下さいね」
「ルミちゃん、メロママの局、頼んだゾウ」
二人はうなずき、牢屋を離れたのでございます。
二人がクロミ親分たちがいる部屋に戻りますと、親分とバクは山盛りのたこ焼きを食べておりました。
「あれ？　もういいのかい？」
「はい。クロミの親分さん、くれぐれも上様に手荒いマネをしてはなりませんよ」
ルミ姫様はそうおっしゃると、メロママの局様と共に番所を後にしたのでございます。
「上様？　誰のことだい？」
「ゾナ〜？」
二人はポカンとして見送りましたが、すぐにまたたこ焼きを頬張ったのでございまし

た。

その頃、象州藩の上屋敷では、ドリアンがエレ春様を見舞いにきておりました。

エレ春様は例の写真を撮った際に、被害者の若い娘に股間を蹴られたために、着物越しにも腫れ上がっているのが分かるほどでございました。

「まさか、あの娘に蹴られるとは。タマタマが潰れるんじゃないかと思ったゾウ」

エレ春様がおっしゃると、ドリアンが天井裏を気にしつつ狡猾な笑みを浮かべて、

「でも、そのお蔭で見事上様を犯人に仕立て上げることが出来たではありませんか」

と申したのでございます。

「人の痛みもしらんくせに」

エレ春様は不機嫌そうにおっしゃったのでございましたが、ドリアンはスルーして、

「でも、柊越前守もこれで上様、いや遊び人のゾウさんを重い罰にするのは必然」

「うーむ、島流しか……」

「いや、下手をすると、獄門打ち首かもしれませぬ。そうなれば、エレ春様が九代目将軍に」

「そちも幕府の筆頭老中ではないか。本当にそちも悪よのう」

「いえいえ、次期将軍様には及びませぬ。ほっほっほっ」
エレ春様も笑いかけたのでございましたが、
「いたたた……」
股間をお押さえになられて、
「こらっ、笑わせるでない」
「申し訳ございません」
と言いながらドリアンがまた笑った時、天井裏でなく床下で影が走ったのでございました。
言わずともお分かりだと思いますが、その影はお庭番の服部ピアノでございます。同じ過ちは二度と犯さない見事な仕事ぶりでございました。
そうとは知らず、ドリアンはエレ春様に、
「ところで、エレ春様、インスタントカメラをお渡しいただけますか。私が処分いたしますゆえ」
と申したところ、エレ春様はあっさりと、
「ない」
「はあ？」
「股間が痛くてのう、逃げる際に捨ててきたゾウ」

「な、何ですと⁉」
ドリアンが大声を上げましたが、エレ春様はまったく意に介さず、
「まさか、インスタントカメラが二台あるとは、誰も気づくまい。明日取りに行けばよいではないか」
「は、はあ……」
一抹の不安もありましたが、エレ春様が酒を勧めるものですから、ドリアンはそれ以上文句を言えなくなってしまったのでございます。

同じ頃、『めっ組』では、マイメロ、フラット、『夢野屋』の美人三姉妹、お歌の友人のお美紀とお真菜が集まっていて、ゾウさんがお縄になった事件を伝えるかわら版を見ながら話しておりました。
「ほんと良かったわ。被害者が私じゃなくて」
お美紀が言いますと、お真菜も続けて、
「うちも撮られそうになってんねんけど、どついて追い返して良かったわ」
「へえ、お真菜ちゃんもそうだったんだ」
お歌が言うと、妹のお琴も、

「ほんと、奏ねえが注意してくれて良かったよ」
「私はマイメロから魂が抜ける話を聞いていたから、そのまま言っただけよ」
奏がそう言うと、駆が少し残念そうな顔になり、
「しっかし、あのゾウさんがこんな大それた事件を起こすとはなあ……」
すると、マイメロが少し偉そうに胸を張りまして、
「マイメロは初めからゾウさんが怪しいと思ってたのよねえ」
と言った時、入口の戸がガラッと開き、メロママの局様とルミ姫様が入って来られたのでございます。
「あっ、ママ、どうしたの？」
メロママの局様はマイメロたちに事件の一部始終を話されて、ゾウさんの無実を晴らすために、事件現場で証拠品を一緒に探してくれるように頼みに来たのでございます。
「やっぱりゾウさんは犯人じゃなかったのね。マイメロ、初めからそう思ったわ」
ついさっきの発言などすっかり忘れて、マイメロが天然ぶりを発揮したのですが、全員がスルーしたのは申すまでもございませんでした。
全員で事件現場に急行しまして、手分けをして証拠品探しを始めると、すぐにお堂の

裏でマイメロの声が聞こえてまいりました。
「マイメロ、見つけちゃった」
みんながお堂の裏に行きますと、マイメロがエレ春様が落とされたインスタントカメラを持って、得意満面な表情をしておりました。
「マ、マイメロ……！　証拠品には直に触れないように言ったのに」
メロママの局様の言葉に、
「ありゃま。ごめんなさーい」
マイメロはしょんぼりとうなだれてしまいました。
その時でございました。
お庭番のピアノが駆け寄ってきて、エレ春様の屋敷で盗聴した話を、メロママの局様に報告したのでございます。
「まさか、上様の弟が犯人だったなんて！」
「上様が可哀そうだよ！」
駆とお歌が悔しそうに申します。
「こうなったら、象州藩の上屋敷に乗り込んで、エレ春様とドリアンを捕まえて白状させるしかなさそうね」
メロママの局様がおっしゃると、みんなが大きくうなずいたのは申し上げるまでもご

さいませんでした。

ルミ姫様とメロママの局様がおかみさんの変装をやめ、いつもの衣装に着替えて、ママイメロたちと共に象州藩の上屋敷に行きますと、エレ春様とドリアンは大いに驚き、なかなかお会いになろうといたしませんでした。

しかし、義姉のルミ姫様を長い間待たせるわけにはいかず、エレ春様はドリアンを伴って渋々一同が待つ大広間においでになったのでございます。

エレ春様は股間が腫れ上がっているため、歩き方がぎこちないのは誰の目にも明らかでございます。

「これはこれは、ルミ姫様、わざわざ当屋敷にお越しになられたのは何用でございますか？」

「エレ春殿、しらばっくれるのも大概になさい！　ドリアンと結託して、上様を犯罪者に仕立てあげて、失脚させようとした罪は大きいですよ」

ルミ姫様の厳しい追及に及び腰になられたエレ春様は、助け舟を出すようにドリアンに目配せをなさいました。

ドリアンはうなずくと、少し酔って赤くなった顔でルミ姫様を見て、

「何を根拠にそのような戯言をおっしゃっているのか、私にはさっぱり分かりませぬが」
と申しますと、メロママの局様がルミ姫様に代わって口を開いたのでございます。
「もし上様が失脚した暁には、筆頭の老中に就任するらしいじゃないの」
ドリアンは一瞬ギョッとなりましたが、悟られないように笑い出し、
「ほっほっほっ、滅相もございません。私のような末席の老中が、そのような大それたマネは……」
「あくまでもシラを切るつもりね。では、なぜ上様を唆し、お金まで渡したのかしら？」
「な、何のことやら」
と、ドリアンはとぼけたのですが、
「じゃあ、これは誰の財布かしら？」
ルミ姫様は番所でエレ宗様に会った際に貰ってきたドリアンの財布を、彼の前へ投げて寄こしたのでございます。
ドリアンは脂汗をダラダラ流しながらも、
「お、落としたと思っておりましたが、拾っていただいたようで、お礼を申し上げます」
開き直って申したのでございます。
「よくもいけしゃーしゃーと嘘をつくのですね」
ルミ姫様が冷たく言い放った時、エレ春様がしびれを切らしたのか、

「ルミ姫様、いくら兄上のご正室だからといって、これ以上私たちを愚弄するのであれば、追い出しますよ」
「エレ春殿、段々本音が出てきましたね。では、その腫れ上がった股間の膨らみはどうしたのかしら？」
今度は、エレ春様の顔に脂汗が浮かび上がったのでございます。
「ルミ姫様、それは言えるわけがありませんよ。お寺のお堂の中で、上様になりすまして、若い娘の嫌らしい写真を撮った際に、股間を思い切り蹴られたなんて」
メロママの局様が追い打ちをかけるように言い放つと、遂にエレ春様とドリアンが挑発に乗って怒り出したのでございます。
「黙って聞いていれば、図に乗りおって！」
「曲者じゃ、出合え！　出合え！」
その瞬間、広間の襖という襖が一斉に開くと、刀や槍を構えたエレ春様の家来たちが雪崩れ込んできて、一同を取り囲んだのでございます。ドリアンたちはルミ姫様一行を待たせる間に、配置させていたのでございます。
「や〜〜〜ん」
マイメロが震えながらメロママの局様にしがみついたのですが、
「マイメロ、怖がることはないわ。ここはくるくるシャッフルよ」

「あっ、そうだったわ」
マイメロは自分の頭巾からメロディ・タクトを取り出すと、回しながら、
「メロディマーク！　くるくるシャッフル！」
と高らかに言うと、メロディ・コンパクトが出現し、カードが円を描きながら回り出す。回転が止まると、一枚のカードがクルリと飛び出してきたのでございます。
カードにはウサミミ頭巾の絵が描かれておりました。
その時でございます。
庭の方から、「そいや！　そいや！」という男衆の掛け声が響いてきたのでございます。
敵味方全員が庭を見ますと、男衆が担ぐ輿に乗って男がやってきたのでございます。
カードの絵の通りの、ピンクの頭巾、ピンクの裃というちょっと恥ずかしい恰好をしたウサミミ頭巾でございます。頭巾からは長いウサギの耳が飛び出しております。
ウサミミ頭巾は輿から降りますと、まったくやる気のない態度で、棒読みの口上を述べ始めます。
「聞こえる聞こえる、愛に悩む人々の叫びが。悪に苦しむ人々の嘆きが。だってウサギの耳は長いんだもん。愛と正義の使者、ウサミミ頭巾、参上」
おざなりのポーズも決めると、男衆の中から羊の着ぐるみを身にまとい、ピンクの頭

巾を被った初老の男が出て参りました。ウサミミ頭巾の世話係のセバスチャンの介様でございます。
「ヒツジ頭巾もよろしく」
と申しますと、マイメロを見て、
「マイメロ様、久しぶりでございます」
丁寧に頭を下げると、ウサミミ頭巾の後ろに控えたのでございます。
「ウサミミ頭巾さん、悪い人たちに取り囲まれて困っているの。やっつけてね。おねがい♥」
可愛いポーズを取りますと、ウサミミ頭巾は面倒臭そうにうなずき、人差し指をクイと曲げて、かかってこいとエレ春様の家来たちを挑発したのでございます。
家来たちは怒り出して、マイメロたちをほったらかしにして、ウサミミ頭巾に襲いかかったのでございます。
ウサミミ頭巾は、目を隠しているマスクを素早く外し、
「色男ビーム！」
叫び声を上げると、顔から凄まじい勢いで光線が発射されたのでございます。
光線を浴びた家来たちは次々と気を失い倒れたため、形勢不利と見たエレ春様とドリアンは逃げ出したのでございますが、ウサミミ頭巾は素早く駆け寄りジャンプしますと、

「ウサミミキック！」
と叫び、強烈なキックを浴びせたのでございます。
「ぎゃひ〜〜〜ん！」
二人は吹っ飛んで、襖を次々と破って一番奥の部屋の壁に激突して気を失ったのでございました。
数日後、東町奉行所のお白洲において、将軍を失脚させようとした罪で逮捕された、象州藩の藩主、象川エレ春様と末席老中のドリアンのお裁きが開かれたのでございます。
ちなみに江戸時代の町奉行は藩主を裁くことができませんが、これは「小江戸時代」のお話ですので、念のため。
柊　越前野守恵一様が二人の罪状を読み上げまして、
「これに相違ないか？」
と尋ねたところ、縄で縛られて座っておりましたエレ春様とドリアンは開き直って、
「我ら二人を陥れようとする者の仕業であろう」
「身に覚えがございませんな」

完全否認をしたのでございます。
　これには、証人として二人の背後に来ておりましたマイメロたちやルミ姫様、メロママの局様、そして釈放されてお忍びでいらしていたエレ宗様たちの間からどよめきが起こりました。
「静かに」
　柊様が注意をなさいまして、改めて二人を見直し、
「二人ともまだシラをきるつもりか！」
と、ドスの利いた声で質すと、二人は視線を泳がしながらも、
「何のことやら」
「記憶にございません」
と嘯くではありませんか。そこで、柊様は証人のマイメロを見て、目配せをしたのでございます。
「はいはーい」
　マイメロはメロディ・タクトを出して、くるくるシャッフルでウサミミ頭巾を呼び出します。すると、柊様の姿が一瞬消え、すぐにウサミミ頭巾が現れたのでございます。
「やいやい、この頭巾に見覚えないと申すか！」
　その姿に、エレ春様とドリアンは腰が浮くほど驚きまして、

「き、貴様は……⁉」
「越前守がウサミミ頭巾⁉」
もっと驚いた者がもう一人いらっしゃいました。エレ宗様でございます。
「ぷぷぷ……まさか、越前守がウサミミ頭巾だったとはのう……ぷぷぷ」
懸命に笑いを堪えておいでです。
ウサミミ頭巾はムッとしましたが、こちらもグッと堪えておられました。
エレ春様とドリアンは遂に観念いたしまして、
「罪状に間違いはない」
「申し訳ございません」
とウサミミ頭巾に向かって、深々と頭を下げたのでございました。
ウサミミ頭巾は、マイメロに元の奉行姿に戻して貰うと、
「二人には七丈島への島流しを申しつける！ これにて一件落着！」
裁きを言い渡したのでございました。
後日、小江戸城の謁見の間に、事件解決にあたって功績が認められたマイメロと柊越前守恵一様がおいでになっておりました。

「上様、姫様のおなーりー」
という声が響くと、エレ宗様とルミ姫様が上座に出てきて、お座りになられました。
二人の横にはメロママの局様も控えておいででございました。
マイメロは柊様に促されて、深々と頭を下げました。
「苦しゅうない。顔を上げなさい」
ルミ姫様が笑顔でおっしゃると、二人は顔を上げました。
「ぷぷぷ……色男で名高い越前守があんな恥ずかしい姿になっておったとは……ぷぷぷ」
エレ宗様のお言葉に、柊様は露骨に嫌な顔をして、そっぽを向いたのでございます。
「上様、今日はそのようなことを言うために、二人を呼んだのではありませんよ」
すぐに、ルミ姫様がお諫めになられます。
「分かっておるゾウ。二人とも、わしの無罪を晴らしてくれて、礼を言うゾウ」
マイメロはニッコリ微笑みましたが、柊様は依然として固い表情のままでございました。
「よって、二人には褒美を遣わそうと思うゾウ。越前守」
「ははあ」
「ドリアンが島流しになって、末席の老中の座が空いてしまったのじゃ。どうじゃ、老

中になってみんかのう？」
「…………」
柊様はお答えになりません。
「どうした、越前守？　老中になれば、毎日のようにわしに会えるから、顔も覚えられるゾウ」
エレ宗様が皮肉たっぷりにおっしゃった途端に、柊様は、
「ご辞退いたします。今のまま東町奉行所の奉行として働きたいと存じます」
頭を下げられたのでございます。
「なーんじゃ、欲のない奴じゃのう」
と、エレ宗様が詰まらなそうな表情を浮かべるのを見て、
「上様、越前守殿に東町奉行所を辞められたら、小江戸の町にまた悪人が増えてしまいます。ここは越前守殿には奉行を続けて貰いましょう」
ルミ姫様がおっしゃると、柊様はホッとした表情を浮かべて、もう一度頭を下げたのでございます。
「まあ、ルミちゃんがそう言うんなら、仕方がないのう。では、褒美として他に欲しいものはないのか、越前守？」
「では、一つだけ要望がございます」

と、柊様は顔をお上げになりました。
「何じゃ？　何なりと言うてみい」
「はい。マイメロからメロディ・タクトを取り上げていただきたく……」
柊様が言い終わらぬうちに、メロママの局様がビシッと言い放たれました。
「それは絶対ダメ！」
あまりの迫力に、柊様も、エレ宗様、ルミ姫様も凍りついてしまいました。
「……ならば、私は何も褒美はいりません」
柊様は再び頭を下げられたのでございます。
「まあ、いらぬと申すなら、それも良かろう」
エレ宗様は扇子で頭を掻くと、視線をマイメロにお向けになり、
「マイメロにも褒美を遣わすゾウ。欲しいものがあれば何でも遣わすゾウ」
「マイメロ……ウサミミ頭巾さんの実物大のフィギュアが欲しい」
一瞬、エレ宗様も唖然としましたが、
「分かった。近いうちに『めっ組』の家に届けさせるから、楽しみに待っておれ」
「はーい。マイメロ、しあわせ♥」
無邪気なマイメロの笑顔に、柊様以外は笑顔になったのでございました。

エレ宗様との謁見が終わり、マイメロと柊様がお城から出てまいった時のことでございます。

柊様は前を向いたまま、ボソッとマイメロに、

「もう二度と、くるくるシャッフルで私を呼ぶな」

「え？　それは出来ないわ。だって、マイメロ、ウサミミ頭巾さん、大好きなんだもん」

「……もう一度言う。呼んだら、島流しだ」

「や～～ん」

などと話しておりますと、マイメロを迎えにきたフラット、駆、『夢野屋』の美人三姉妹が駆け寄ってまいりました。

「組頭、どうだった？」

とフラットが尋ねます。

「何のこと？」

マイメロが首を傾げますと、駆がニヤニヤしながら、

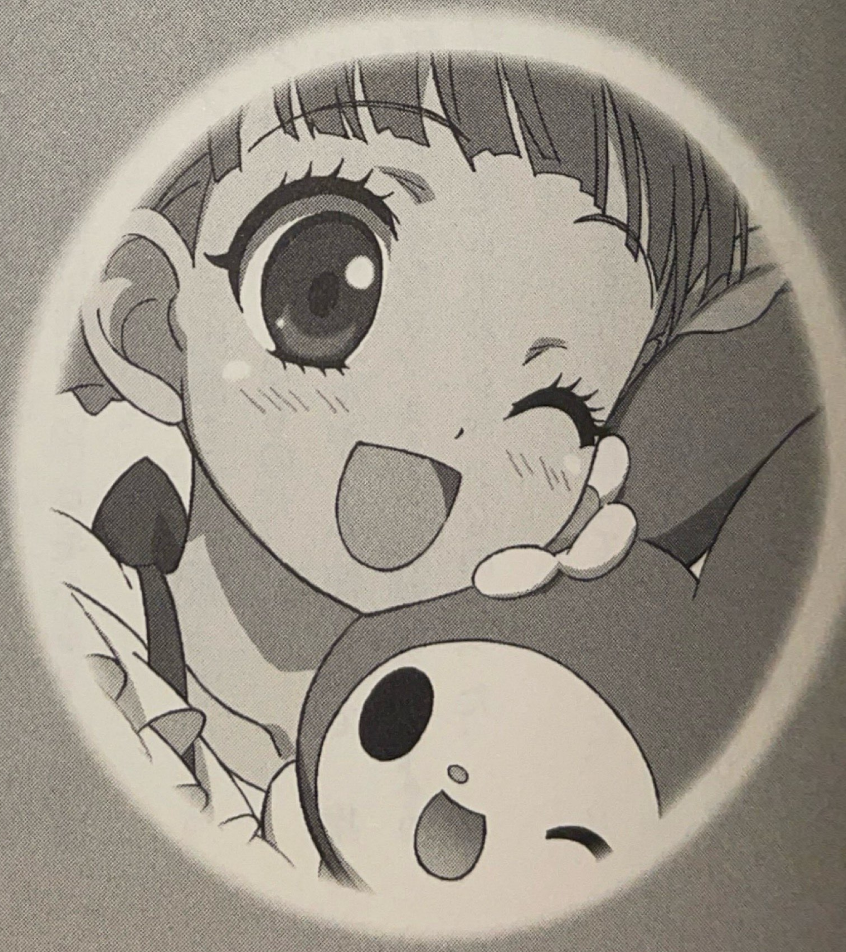
「貰ったんだろう、ご褒美」

「うん。貰ったよ」

とマイメロが答えます。すると、今度は奏、お歌、お琴が矢継ぎ早に尋ねてきました。

「金十両、いや、将軍なら百両は出したんじゃない？」
「豪華な着物なんじゃない？」
「お伊勢参りの豪華旅行券とか？」
「ううん。ウサミミ頭巾さんの実物大フィギュアだよ」
途端に、五人が派手にずっこけたのは言うまでもございませんでした。
こうして、幕府を巻き込む大事件も無事に解決して、今日も小江戸の空は雲一つない日本晴れでございました。
めでたし、めでたし……でございます。

第六話(だいろくわ)　イメチェンできたらイイナ！



高校の学園祭が終わり、祭りの後のようなもの寂しさを柊潤は感じていた。夢野歌たち軽音楽部のメンバーに助けられ、何とか二曲は演奏出来た。動画サイトYeahTubeでも話題になった曲だったので、観客の感触も良く満足したのだが、

「やっぱ、そろそろ新曲作らないとなあ」

ロンドンでYeahTubeにアップした曲が世界中に広まって、CDシングルにもなった。その後も何曲か作って発表はしているし、その後に作ったプロモーションビデオも評判はいい。

YeahTubeでの検索数も多いのだが、ライブもテレビ出演も全部断ってしまっている。プロモーションビデオも何日もかけて、少しずつ撮影したものだ。

それというのも潤の集中力のなさが原因だ。演奏は特にエネルギーを使うので、集中力が切れるのも早い。集中力がなくなると気力もなくなり、スイッチが切れたようにぶっ倒れてしまうのだ。結局は、引きこもりのロックミュージシャンなのだった。

「ロックじゃないよなあ」

潤はぼやいた。ロックとギターが大好きで、ロックな生き方を目指しているのに、なんでこうなった？

潤は時折自己嫌悪に陥るが、集中力がないのか切り替えが早いのかポジティブなのか、悩みすら長続きしない。そこが潤の長所でもあり短所でもある。

恵一への対抗意識もある。周りも新曲を期待しているのが分かる。苦手な作詞を担当してくれる桜塚美紀や、一緒にトレーニングをしている藤崎真菜や、練習がてら演奏のサポートをしてくれる歌も、次の曲を待っていた。

「潤様、もっと身を入れてトレーニングをいたしましょう！」

執事のセバスタンが潤のことを思って、あえて厳しく言ったり、

「居候の身として、あたいも潤くんのトレーニングの手伝いをするよ。任せときな」

クロミに励まされたり、

「ライブ、楽しみにしているゾナ」

バクに期待されたりしている。

「やらなきゃならないってことは、俺が一番分かってるんだけどなあ」

曲のフレーズは浮かんでくるものの、ロックに大切なライブが出来ないもどかしさが、潤を後ろ向きにさせてしまう。努力型の恵一とは異なり天才型の潤にとっては、地道な体力づくりというものが、どうも性に合わないのだった。

学園祭も苦手な定期試験も終わり、明日は休み。そんなホッとした気持ちの夜なのに、

そんなことを考え出した潤は、なかなか寝つかれないでいた。
前述の通り、考え事も長続きしない潤は、深夜二時を回った頃にはベッドの中でうとうとし始めた。そのまどろみの中、
(あれ？　なんだろ。兄貴が練習しているのかな？)
ピアノの音が潤の耳に届いた。
柊家は大きく、もちろん潤の練習場所や恵一のヴァイオリンレッスン専用の部屋のように、完全防音の部屋ももちろんあるが、恵一や潤の部屋もヴァイオリンとギターの練習をしても、他の部屋には届かない程度の防音になっている。どうも、豪邸というのは壁も厚いらしい。
そして、柊家は敷地も広大で、バルコニーで演奏するくらいでは、近隣の住民から文句が出ることもない。もっとも多少の音が外に漏れることはあっても、むしろ足を止めて聞き惚れる、または演奏が聞こえてラッキーくらいに思う人が多いのだった。
(そういえば、今日から兄貴が帰って来ているんだったな)
恵一はヴァイオリニストとして、日本では有名な存在だった。ただ、若くて美形ということで、日本では実力以上にもてはやされる。恵一は潤のように感情が豊かではなく、それがコンプレックスでもあった。
留学先のフランスでは、日本のようにちやほやされることもなく、普通の大学生活を

送り、プロのヴァイオリニストとしては実力だけが勝負だった。それは案外、恵一には合っていたようだ。
(兄貴はピアノも上手いんだったな。それにしても、しょっちゅう日本とフランスを往復してるけど、単位は大丈夫なのかな……)
潤も恵一も旅費の心配など考えもしないところが、お金に不自由しない柊家の血でもあった。
フランスの大学は日本とは方式が違うとはいえ、優秀な恵一が単位を落とすわけがなかった。むしろ危ないのは自分の方だったと、潤は再び暗くなった。どうせ眠れないのなら、起きて勉強でもすれば良いのだが、
(まあ、どうせすぐに眠くなるしな)
何でも集中力のなさで解決していいんだろうかと思いつつ、
(兄貴が作った曲かな。なかなか面白いな)
ピアノ曲はテンポを変えて、軽快に、情熱的に、時にはしっとりとしたフレーズを奏で続けている。潤は恵一の演奏を子守唄代わりに、あっさりと眠りに落ちた。
翌朝、潤は自然に目が覚めた。

「もう朝か……あれ、まだ八時じゃん」

せっかくの休みである。セバスタンにも起こさないよう伝えてある。午後から真菜がトレーニングの付き合いのために来ることになっているが、

「どうせなら午前中いっぱい寝ていようと思ったのになあ。まあいいか」

二度寝をしようとして思い直し、潤は起きることにした。真菜が来るということは、歌とマイメロも来るだろうし、当然美紀も一緒のはずだ。

「うっかり寝過ごしたらカッコ悪いもんな。そうだ、ゆっくり風呂にでも入ろう」

潤はセバスタンを呼び、風呂の準備を頼んだ。

しばらくベッドでゴロゴロしていると、セバスタンから準備が整ったと教えられ、潤は完全に頭が目覚めていないまま、バスルームに向かった。柊家には幾つかバスルームがあるが、どれもイヤミなくらい大きい。

とはいえ、潤が準備を頼んだバスルームは、温泉宿のプライベートな露天風呂のような感じで、湯船が必要以上に巨大というわけではなく、窓が大きく、そこからは外の景色が見えるようになっている。柊家は洋館だが、この窓の外の庭だけは日本庭園風だ。

日本を離れていることの多い潤たち家族は、ここでゆっくりと疲れをいやすのだった。

潤も以前はシャワー派で、普通にお風呂に入る時は大型の浴槽が好きだったのだが、日本を何年か離れていたこともあり、今はここがお気に入りになっている。

「うん。今日はトレーニングもがんばれそうな気がするな」
真菜が来るとあっては、サボろうにもサボれない環境だ。歌、美紀、真菜の三人は潤のことを理解してくれる大事な女友達だった。その中でも真菜は男っぽくサッパリした性格で、潤とは話が合う。筋トレオタクっぽいところは、さすがに潤にはついていけないが。
「何目指してんだ？　オリンピックか？」
不思議に思い、潤は何度か尋ねたことがある。
「それがな、どうもどんな競技もピンと来ないんや」
真菜はレスリングや空手や総合格闘技など、興味があるものには何でもチャレンジしている、関西弁丸出しの元気な女子高生だ。
「真菜はスポーツ万能だもの。どれもみんなトップクラスじゃない。贅沢な悩みよね」
見た感じ通りにスポーツ全般が得意ではない美紀にとっては、羨ましい限りのようだ。
「個人競技なら、真菜はどのスポーツでも全国レベルに入ると思うのにね。部活に所属すればいいのに」
歌にももったいないとよく言われるが、
「部活ってのはどうも馴染めんしなあ」
真菜はいつも笑い飛ばしていた。

年頃の女の子らしく、道場やジムにカッコいい選手がいると、さらに熱心に通ったりもする。しかし、うっかりすると自分の方が強くなってしまい、相手に引かれることも多かったりする。

可愛いものが苦手で、正義感が強くて頼もしい真菜は、先輩後輩問わず男子生徒よりも女子生徒に人気がある。ただ、マイペースな美紀や、部活や駆とのデートに一生懸命な歌に比べて、やりたいことが見つからずに迷走している感じは、自分に近いものがあると潤は思っている。

ゆっくり湯船につかっていると、また眠気が襲ってきた。

「マズイマズイ。家の風呂場で溺れたなんて、シャレにならねーよ」

潤は湯船から出ると、

「見慣れないシャンプーがあるな。兄貴のかな？」

素っ気ないデザインのボトルが並んでいるのを見つけ、

「ま、いいか。たまには違うのを使ってみよう」

と、容器を傾け手に取ると、髪を洗い始めた。

「ん？　何だか女の子が使うみたいな香りだな。フランスに行ってから、兄貴も趣味が変わったのかな？」

潤は面白がってシャンプー、コンディショナー、ボディソープと並んでいるのを、順

番に使うことにした。
「ま、このデザインなら女の子用ってことはないだろうな。うちには若い女の子なんていないし」
そのボトルには「SHAMPOO」「CONDITIONER」「BODYSOAP」と、黒く文字が書かれているだけの、シンプルなデザインのもので、潤はすっかり油断していたのだった。

「うっわー、マジ？」
潤は部屋に戻ってドライヤーで髪を乾かすと、
「ぜんっぜん決まらねえ……」
髪がサラサラし過ぎて、いつものようにカッコよく決まらないのだった。
「おまけに何だよ、この匂い！」
全身から甘ったるい香りが漂っているのが分かる。間違いなくさっき使ったシャンプー類なのは分かっているが、
「どうしましたか？　潤様……おや？」
慌てて駆け付けたセバスタンが、鼻をひくひくと動かした。どうやらセバスタンも気づ

いたらしく、
「申し訳ありません。潤様専用のシャンプーも一緒に置いてあったのですが」
と、セバスタンが恐縮するのを止め、
「いや、知ってたけど、つい使っちゃったんだよ」
かといって、もう一度風呂に入り直す気はないし、
「今日は休みだし、まあいいや。それより、腹へっちゃったよ」
もう十時近い時間になっていた。
「かしこまりました。では、ダイニングに食事を用意します」
セバスタンが部屋を出て行き、潤はヘアセットを諦めて立ち上がった。
「面白がって使うんじゃなかった……あー、テンション下がるわ」
しょんぼりしたままクローゼットから適当な服を出して着替えると、食事もそこそこにスタジオ兼トレーニングルームに向かった。
その部屋は元々完全防音になっていたが、潤がギターを弾くようになってからは部屋を広く改造した。さらにYeahTubeにアップした曲が有名になり、留学先のロンドンから日本に戻ってからは、録音もできるスタジオに改造され、トレーニング専用の部屋を隣に作った。
以前は恵一が使っていたのだが、今はすっかり潤専用みたいなものだ。恵一に比べ、

潤の方がはるかに音が大きいことや、ベースやドラムやキーボードも置いてあるので、広かったスタジオも今は手狭なくらいだ。恵一は潤に部屋を譲り、別の場所を使っている。歌たちが潤のところに遊びに来ると、たいていはこの部屋に通される。

潤はイマイチやる気が出ないまま、部屋に入ると並んでいるギターの中から一本のギターを手に取った。

「今の気分はコッチかな」

それはアコースティックギターだった。潤はストラップを肩にかけると椅子に座り、つま弾き始めた。

「珍しいな」

「おおっ？　ああ、兄貴か」

いきなり声をかけられ潤は慌てたが、恵一と分かると照れたような顔になった。

「その曲、僕が昨夜弾いていた曲と少し似ているな」

何気なく弾いていたメロディーだったが、言われてみるとそんな気がして、

「なーんだ、そうだったのか。どうりでスムーズに曲が浮かんで来たと思ったよ……っていうか、兄貴こそ珍しいよな。ここに来るなんて」

ギターから手を離して潤が尋ねると、恵一はふうっとため息をつき、

「やっぱり聞いてなかったんだな」

やれやれというように目を閉じた。

「あー、ゴメンゴメン。そういやメシ食ってる時、話しかけられたっけ。オレぼーっとしててさ」

皮肉で言ったわけではなかったが、悪びれもなく謝る潤の明るい口調に、恵一もふと笑みを漏らした。

「潤も使っているそのシャンプー、実は見本なんだ。新商品のコマーシャル曲を作って欲しいと言われてね、それで昨夜曲を考えていたんだが」

「ああ、それでボトルが素っ気ないデザインだったのか。見本品ってこと？」

潤は恵一のサラサラとした髪を見て、自分の髪を触った。恵一とは全然違う毛質だと思っていたが、案外近いことに今更ながら気づいたのだ。

「兄貴も同じの使ったのか？　いつも髪がサラッサラだけど」

恵一は自分の髪に触った。もちろん、恵一が使っているシャンプーは高級品なのだが、潤に比べたら無頓着だ。髪質のせいなのか、いつもと変わりない。

「いや、僕は同じシリーズのミント系のものがあっただろう。そっちを使ったんだが。お前が使ったのは……」

潤に近づくと、

「……多分フルーツのものだろう。桃みたいな香りがするぞ」

「えー、違うのがあったのか？　よりによってピーチかよ、くっそー、サイアクだぜ！」

いくつかボトルが並んでいたことを潤は思い出した。しかし、どれも似たようなボトルだった上に、ぼーっとしたままだったので、気づかなかったのだ。恵一は潤が何で悔しがっているのか、全然理解出来ないままなので、この話題を続けても平行線だ。

「それにしてもさ」

潤は一旦シャンプーのことは忘れることにして、恵一に向かい、

「兄貴がコマーシャルの作曲を引き受けるなんて意外だよなー。俺、兄貴はクラシック一筋だと思ってたのにさ」

真面目を絵に描いたような恵一は、ひたすら自分のヴァイオリンの上達に没頭していた。それは今でも間違っていないと思っているが、

「僕だってたまにはリクエストされて色んな音楽を演奏することはあるぞ。まあ、留学してから色んな音楽や人に出会ってね……」

恵一は潤を見た。次の言葉を言おうか言うまいかと一瞬考えたのだが、

「お前の演奏は演出過剰なところはあるが、確かにみんなを楽しませているし、僕には出来ないことだ。今まで自分を狭い世界に閉じ込めすぎていたんだなと、お前は気づかせ

てくれたんだ」
「……？」
潤は一瞬、恵一が何を言っているのか分からず、ポカンとした。
「！」
もしかして、これは恵一のデレ期が来たということなのか。潤は驚いた顔で恵一を見たが、恵一の表情はいつも通りでまったく読み取れない。
今まで恵一に対して反発していた潤は、恵一とは正反対のロックを選んだ。だが、ギターが上達するにつれ、演奏や作曲の楽しさと同時に音楽の奥深さも知った。過去のトラウマから抜け出した潤は、恵一に対して反発する気持ちはなくなっていたが、同時に恵一も同じように考えていたのだと分かり、潤の顔は自然に赤くなっていった。
（あれ？　俺ってば何考えてた？）
潤は「ないない」とばかりに、自分の目の前で手を振った。
「それで昨夜はピアノ弾いてたんだな」
思いついたフレーズは、およそ潤らしくない静かなものだったので、潤がこの後演奏することはないだろうと思った。元が恵一のピアノだと知れば、納得だ。
「僕は短い曲は苦手でね。それでお前に聞いてもらおうと思っていたんだ。だが、今のアレンジは悪くないな」

「え？　そうなの？　いや、なんか照れるな。元の曲が良かったからだよ」

恵一と潤は水と油のように反発し合っていたので、お互いを認めるようになった今も、言葉に出して褒め合うようなことはなかった。

「……じゃ、もう一回弾いてみるよ」

照れ隠しもあって、潤はギターを持ち、先ほどのフレーズに続けて演奏を始めた。恵一はじっと聞いていたが、

「どうもそっちのバージョンの方がいいみたいだな。僕は違う曲を作るから、その曲はお前が最後まで作って発表すればいいんじゃないか？」

「えー、やだよ。これ全然ロックじゃないし。今日はたまたま髪型とファッションが決まらないから、うっかりアコースティックギターを手に取っただけだから。それだけなんだからな」

必死に抵抗する潤に恵一はフッと笑顔を見せ、

「潤、お前こそ自分で自分の世界を狭めているんじゃないのか？　僕はロックには詳しくないが、アルバム全部が派手な曲ばかりだったら飽きると思うが……」

「そうかな？」

潤は今まで好きだったロックミュージシャンのアルバムやライブを思い浮かべてみた。確かに恵一の言う通り、全部がキレキレの曲ばかりだとどれも似たように感じてしま

うだろうし、実際のアルバムやライブの中にもバラードは含まれていた。
「……お前とこういう会話が出来るとは思わなかったな。お蔭で僕もいい曲のフレーズを思いついたよ。明日の打ち合わせまでには作れそうだな」
恵一はそう言うと、潤のスタジオから出て行った。

感動の面持ちでそのやりとりを聞いていたのは、クロミとバクだった。
(……柊しゃま……)
(二人とも、ちょっと見ない間に大人になったゾナ……)
バクに至っては、柊兄弟のお父さんみたいな気分になっていた。
(でもさ、なーんか妙な空気出してなかったか?)
(会話は普通だったゾナ……でも、二人の世界だったゾナ)
感動はひとまず置いて冷静になったクロミとバクは、何となくいたたまれない雰囲気を感じて出るに出られない状態だった。歌と駆くらいに甘い。その空気感は潤の身体から発散されるピーチの香りのせいかもしれなかった。形から入る潤は香りにも酔ってしまったようだった。
(柊しゃまと潤くんは、反発し合ってた時期が長かったからな。仲直りもぎこちない感

じがするよ）
（あの兄弟の歴史を考えると、距離の取り方がイマイチなのも仕方ないゾナ）
（でもさ、兄弟ってあんなんだったっけ？）
（うちの兄弟とはえらい違いゾナ）
（お前のところは参考にならないんだよ！）
クロミは張り倒そうとして思いとどまった。
二人は潤が部屋に入って来たことを知り、トレーニングのサポートをしようと駆け付けた。しかし、潤の恰好がいつもと全然違うことや、恵一が入って来て会話を始めたので、空気を読んで姿を隠していたのだった。
（ま、それはそれ。せっかくいい感じになってきたんだ。今のことについては色々言わずに、そっと見守ろうじゃないか）
（ゾナ……）
潤と恵一の性格を良く分かっていたクロミとバクは、暗黙の了解ののち、潤の前に姿を現した。
「よう、クロミもバクも、俺のトレーニングを見張りに来たんだな」
潤は二人がずっといたことを知らず、いつもと同じようにクロミとバクに話しかけた。
「まっ、まあね。いい加減ライブくらいしとかないと、引きこもりロッカーって言われち

まうよ」
「それにしても、今日はずいぶん雰囲気が違うゾナ。別人かと思ったゾナ」
バクに言われ、潤は自分がまず選ばないチェックのシャツを着ていることに気づいた。
「あっ、ヤバ。どうりで今日はテンション上がらないと思ったぜ」
「潤くんのクローゼットにそういう普通の服があるとは、あたいもビックリだよ」
「失礼な奴らだな。俺だって普通の服くらい持ってるぜ。まあ、今日は……なんだ、寝不足で色々あったからさ」
潤は取り繕うと、ギターを変えようと立ち上がった。
「あっ、ちょっと待った！」
クロミが慌てて止めた。
「なんだよ。服装や髪形がいつもと違っても、俺のロック魂が消えると思うなよ」
「いや、そうじゃなくてゾナ……クロミ様は、潤くんが持ってるギターはどんな音がするのかなーと思っただけゾナ。そのギターでも、今までの曲はいい音になると思うゾナ。でも、演奏するところをバクもクロミ様も見たことないゾナ」
最初からいたとも言えず、今度はバクが取り繕った。
「潤くんのことだから、どんな楽器も自在に弾けるんだろ？　どうせならいつもと違った曲も聞いてみたいと思ってさ」

クロミもバクに話を合わせ、首を縦に振った。
「しょうがねえなあ。じゃ、さっき兄貴に聴かせた曲を弾いてみるぜ」
二人におだてられ内心はまんざらでもないのだが、渋々と言った体で、潤はギターのストラップを肩にかけ、椅子に座った。そのタイミングで更に先ほどからじーっと陰に隠れていたセバスタンに、クロミが目で合図をした。セバスタンも出るに出られずに隠れていたのだ。そして、クロミの合図とは、
（承知いたしました。すぐに！）
セバスタンは音も立てずに移動し、スタジオに常時設置しているビデオカメラの録画ボタンを押したのだった。
「じゃ、さっき作ったばかりの曲だけどさ……」
潤はギターを奏で始めた。先ほどの曲にさらにアレンジを加え、適当な英語の歌詞も即興で作って歌い始めた。クロミとバクの拍手に気分の良くなった潤は、続いてＹｅａｈＴｕｂｅに投稿した曲のアコースティックバージョンも、アレンジを変えて演奏を始めた。恵一と同じように、潤には確かに音楽の才能があるようだ。
潤が演奏を終えて顔を上げると、入り口近くのソファに、歌、美紀、真菜が座ってい

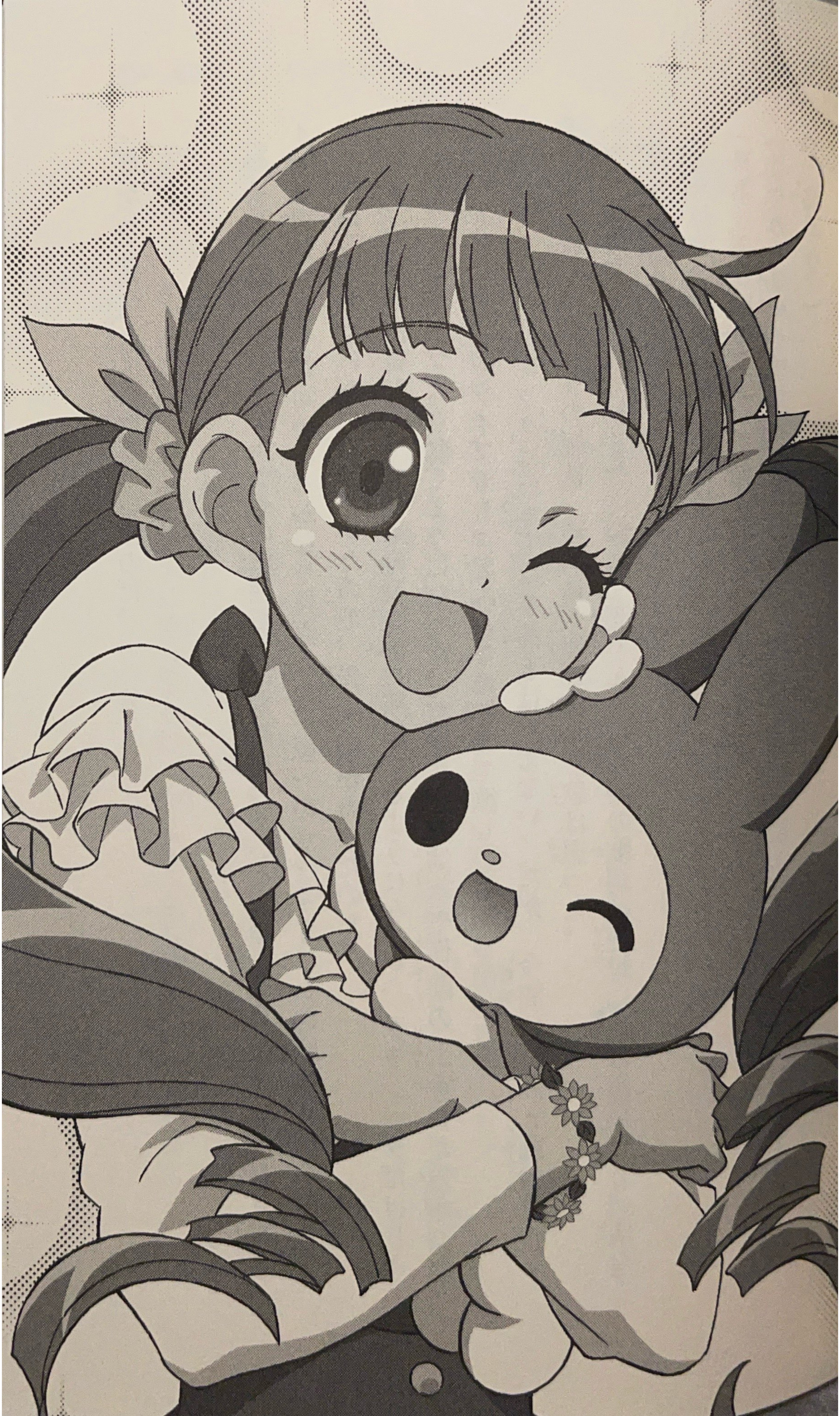
て、さらにドア近くにセバスタンが移動していた。
「おっ……お前ら、いつからそこにっ！」
慌てる潤を取り囲み、
「すごーい、潤くん。素敵なバラードだね」
「本当ね。ビックリしたわ。歌詞とはちょっと合ってない感じがしたけど」
「英語だったやん、美紀よう分かったな。でも、ええ曲やったわ」
「潤様……」
全員が感動の面持ちで拍手していた。もちろん、クロミとバクも手を叩いている。
「なっ、何だよみんなして。いっ、いつ入って来たんだよ」
ますますうろたえた声で潤が叫んだ。
「素敵な曲だね〜、潤くん。マイメロ、いつもの曲よりこっちが好きかも〜〜」
歌に抱かれたマイメロも、うっとりした笑顔を浮かべていた。全員に絶賛された潤は何となくいい気分になったが、
「いやいやいや。ダメだろ、俺」
と、おもむろにギターを下ろした。
「えー、どうして？　あんなに素敵だったのに」
歌を始め、みんなが慌てて止めるが、

「今日はたまたま、たまたまなんだよ。髪型も服も決まってないし、いつもの俺の調子が出なかっただけなんだ」
「そういや、えらい気い抜けたカッコやね。なんかあったんか？」
「そうねえ。今日の潤くんって、シンガーソングライターっぽい感じだわ」
真菜と美紀がうんうんとうなずいた。
「そうだね。シャツはイギリス風のタータンチェックだし。でも、結構似合っていると思うわよ。ね、マイメロ」
「うんうん。潤くんもイメージチェンジした方がいいかも〜。クロミちゃんとバクくんもそう思うでしょ？」
歌もマイメロも曲を気に入っているせいだが、本心で言っているように潤には感じられた。本人の意思でやったわけじゃないのに、立て続けに褒められると、どうにも気分が落ち着かない。
「あたいらも聞いてて、そう思ったよ。でも、それよりもっと重大なことに、あたいは今気づいちまったよ」
「何ゾナ？」
マイメロに言われて出て来たクロミの発言に、全員が注目した。

クロミがゆっくりと潤の周りを歩き回っていると、
「クロミちゃん、もったいつけないで早く言ってよ〜〜！」
待ちきれずにマイメロが叫んだ。仕方なくクロミは立ち止まり、
「ズバリ言わせてもらうよ。潤くん、さっきからトータルで十分以上演奏してたのに、全然疲れてないね。そうだろ？」
バシッと潤を指差した。
「……ん？」
潤は自分の頭を振ったり、腕を回したりしたが、
「ホントだ。何ともない……っていうか、まだまだイケそうだぜ！」
と、いきなりテンションが上がる潤に、
「おおっと、潤くん。あんまり興奮すると、すぐに集中力が切れるよ」
潤に対して上から目線で意見をすることはまずないクロミなのだが、柊家に来てからハマった刑事ドラマのせいなのだろう。実際クロミたちは、恵一が入って来る直前からいたのだから、トータルの演奏時間はもっと長いのだ。
「実はさっき、セバスタンにあることを頼んでいたのさ」
クロミはバッとセバスタンを振り向き、コクリとうなずいた。すぐにセバスタンも気づ

き、
「そうです。実は私は歌様たちよりも早く部屋に入っておりまして、潤様の演奏を録画していたのです」
セバスタンは小型のビデオカメラを三脚から外し、画面を見て、
「およそ十五分になりましょうか。潤様、見事な演奏でございました」
「つまりだ。今日みたいな演奏なら、二時間のライブは無理でも、テレビ出演くらいはこなせるってことさ」
刑事ドラマというより、探偵ドラマなんじゃないかとツッコミたくなるクロミの口調だったが、その場にいた全員も激しく同意していて、誰からも文句が出なかった。
「すご〜い、クロミちゃんの言う通りだよ〜〜」
マイメロがパチパチと手を叩いた。
「このままトレーニングをええ感じに進めたら、ライブデビューの実現も遠くないんとちゃう？」
真菜が勢い込んで言うと、歌も笑顔になり、
「そうだよ、潤くん。ライブも派手な曲ばかりじゃ疲れちゃうもの。こんなしっとりとした曲作れるなんてすごいよ。ファンもすごく増えると思うよ。さっきの曲は新曲としてちゃんと発表するべきじゃないかな。ねっ、マイメロもそう思うでしょ？」

熱が入ったのか、歌はマイメロをぎゅっと抱きしめた。
「う～た～ちゃ～ん、マイメロも同じ意見だけど……きついよ～～」
「まっ、あたいも潤くんのライブ早く見たいし、トレーニングはバクと一緒に、今まで以上に張り切ってサポートするよ」
クロミが言えば、
「おっ、クロミ、やる気満々だねえ。うちもガンガン付き合わせてもらうわ」
真菜がクロミと拳を軽く突き合わせた。
集中力を上げるためにはトレーニングしかないと、誰もが思っていた。日本に戻った潤はそのためにトレーニングマシンまでそろえたのだ。だが、実際の潤は自宅のパーティーやレコーディングの直後など、実際に演奏した直後こそ反省してトレーニングをやりだすものの、すぐにサボってしまう。
トレーニングは一週間サボると、元に戻るまでそれ以上の時間がかかる、ダイエットのようなものだと真菜は知っている。だからこそ、叱咤激励するのだが、毎日付き合うわけにもいかなかった。
クロミは居候という立場から、せめて潤の手助けをしようと思っているが、本来はマリーランドの住人だ。夢ケ丘に戻るたびに、潤の集中力がちっとも続くようになっていないことにガッカリしていた。



だからこそ二人は興奮していたのだ。

そして、歌たちは潤がいつもの雰囲気とは全然違っていて、思いがけずキレイなメロディーを聞いて驚くと同時に、かなり見直した。恵一のヴァイオリンの繊細な美しさに比べ、潤は派手さだけが目立っていたので、先入観があったのだ。

歌は、自分が高校に入ってから軽音楽部に所属するようになって、クラシックだけじゃなくロックやポップスも聴くようになった。だから潤の演奏や作曲の上手さが分かった今は、テレビ出演やライブでもっとみんなに知って欲しいと願っている。

潤のバリバリのロックは日本では本流とはいえない。だが、今聞いた曲と潤のカジュアルな服装やサラサラの髪は、絶対に人気が出ると歌は思った。

「歌が興奮するのも分かるわ。ねえ、潤くん。日本語の歌詞は絶対に私に作らせて。切ない青春映画の主題歌のイメージで作るわ」

「全米が泣いた！　ゆうやつ頼むわ！」

「真菜、ここは日本よ。私には英語の詞は無理よ」

「じゃあ、美紀が感動的な歌詞を作って、潤くんに英訳してもらえばいいと思うよ。ねっ、潤くん？」

「……あ」
「美紀ちゃんの歌詞はひと味もふた味も違うもんねえ～～」
マイメロがニヤニヤしながら言うと、
「潤くんの曲だもの。それくらいでちょうどいいと思うけど」
と、美紀が返した。
その後も潤は口を挟む隙さえ与えられない、女子トークが続いている。置いてきぼりを食らったような気分で、潤はセバスタンを見た。
「潤様……早速テレビ出演の交渉をいたしましょう」
黙っていたから気づかなかったが、実はセバスタンが誰よりも暴走していた。
潤はスタスタとギターのところに行き、エレキギターに持ち帰ると、アンプに繋いで轟音を鳴らした。途端に全員が静かになった。
「潤くん、落ち着いて」
歌が耳を塞ぎながら言うと、
「落ち着くのはお前たちの方だと思うけどな」
ビシッと潤に言われ、全員が静かになった。
「真菜、トレーニングマシンは勝手に使ってくれ。俺はさっきの曲を部屋でちゃんと作ることにするからな」

「じゃあ、新曲として発表するのね」
期待に満ちた目で美紀が見つめ、全員が潤に注目した。潤はポリポリと頭をかき、
「忘れないうちに譜面にするだけだ。俺はロックでライブをするのが目標なんだからな、明日からはちゃんとロックのスタイルに戻るし、トレーニングもするから」
そう言うと、エレキギターをセバスタンに渡した。自分はさっきのアコースティックギターを手に取ると、
「……褒めてくれてありがとな。セバスタン、みんなにお茶でも出しといてくれ」
「かしこまりました、潤様」
セバスタンがうやうやしく潤のためにドアを開け、潤はギターを持ったままスタジオを出て行った。
今度は残った歌たちがポカンとする番だった。
「あたいら、ちょっと盛り上がり過ぎたか？」
「そうかもしれないゾナ」
クロミがコードを片づけながらポツリと言うと、バクもうんうんとうなずいた。
「でも、あの曲がいい曲なのは確かよね、ねえ」
歌が真菜と美紀に問いかけると、やはり全員がうなずいた。
「潤くんもまんざらでもなさそうやったな。でも、うちらも先走り過ぎたかもな」

「そうね。でも、潤くんがあんな曲を作るなんて思わなかったわ」
そう言って驚く歌をよそに、マイメロはやっぱりマイメロだった。
「髪を下ろした潤くん、案外イケメンねえ～～」
「！　今そういう流れだったか？」
と、クロミがマイメロを振り向くと、
「クロミちゃんもそう思ったでしょ？」
「……あ、まあな」
ニコニコしているマイメロの意見には、取りあえず全員が同意した。

部屋に戻った潤は、ギターを弾き始めた。何回か弾いてみて、譜面にコードを入れていくと、
「うん。まあまあだな」
曲の出来栄えには満足げでもあったが、
「兄貴のヴァイオリンに影響されたとはいえ、いつもの恰好じゃ出来ない曲だよな」
潤の脳裏に「俺って天才？」「形から入り過ぎだろ！」「いつもと違うのに何で絶賛するんだよ！」「もしかして、また違う恰好したら別の曲が出来んのか？」

もやもやと考えだし、落ち着かない思いだった。
「ま、出来た曲に罪はないし。逆にロックバージョンを作ればいっか」
結局そんな考えに落ち着き、寝不足気味だった潤は夕食の時間までぐっすりと眠った。
歌たちはとっくに家に帰り、外はすっかり暗くなった。電気もつけずに爆睡している潤の部屋にセバスタンが夕食の時間を告げにやって来た。
「もうそんな時間か」
「今日は色々ありましたし、お疲れのようでございますが、恵一様もいらっしゃいますし。ぜひ一緒に食事をとのことですが」
広い屋敷に家族が集まることは滅多になく、ましてや今は恵一との仲も悪くない。潤に異存などない。
「分かった。すぐ行くよ……あ、セバスタン」
戻ろうとしたセバスタンを潤が引き止めた。
「何でございましょう?」
「昼間録画したっていうアレさ、データを部屋に持って来てくれないかな」
消去されると思ったセバスタンは、一瞬間を置き、答えた。
「かしこまりました」
「いや、譜面に起こそうと思ったんだけど、ちょっとど忘れしちゃってさ」

潤の言葉を聞いて、セバスタンは安心したのか、
「ではすぐにこちらにお持ちします」
「あっ、ご飯の後でいいよ。ぐっすり寝ちゃったから、夜ちょっと続きをするよ」
不審そうな表情を浮かべたセバスタンに、
「大丈夫だ。明日は学校だから夜更かしなんかしないから」
夜更かしよりも予習復習の心配をしていたのだが、顔に出さず、セバスタンは一礼すると潤の部屋を出て行った。

翌日、学校から帰って来た潤はクローゼットの前で悩んでいた。ハンガーに掛けられた服を鏡の前に持って来て、当ててみるが、
「うーん。俺も知らなかったぜ。俺の部屋にこんなに色んな服があったとは」
潤の私服は普段は原色使いの派手目なTシャツの上にロッカーらしく革ジャンやファーの襟付きのジャケットなどを羽織っている。
上着の色も赤や黒や紫にシルバーやゴールド使いの革ジャンが好きで、アクセサリーも大きめでジャラジャラしているものばかり。もちろん制服もあまり好きではないし、スーツなど堅苦しい服も苦手だ。

入り口が二つの、普通の部屋並みの大きさのクローゼットが部屋にあるのだが、好みの服はたいてい同じ場所に並んでいる。昨日はぼんやりとクローゼットに入って、最初に手に取った服を着たところ、チェックのシャツだった。

「いくらテンション下がってたからって、あのチョイスはないよな」

と、クローゼットをウロウロしていたら、思いのほか色んな服が掛けてあって驚いたのだが、母親がデザイナーという職業で、家がかなりの資産家で、それなりの服装を求められることもあるのだから、各種揃っていて当然だった。とはいっても、恵一のクローゼットに潤のような服が並んでいるわけではない。

「よっしゃー、これにしよ！」

潤はいつもと同じようなTシャツを取ろうとして、ふと思い立って戻した。

「待てよ。どうせなら……」

昨日は自分とは真反対のスタイルだったが、そのお陰で今まではイメージの違う曲が出来た。ならば、またいつもと違う服を着てみたら、新しい扉が開くかもしれない。

「まさかな……」

さすがにそれはないだろうと潤は頭を振り、クローゼット全体を見回した。

「ものは試しだ」

散々独り言を呟いたあげく、潤は一着を手に取った。

自宅のスタジオ兼トレーニングルームに向かう途中の廊下に恵一がいて、セバスチャンと何やら話をしていたが、
「潤、また今日も珍しい恰好をしているんだな。どんな心境の変化なんだ？」
恵一は潤を不思議そうな顔で見た。
「あー、まあいーじゃん。それより兄貴はコマーシャルの曲出来たの？」
潤が着ていたのは黒の細身のスーツだった。キチッとしたものではなく、下に渋い赤のシャツを着て黒のネクタイを無造作に締め、オシャレ感を出していた。
潤はあまり背が高いわけではないが、ロッカーらしく細いので、そのスタイルはかなり決まっていた。髪型は学校にいた時と同じなので、いつもと変わりないが、今日の服装にはさほどの違和感はなかった。
「ああ、あの後すぐに出来たよ。早速スタジオで収録することになったんだ。そうだな、潤のお蔭かもしれないな。礼を言うよ」
素直に礼を言う恵一に潤は照れて、
「何言ってんだよ。それより帰ったら俺にも聞かせてくれよ」
黒いハットを目深に被り、赤くなった顔をごまかした。クロミとバクの言うところの、変な距離感健在である。もっとも、恵一はいつも通りで、
「ああ。明日の午後にはフランスに戻るし、今夜聴かせてやろう。お前も昨日の曲、演奏

してくれるんだろう?」
「え? 俺も?」
「昨夜部屋で作っていただろう。夜ギターの音が聞こえたぞ。じゃあ、また後でな」
恵一は潤に言うと、セバスチャンとともに玄関に向かって歩いて行った。潤は自分の真後ろにいたセバスタンに、
「見たか?」
「? 何のことでございますか?」
何事か分からず尋ね返すセバスタンに、潤は振り向き、
「兄貴、俺に笑いかけてたよな。見ただろ。お前は俺の真後ろにいたんだから」
「は……そうでございますね。良い笑顔でした」
実際の恵一はほぼ無表情なのだが、潤には笑顔だと分かった。この微妙な違いは、セバスタンには分からなかったが、主人の言うことを否定しないのが正しい執事である。実際、クロミがクルミ・ヌイになった時でさえ、恵一の満面の笑顔に接したことがあっただろうか。
「よーし、俺はやるぜ!」
「……今夜が楽しみでございますね」
スタジオに駆け出す潤の後を、セバスタンが必死に追いかけた。

　クロミは潤が帰って来たのを知ると、トレーニングルームに入った。昨日の今日である。きっと潤はトレーニングに励むだろうと思っていたのだ。スタジオのドアが開き、セバスタンを伴って潤が入って来ると、クロミは驚いて近づいた。
「潤くん、今日はまた珍しい恰好してるね」
「ああ、ちょっと試してみようと思ってさ」
　続いてスタジオに来たバクとクロミとセバスタンは、顔を見合わせた。
(潤くん、チョロすぎるにも程があるよ)
　クロミはあまりにも分かりやすい潤にため息をついたが、
「また新しい曲が出来そうかい？」
「どうかな？　でも、ちょっとイメージが湧いてきたぜ」
　潤はバチッとウインクした。クロミは潤がギターを手にするのを見て、面白いことになりそうだという、期待の方が勝り、
「今度はどんな曲なんだろうね」
　と、バクと一緒にソファに腰かけた。
　潤が演奏したのは、ロックには違いなかったが、少しジャズのテイストのあるモダン

なフレーズだった。形から入るタイプとはいえ、こんな曲も作れるのかと驚くばかりだ。
「すごいクールな曲だね、潤くん」
「もう一度聴いてみたいゾナ」
三分に満たない曲だったが、クロミとバクは盛んに拍手を送った。セバスタンはもちろん、録画のボタンをそっと押していた。
「じゃ、リクエストにこたえてもう一度弾いてみるぜ」
潤は先ほどの曲を弾き始めると、新たなフレーズを加えて演奏をした。のってくるとどんどん新しいフレーズが湧いてくるようだった。ところが、四、五分が過ぎると、潤の演奏の音が小さくなっていき、
「大丈夫かい、潤くん」
潤はくたくたと膝をついてしまった。
「うーん、このテンションは微妙すぎて俺には合わないのかなあ」
ソファに崩れ落ちるように座り込んだ。
「潤様、とてもいい曲でした」
「そうだよ。こんなにどんどん新曲作れるなんて、潤くんってすごいよ」
「今までの曲とも、昨日の曲とも違っていたゾナ」
と、クロミもバクも大絶賛だ。

「また夜に譜面に起こしてみるよ。セバスタン」
「承知いたしました」
潤から差し出した手に、セバスタンは今録画したデータのカードを渡した。
トレーニングは結局出来なかったが、夕食の後、すっかり回復した潤は、恵一が作ったコマーシャル用の曲をヴァイオリンで演奏するのを聴いた。コマーシャルに使うということで、ほんの三分ほどの短い曲だったが、軽快で爽やかなヴァイオリンの演奏だった。
「すごいな、兄貴。あのシャンプーのシリーズにピッタリだよ」
演奏が終わり、潤はさかんに拍手をした。恵一はヴァイオリンをケースにしまうと、
「潤も今までとは違う曲を作っているようだな。まだ若いんだからロックだけに絞る必要はないと思うぞ」
「そうかな？　兄貴は俺のロックが嫌いなんだ？」
恵一は意外そうな顔をして、首を振り、
「そんなことはない。だが、色んな曲にチャレンジするのはいいと思う。まあ、ライブをしたいのならトレーニングするしかないだろうな」
含みのある言葉を残し、恵一は部屋に戻った。
「トレーニングかあ……それが問題なんだよな」
潤はガックリと肩を落とした。

その次の日はTシャツにダメージのデニム、次の日は髪型も変えてメイクもしてヴィジュアル系、次の日はアロハと、学校を終えて帰って来ると、日替わりのように外見を変え、潤は色んな曲を作り始めた。

「さすがにアロハはダメだな。ウクレレは俺には合わないみたいだ」

とうとう週末を迎えた。潤はウクレレを抱えたまま、ソファに座ると肩を落とした。

形から入っても、何でも出来るわけではないようだ。

「ヴィジュアル系は結構イケてたけどな」

「毎日新鮮ゾナ」

クロミとバクは放課後潤が帰って来るのを楽しみにしていたが、そろそろネタも尽きてきたようだ。後はビジネススーツと和服しかないような気がする。

クロミからマイメロを通じて潤の話を聞いた歌たちが、セバスタンに伴われてやって来た。

「あー、潤くんのアロハ、カッコいいね」

と歌。するとマイメロも、

「ほんとだ～。マイメロもアロハ着てみた～～い」

と、のっけからアロハの話題になった。
「潤くん、この際だからさ、みんなに今までの映像を見せてあげなよ。きっと、みんなビックリすると思うよ。カッコよさにさ」
「そうかなあ？」
歌に褒められて満更でもない様子で、潤がセバスタンを向くと、
「潤様、これが今日のデータでございます」
セバスタンは潤に録画データの入ったカードを渡した。
潤はテーブルの上にあるパソコンを開いて、カードを差し入れると、さっきまで弾いていたウクレレの演奏が画面に現れた。それが終わると、パソコンのフォルダをクリックして、潤が自分で編集した、日曜日の演奏から始まる日替わりの演奏の様子がパソコン画面に映し出された。
「へえ、なんや色々やってたんやなあ」
「ヴィジュアル系、いけるじゃない、潤くん」
真菜と美紀が感心したように言うと、
「全部雰囲気の違う曲だね、潤くんってすごいな」
じっと見ていた歌も驚きを隠せない様子だ。真菜は潤の身体の動きを見て、
「やっぱりテンション高い曲は、疲れも早いんやな」

テンポの速い曲や、声を張り上げる感じの曲は、やはり体力を使うようだった。まだ、慣れたロックの曲の方が疲れは少ないかもしれない。
「この際だからイメージチェンジをするといいんじゃない？」
美紀は最初に聞いたギターの曲が一番気に入っているようだった。
「歌詞も少し変えているみたいね。最初よりもいいと思うわ。それに、潤くんもこの曲が好きなんじゃないの？」
「ま、まあな」
「ロックバージョンも作ったんやな。結構ええ感じやで」
やはり、ロックが一番しっくりくるのか、潤の顔は生き生きとしていた。
「でも、この曲に関しては、最初の方が素直でいい曲に聴こえるよ。ね、マイメロもそう思うでしょ？」
歌に聞かれたマイメロは、ニッコリと微笑んだ。
「マイメロね～、この曲が一番ヒットすると思うわ～～」
誰もがそう思っていたのだが、ロックを好きだという潤の意見を尊重して、セールスに関しては言わないでいたのだった。ある意味地雷ではないかと思い、歌は潤の様子をうかがった。
「いやいや、俺はやっぱりロックで行くぜ」

潤はパソコンを閉じると立ち上がった。
「え〜もったいないよ〜〜マイメロこの曲すごく好きなのに〜〜」
食い下がるマイメロに、
「あたいも潤くんはロックが一番いいと思うよ。曲は全部いいけどさ、どれも恰好がイマイチにしか見えないいんだよねえ」
とクロミ。
「面白かったゾナ。でも、潤くんらしさはなかったゾナ」
すると、毎日見ていたクロミが首を傾げながら言った。
「そうかもな。テンション低い潤くんは、潤くんらしくないもんな」
「そうねえ。マイメロの言う通りもったいないけど、無理をするくらいなら……」
潤の意見を真菜と美紀も尊重したいと思ったのだろう。
「そうだね。私たちが決めることじゃないし。せっかくの名曲だけど、ライブが出来るようになるまで封印すればいいんじゃないかな？」
「そだね〜〜歌ちゃん」
残念そうなマイメロ以外は全員が賛成して、潤の迷走も終わりの時を迎えた。
「じゃ、始めるとするか」
真菜は立ち上がると上着を脱ぎ、潤の腕を引っ張った。

「え？　え？」
そして、有無を言わせずトレーニングルームに連れて行った。
「ロックでやる言うたんは潤くんやろ。となったらトレーニングするに決まっとるやん。さ、いくで」
「……ですよね～～」
残った歌たちは顔を見合わせて笑い合った。この一週間で潤は成長したに違いないが、トレーニングをしている潤の顔を見ていると、元に戻っただけのようだ。

トレーニングですっかり力尽きた潤が、パソコンに向かっていた。開いているのはYeahTubeの画面だった。
「おー、二時間足らずでこの閲覧数！」
潤の下がっていたテンションが急上昇した。潤は夕食後に、歌たちに絶賛された曲をYeahTubeにアップしていたのだ。入浴後思い出してパソコンを開いてみると、再生数は百回を超えていた。
コメントも何件かついていて、かなりの好印象だった。また、この曲によってイメージチェンジを積極的に勧める内容も多かった。

「惑わされるな、俺」

そう言いながらも、潤はクローゼットに向かうと、洗濯を終えたチェックのシャツに袖を通して鏡に向かうのだった。

あとがき

光陰矢の如し。
本当に一年一年が早く感じられます。
一昨年長女が結婚したと思ったら、昨年私にとって初めての孫が生まれました。丁度還暦を迎えた私はジイサンというわけです。その初孫もあと二か月で満一歳になります。
私が通う寿司屋の常連さんで、私より一足先にジイサンになったM氏は、よほど孫が可愛いのか、客たちが頼みもしないのにケータイに保存してある孫の写真を見せてくれます。
（こういうジイサンにはなりたくないなあ）
と、その時は思ったものでした。ところが——。
いざ自分がジイサンになった途端、自分で撮ったものや、長女がLINEで送ってくる孫の愛らしい写真をスマホにせっせと保存して、フォルダが満杯になる有様。
寿司屋でも、さすがに自分から孫の写真を見せることはありませんが、孫の話題になると、
「見たいって言うんなら見せてあげてもいいですよ」
と言っている私って、いったい……。

言われたお店の大将、女将さん、常連さんも結構ですとも言えず、
「はい……見たいなあ」
と言ってくれて、私の孫の写真を見ることに。
大概は、「可愛い！」とか「目鼻立ちがしっかりしてますね！」とか、お世辞を言ってくれ、ジイサンは目尻を下げっ放しです。
揚げ句の果てに、私のことをこれからは『山G』と呼んでね。山ジーと下げるのではなくて、山Pのように、Gはやや上げ気味にね……などと言う始末。
ホント、困った山Gです。
まあ、それほど孫は可愛いものなんですね。
(M氏、ごめんなさい。バカにした私が悪うございました)
と心の中で謝る今日この頃であります。

さて、初孫の話はこのへんにして、早いものでラノベの『おねがいマイメロディ』も今回で三冊目となります。
今回は短編集で、慣れているテレビのシナリオを一本一本書いていく感覚で、長編を書くより片肘張らずに気楽に書けたと思っています。
毎回書くたびに思うのですが、『おねがいマイメロディ』に登場するキャラクターーっ

て、みんなキャラが濃いというか、ハッキリしているというか、凄いですねえ。
でも、アニメーションにしろ、ラノベにしろ、キャラクターが起つということは、一番大事なことだと、私は思っています。
今回の中で、私の一番のお気に入りのキャラは……やっぱり、メロママの局様です。
マイメロもウサミミ頭巾も凌駕するその圧倒的な存在感は、自分で言うのも変ですが、脱帽するしかありません。
この御方、どこの世界、どこの時代へ行っても、陰の支配者になれるのではないでしょうか。

最後に、プロットの段階でアドバイスをして下さったサンリオの関係者の皆様、毎回素敵な表紙と挿絵を描いて下さる宮川知子さん、そして、原稿を辛抱強く待って下さったPHP研究所の前田眞宜さんに感謝の意を表します。

二〇一五年二月　　　　山田隆司

〈キャラクター著作〉
株式会社サンリオ

〈企画原案〉
ａｋｉｎｏ

〈企画協力〉
株式会社ウィーヴ
株式会社スタジオコメット

〈装丁〉
AFTERGLOW

〈作画協力〉
Ｊはにわ

〈編集担当〉
前田眞宜

スマッシュ文庫の最新情報はこちら！
http://www.php.co.jp/smash/

本書へのご意見・ご感想を
お寄せください。

宛先
〒102-8331　東京都千代田区一番町21
株式会社PHP研究所　文藝出版部
山田隆司先生
宮川知子先生

スマッシュ文庫

おねがいマイメロディ　短編これくしょん
2015年４月21日　第１版第１刷発行

著　者　山田隆司
監　修　株式会社サンリオ
イラスト　宮川知子
発行者　小林成彦
発行所　株式会社ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102-8331　東京都千代田区一番町21
文藝出版部　☎03-3239-6251（編集）
普及一部　☎03-3239-6233（販売）
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/

組　版　朝日メディアインターナショナル株式会社
印刷所
製本所　図書印刷株式会社

ISBN978-4-569-76345-3